
手を引く勇者と引きずられる魔王

hiko8813

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

手を引く勇者と引きずられる魔王

【Zマーク】

Z5998W

【作者名】

hik08813

【あらすじ】

正体不明な世界で暇を持て余していた魔王（ ）と、そんなヤツにある目的で会いに行つた勇者（ ）。

刺激が欲しくてたまらなかつた魔王が、暇つぶしの為にと勇者のお願いを聞いてしまつたせいで、色々振り回される話です。 10 / 10 一章まで完結しました。

基本的にコミカルな話にしたいのですが、物語の進行上どうしてもシリアルスッぽくなる話も出でてきます。そういう話が苦手な方は

「注意ください。

0・ある魔王の懲痴（前書き）

はじめまして。小説を自分も書いてみたくてやってしまった。
もしも気に入つてもらえたなら嬉しいです。

基本的に主人公視点で書いています。一部に残酷描写と考えられる
部分がある（予定の）為、ご注意ください。

0・ある魔王の愚痴

なんか面白い事が起きないかなーと思つ。

面白いコトなら何でも良い。今も俺を苦しめ続けている退屈という名の暴力から全力で逃げたいのですよ俺は。何か良いアイデアがあれば是非お願ひしたい。

自分で考えろって？ そこを何とか。もう自分で考え付く限りの暇つぶしを試した後なんだよ。もう飽き切つて、何するにしてもやる気が出ないんだよね。

「こんな事ばかり言つてると、もしかしたら俺を「つまんねーつまんねー」と口だけ動かしてゐぐつたらな男だと思つたかもしないけど違うからな。俺はそんなんぢゃないぞ。

ホントだつてば！

……すまん、ちょっと取り乱した。が、しかし。

そうじゃないんだ。解かってくれ。な？ な？ 餅やるからさ。今話題のすっぱい果実を贅沢に使つた果汁1000%の餅。なんで100%を超えて1000%なのかは聞くな。俺も知らん。

え、要らない？ あ、そづ。

ま、ともかく。

俺はそんなんじゃないんだ。こう言つちゃなんだが行動力はあるほうだ。叶うなら今すぐに元の世界へ飛び出したい所存だぞ。じゃあ行けばいいじゃないかって？ それが出来ねーから困つてんですよ。俺は今、ものすごく。

外に飛び出せない所にいるんだ。俺は今閉じ込められているんだよ、このなーにも無い世界に。見てよコレつまんねーだろ？ 見渡す限り白しろシロ。この如何にも寝るだけって感じのボロ家だけがあつて後は見ての通り。そのボロ家も見たとおりホントにベツドしかない。何故か腹は空かないしそれに伴うアレとかも起きないから、お見せできないような光景になつていないので救いといえれば救いだ。

何か発見が無いかと試しに十分ほどボロ家から真っ直ぐ歩いてみたんだが、ふざけた事にたどり着いたのはこのボロ家。たつた十分で世界一周は間違いなく世界記録だな。ぶつちぎりの。

……この状況も自分のセンスも笑えねえ。出口が無いんだ、ひとつこにも。出口さえあれば陸から沖に100km離れた無人島からだつて、世界最大の砂漠ど真ん中からだつて脱出してやるのに、ホントビリ探しても出口が無かつたつ一つケです。

ひでーよな？ 虐待だよな？ 気狂うよな？

あまりに暇すぎて実はこの家、一度ぶつ壊した。

んでもまた組み立てたものだつたりする。

いや、そんな田で俺を見ないでつてば。や、俺だつてそんなつもりは無かつたんだ。たださつき言つた世界一周感動のゴール地点にほほんと突つ立つてたボロ家をみたら無性に腹が立つてさ。つい。

えへ。

あーもーそんなに引かなくつたつていいじゃん。ほらほらほら
きて。

でもやー、こんなトコに何年も居る俺つて凄くない？ よく気が
狂つてないとと思つよホント。

なに？ ビジビジこんな事になつたのかつて？ 事故だとか？

あー。うふ。せっかく話つたけど閉じ込められたんだよねー、故意
に。

そいつひでーやつなんだよ。こいつはただちょっと世界征服でも
しようかなつて思つただけなのにわ。……世界征服は気ままに出来
ることじやない？ うん、そう考える貴方は全く正常な感覚の持
主だと思つ。ただ、俺ん家だとフツーに話題になるんだよ。世界征
服つてのが。

ん？ 僕の家族が何をやつてるのかつて？ んなつまんねーコト
聞かないでよ。じゃあ俺をこんな所に閉じ込めた犯人の名前？ え
ーと、面と向かつて聞いた訳じやないんだけど、仲間らしきやつら
からゴーシャつて呼ばれてた。変な名前だよな。あはは。

……あー。思い出したらまたムカムカしてきた。ちくしょー。い
いなー。あいつらは世界を自由に歩きまわれるんだもんなー。ひで
ーよなー。俺が何したつてんだよ。そりや確かに世界征服しよつか
なーつて思つてたけどさ。思つただけなんだよ。本當だつて。最近
は頭の中の妄想まで取り調べられんのか？ 時代つて変わるよなー。

今思えども、昔はよかつたよ。あんときせあれで親から憎むほど
の愛情をもひつてたけどまだこゝよかマシだったな。死ぬほど扱か
れたけど何にも無い此処と違つて刺激があるし。本当に何回か親
に殺されかけたけど。「愛情よ」なんて戯言を抜かしながら地獄
の火炎を投げつけてきたお袋様とか、無言で俺の苦手なホーリーブ
レスを延々と浴びせかけ続けてくれた親父殿とか。あー懐かしい。
絶対あれ夫婦喧嘩のハツ当たりだつたと思うけど。

『あのひ……』

他にもさ、5歳の時にグレイトドリゴンの巣に放り込まれた時
こととかあつたなー。あんときはもうすゞかつた。卵産んだばつか
らしくて気が立つてさー。モノスゲ工勢いだつたな。見てるはず
のキール……あ、これ俺付きの執事な。昔から居る奴なんだけど、
こいつもちつとも助けてくれないでやんの。

『もしもしつ……すみませーん』

「の空耳しつこな。まあこいや、ビリモド話したつけ……あ
そつだ。

そんなこんな愛情に囲まれていた俺はもうほんとーに嫌だつた。
だつてこんな生活続けてたら近いうちに死ぬ。で、逃げ出したくて
言つやつたわけだ。

「世界征服してきまー

つて。何でこんな事宣言したかつて? くそ親父達が煩いのなん
のつて四六時中口を開けば「お前は選ばれしものらしいのでちやつ

ちやと世界くらい征服して来い」なんて言う訳よ。何なんだよそのテキトーな予言は。その頃は正直世界とかにあんまり興味なかつたし面倒そだからそんな予言無視していたんだけど、段々身の危険を感じるような愛情を向けてくれるようになっちゃつてさ。両親と執事の三人がかりで闇討ちとか。鬼だよねー。愛が歪んでるよねー。だから世界征服に行くつて言えばこの家から逃げられると、そう思つたわけ。

そこまではよかつたんだけどさー。

自由に歩ける初めての異世界が嬉しくて舞い上がっていた俺は、あちこち観光に出かけた。市場とか行くとさ、見たことも無い美味しそうな物を並べている屋台とかずらつと並んでいるからもう堪らないよね。あちこちへ食べ歩きツアーを毎日絶賛開催したよ。そんな事しながら辿り着いたあの町でも、何か目新しい物は無いかなときよろきよろしてたらや、いきなり大勢に囲まれたんだ。

がちやがちやと汗、ダラダラ出そうな鎧着込んだのがざつと千人くらい。あれ?おかしいな、と思つたらあれよあれよという間に捕まつて偉そうな髭もじやオヤジの前まで連れてかれた。抵抗?勿論しないさ。だつて俺何も悪いことしてないから。

通じなかつた。

見事なまでに俺の言い分は無視され、俺はそのまま牢屋に閉じ込められた。

ほら、俺これでも魔王の息子だし。やっぱフツーの人から見ると怖いのかな、なんて。

あれ言わなかつた? これでも魔族の王子やつてるんだ俺。よくあ

るじやん御伽噺に出てくるアレよ。昔俺も良く読んだよ、悪い魔王を勇者がやつつけるって話。好きだつたなあ。格好良いよね勇者つて。聖剣エクスガリオン欲しいなあ。

……ああ、話が逸れた「ゴメン。捕まつた後の話ね。俺これでも平和主義だからさ、断食してアピールしたわけよ、どつかの聖人みたに。我ながらけつこう続いたなあ、3日つて。

でもやつぱり何の効果も無かつたし、ハラへつて段々馬鹿らしくなってきたからもう止めようかなと思った時、ちょっと強そうな男率いる集団がやってきたんだよ。

そいつら俺がフレンドリーに話しかけたのにガン無視で大掛かりな魔法を唱え始めてやんの。人間にしてはけつこうな魔力だつたと思う。でもま、こつちは鎖に繋がれて動けなかつたしそこまで大した魔力でもなかつたから殺されはしないだろうと大人しくしていたら。

何度も思い出しても溜息が漏れる。

此処に「ご招待されたんだよ。

浅はかだったと思ってるぞ。でもさー、何遍も言つてるけどちょっと酷くない？ 俺マジで何もしてないんだつて。見た目だつて人間と違うのは銀髪つてコトと、人間と比べてちょっとだけ尖つた耳だけで、ほとんど変わらないしさ。それなのにさーこんなヒデー所に飛ばしやがつてあいつらこそ悪い魔王とその一味だと俺は確信したね。此処から出たら、

『あのつ！…すみませんつ！…』

「うめせよ姫俺の記念すべき独演会通算一万回目を邪魔すんじ
や」

……ん？ やけにハツキリ聞こえたな今の姫。

「そ、姫じやありますん」

やつぱり聞こえた謎の声の方に振り向くと、そこには黒髪の
小柄な女の子が。

誰？

「は、初めまして魔王さん。わた、わたくしは勇者のリアと申しま
す」

……誰？

0・ある魔王の愚痴（後書き）

頑張つてコメーティーを田指していますが、小説つて難しいです。

1・「私と一緒に旅をして欲しいのや！」

「どうなつてんだよ。

何で今俺は良く分からん誰かとお茶しているんだろう。

「ですからね、私と一緒に旅をして欲しいのです」

顔が隠れる程のチョコレートパフェを幸せそつとつつきながら、目の前の誰かさんが頬を染めて言う。俺の注文した物はまだ来ていないので先に食べてもらっているのだが、かなり美味しそうだ。

ちなみに俺は『ジャンボデラックススーパー』という名称の、この後に何が続くんだよと思わず言いたくなる品物を注文した。金持つてないけど目の前のコレが奢ってくれるらしい。

もう一度目の前の少女をよく観察する。背の高さは俺の肩くらいで、何処となくあじけなさが残る雰囲気なので十五、六歳くらいだろうか。ちなみに俺の歳を人間に換算すると大体十七、八くらいだけど興味ない？ よね。うん。

少女の容姿は恐らく可愛い部類に入ると思つ。やや青がかつた黒い瞳は綺麗に透き通つていて目もぱっちりしているし、透明な程の肌に添えられた鼻と口も理想っぽい形と配置ではなかろうか。肩まで真っ直ぐに伸びる艶やかな黒（だと思っていた）髪が降り注ぐ陽光を受けて青く輝いている。髪の色は黒ではなく、濃い青らしい。

服装は少しアレンジしてあるけれど、至つてシンプルな旅人の服

つてやつだ。傍らに置んである純白のマンドリン、ぜんぜん汚れていないところを見ると恐らく卸したてだらう。妙に小奇麗でなんだか旅人らしくない。そして持ち主に全く似つかわない、傍りのゴツイ剣に目が行つたところで、

「あの、聞いてます？」

「実はあまり聞いていなかつた

「……えつと、どこまで覚えてます?」

「お前が何処かに旅立ちたいとか何とか

「殆ど全部聞いていないじゃないですかっ！ とこいつかその内容も間違つてますっ！」

「俺の気が抜けた返答にむー、と唇を尖らせゆよく知らない人。チヨロついてるぞ。

「ちゃんと聞いてください。私は魔王である貴方に」

「なあ、さつきから引っかかるってなんだからどそ

形のいい眉が動く。

「何ですか？」

「とりあえず一つ田。俺確かに魔族だけじか、魔王じゃないんだ。魔王はおれの親父でまだピンピンしてゐはずだが」

「あなたのお父様ところのはあのジョン・サイ王ですね」

仮にも勇者が魔王を捕まえてお父様は無いと想ひつ。

「……そうだけ？」

「残念ながらすでに亡くなられています。もう100年も昔の事ですで私が直接見た訳ではないのですが」

脳の回転は速いほうだと思っていたがそれはどうやら悲しい思い込みのようだ。今言われた事がちつとも理解できない。

「すまん。もう一度言つてくれないか。どうも今まで変な所に居たせいで耳と脳がとろけてる感じなんだ」

「ですから、100年前に先代の魔王ジョン・サイさんは亡くなっています。ところ訳で、息子である貴方が魔王さんつて口トになるんですね」

はあ、そうですか。そう言つてもう一度相手を見る。

嘘をついているようには見えない。やるな、なかなかのポーカーフェイスだ。だが勇者が善良な市民を騙すのは良くないな。

「いつも信じよつとしない俺に向かって不思議そうに首を傾げる田の前のこやつにもちろんと解る様に、丁寧に説明してやることにある。

「だつて俺ちょっと前に親父に会つてゐし。100年前に死んでたら話が全然合わないだろ」

「最後にお父様に会われたのって、新王期の何年くらいですか」

「えーと、確か1002年くらいかな。そのあとすぐ元気なのが世界に来て、大体半年位ほどの世界を見て回っていましたと黙つ」

と説明したのと、どうやらひとつも悔心がいってこない様子。仕方ないので壁の方を指差す。

「だって今は新王期1005年だり？ もじのカレンダーにも“05”と書いてある

つまり約3年もあるの頃まわしい空間に囚われていたのか。良く気が狂わなかつたな俺。

ま、それは置いておいて、どーだ参ったかニヤリと悪者ぶつた笑みを浮かべてみる。どうみても、嘘は止めてほんとの事をグロしちゃいなよ。ね？ ビ�してセコで悲しそうな顔をするの？

「あの……今は新王期2005年です。本当です、信じてください」

「こせん、じなん？」

「2005年です」

「せんじなんじやなくて？」

「まつまつま。まさか。いくらなんでも1000年は無くなっちゃ」

確かに俺はあのフザケた真っ白な世界に長いこと閉じ込められた。でも自分の感覚ではせいぜい数年。おまけしたって10年も居なかつたはずだ。時を忘れるほど愉しい世界では断じてなかつたぞちっくしょう。

現実を認めない俺に対し勇者様は「あ」と呟いてから何やら俺に差し出した。

月間誌”極上スワイーツ”の5月号だった。

ほつ、確かにこれはうまそうだな。む、目の前のパフェもこれに載つてゐるぞ。有名な店なのか此処。そうだ、さつき頼んだのにつつともこない『ジャンボテラックススーパー』も載つてないかな。どんなシロモノだあれ。

「違います。年のところを見てくださいよ」

……わかってるさ。イマイチ勇気が出なかつたけつすよははは、
と白い歯を見せながら

確認したそれは何度見ても2005年5月号だつた。

ちやぶ台返しをしようとしないことに気付く。勇者様に思
いつきり水とかブチマケちまうし。嗚呼、この感動を思いつくり表
現したいのに。

「あの、魔王さん……」

はつ。

我を取り戻した俺は周りからの視線に気まずい思いをしながら着席した。いい加減真面目に今の状況を考えよつ。

長いこと閉じ込められていると思っていたが、まさか1000年も閉じ込められていたとは思わなかつた。そんなに長いこと一人遊びを続けていられるなんてある意味ショックだ。俺はひょっとして一人で遊ぶことがものすごく楽しかつたのかもしれない。

「あの、大丈夫ですか？ そんなにがっくり下を向いて……気分が悪いじようでしたらこの剣を翳せば」

「何やつて……ぐはア！？」

むしろ病んでいるのは心の方だつたが、勇者が剣を掲げた直後から本当に気分が悪くなつたので慌てて止めさせる。

「？」

ヤバイ。それヤバイよ聖剣の類だ。何て名前の剣かは知らないけど、さつきから感じている軽い頭痛はコイツのせいなのか。

「？？」

「いや、可愛く小首を傾げてもうつても駄目だ」

「治りませんか？」

「むしろ悪化した。よく考えてみるつて。魔族に聖剣向けるのって死刑宣告だ」

わたしは平氣なんだけどな、と不思議そうに剣と俺を見る。

「それはお前が勇者だから……ってそつだ気になる事その2。いいか？」

「あ、はいひげ」

ようやく収めてくれた天敵にほっとしつつ水を飲む。つーかまだかよ！」注文の品は。

「あー、なんだ。さつきから当たり前のようにな話しているが」

「はい」

「キリッてゆーしゃ？」

「はい」

いやいやいやいや。だってさ俺が見たゆーしゃってやつは男というかオッサンだし、パーティの中には確かに一人は女いたけど魔法使いつぽかった。そもそも女の子って勇者になれるの？ 御伽噺にそのパターンは無かつたな。

「ほんとうですかば。……まだまだ未熟者ですけれど」

おもむろに服に手をかけ始める女の子。おいおい待ってください

よ俺だつて心の準備つてモノが。

「なんだか目つきが怖いです……」

「気にするな。んで、なにしたるんだ」

「……んじょっと。ほり、リリテ聖痕があるです。ね？　これ勇者の証なんですよ」

突如衣服を脱ぎ始めたときはどうかと思ったが、どうやら見せたかったのは体にあるアザの様なものらしい。胸と右肩の間のちよつと際どこといふこそそれはあつた。

「おー、確かに見たことがあるぞそれ、親父に魔王としての帝王学とかなんとかいうのを叩き込まれた時に見た記憶が。」

「ね？　これで信じてもらいました？」

赤くなつた頬で言われるといつちまで恥ずかしいやんか。はよ服着なさい。

「ほん。

田の前のこの子が勇者だつてのはまあ認めるにじよつ。親父が死んじまつた事は確認しようが無いけどまあ話を合わせてみても良いだろう。しかし、そうなると気になる事その3が当然出てくる。

「俺は魔王じー

「はー」「

「キミは勇者だと

「そのとおりです」

「こつちやん初めにキミ何でこつたか覚えてるか?」

「『私と一緒に旅をして欲しいのです』ですか?」

正解。一字一句完璧だ。

……これはあれが、1000年後の世界で流行してこむジョーク

なのか。

「?」

小首を傾げて説明を要求する不思議ちゃんはびつやら大真面目に
言つてこむし。

「あのな、どこの世界に勇者と魔王が一緒に旅する世界があるよ?・
何で? ジョーク? 何かの企画なの?・」

「え、ドッキリって何ですか?」

なんでもない。なんでもないからもう一度よく考えておくれ。

「ぬかみを押さえながら一つの考え方辿り着く。

あーあれだ、この娘魔王が世界征服といつ悪行をする存在だって
「ト解かつてない氣がする。よく考えると親父は100年前に逝つ
ちまつたらしく」こつは魔王といつものを見た事が無い筈だ。どん
な教育されたか知らないがその可能性はあるかもしね。

「これは現実を突きつけいやつ。

勇者の使命は世界平和であり、魔王の目的は世界征服だ。一緒に
居られるワケがない。大方このほほんは魔王の目的を慈善事業と
でも勘違いしているんだろう。現実を知つてショックを受けるかも
知れないが、これはハッキリ言つておくべきだな。

「ラップに残つた半分ほどの水を一気に飲む。うし、作戦はいつだ。

勇者の使命は？	世界平和	魔王の目的は？	おおか
た慈善事業とでも思つている	すかせらず突つ込む	お勉強	
タイム	じやあ私達敵だったのね	ふはははは	完璧。

一つ問題があるとすればラップをどのよつに遂行するかだがそ
れはこの感性に委ねよ。ふつつけでGOだ。

「あなたのお仕事はなんですか？」

わしづやわしづやと葉巻を粗儀しきくから吐く。

「立派な勇者になる」とや

「シルヴィアしてゆよ。こいね、そういうの好きだよ俺。つてそう
じやなくて、

「では、その立派な勇者のお仕事はなんですか？」

「世界を平和にすることです」

はいよくできました。では問題です！ ジャジャーン！

勇者の仕事とは世界を平和にすること、で・す・が。魔王の仕事とは一体何!? とあ答えを張り切つてビリビリー！

「世界征服です！」

「知つてんのかよお前！ なんだよそれ！」

俺馬鹿みたいじゃねえかよ。

一度目の絶叫に周りの田が再び集中する。ああいかんいかん周りの人に迷惑かけちゃ駄目だつてよく言つよね「メンナサイ。

「常識ですよね」

両手を軽く挙げて喜ぶヤツの田の前で頭を抱えて蹲る俺。

困った。知つてる上で俺と一緒に旅する企画を持ち込んで来やがりますか。目の前の生物はひょっとしてあんぽんたんなのかかもしれない。そういうのはちょっと。

「失礼なこと言わないでくださいよ！」

「人の心を読むんじゃないつ

ああもつ。ここまで言わなきゃ解かんないかな。

「魔王が生きてたら世界征服されひやうんだぞ？ そいつなつたら平和もなにも無いだろ？ ほら、これだと勇者が困っちゃう。戦つて倒さないと平和はやって来ないぜ？ 僕達は言わばコインの表と裏みたいなもんだよ、絶対相容れない存在なんだ。そんなのが一緒にいるなんてまずこと思わない？」

「思いません」

「なんでだよつ。

あーも一つケわからなくなってきた。なんかここまで血信満々に言われると俺が間違つてるような気がしてきて困る。

「わたしの事、嫌いですか？」

勇者を好きになる魔王が居ると想つてゐるひねりとしつて大物なのか。

いや、嫌いってワケじゃないけどね。あーもーそんな顔するなよ。ね、頼むから涙田にならないでよ俺思つてさう悪者じゃんか。魔王だけど。

「ぐすつ……はい、やつぱり魔王さんつて優しいです」

じこをじう取ればそういうふにならうか。それにしてもこの勇者魔王に対して敵対心つてものが皆無だよ。なんだか調子が狂う。

いかん、気を取り直す。この問題は当面置いておいて質問その4へGOだ。

「ところでそれ、なんて剣？　見た所魔法が掛かっているみたいなんだけど」

セツキからプレッシャーを掛けてくる剣を睨む。すると余計に頭痛が酷くなつた。

聖剣の類だらうとは思つたけど、よく考えたらこんな世間知らず勇者が持つてる剣だ。旅の序盤で手に入れたチャチなシロモノだろう。けど、妙にプレッシャーがあるんだよなその剣。

「エクちゃんですか？」

なんだその可愛らしさどうでもいい微妙な名前は。

「エクスガリオンのエクちゃん。以前洞窟で見つけたんです」

未だに来ない注文のせいで飲み飽きつつある氷水のシャワー攻撃！

「ひやあっ！　魔王さんひどいです！」

思い切り顔が水浸しになつた勇者の非難も耳に入らない程ビックリした。

「 ものすゞこの見つけてんじゃんかよー 何もう旅終盤なの実は俺
ここで終了ー。」

「 え。エクちゃんを存知なんですか？ 憲いんですかこの子、

「 お前知らんのかー？」

もつゞからシックロニドーのか解らなくなつてもこれだけは言
わねばなるまー。

「 あのな、エクスガリオンといえばかの有名な勇者アレキザイドが
持つていたとされる最上級の剣で、勇者は魔王を打ち倒す為にこの
剣を求めつづレベル上げするのが王道パターンなんだよ。それがな
んだよもつ見つけちゃつてるじゃんかお前」

どつりで嫌な汗が出るワケだ。

「 ……でも私は、そんなすゞい剣を持っていたって何も出来ません
でしたから」

「 な、なんだよ。急にじょぎて」

突然の落ち込みっぷりに驚く。ちょっと強く言い過ぎたか？ と思
つたがどうやらそうではなかつたようだ。

「 世界を平和にする為に、色々なところへ旅に出ました。魔物も一
杯倒しました。王様からも沢山感謝されてご褒美もたくさん貰いま
した。けれど、それだけじゃ世界は平和になりませんでした」

どうこう事だらう。魔王である俺はずつと居なかつたわけだし、

その剣があれば雑魚魔物くらいすぐに一掃できそうなんだけれど。て
ゆーか話脱線しまくりだなおい。

「魔物さんが原因じゃないんです。確かにその、魔王さんには申し訳ないんですけど、沢山魔物さんを倒したおかげで、魔物さんから被害を受けるということは無くなりました」

それで良いんじゃないでしょうか。あと魔王に謝る勇者って見た
こと無いんですけど、シシ「いいするだけ無駄みたいだからもう良
いや。

「でも、魔物の問題が収まつたと思つたら、次は人間同士で争いを始めてしまつたんですね」

詳しく述べは言わなかつたが、なんでも生まれ育つた国が滅んでしまつたらしい。結構あつさりと話しているけれど、かなりキツイ話だ。

100

詳しい事情は分からぬが、酷い事をする人間も居たもんだ。ひよつとして俺を閉じ込めやがつたやつの末裔かそいつ。

「そ、それはわかりませんけれど、とにかく皆が言つていた魔王さんを倒せばそれで世界は平和になるつていうのは間違いの様な気がしたんです」

なるほどね。そう考へるのは何となく解かる気がする。

でも、だからといって俺がお前と一緒に旅立つという流れには結びつかない気がするんですけれど。魔王は居ないに越したことはな

「どひして俺を助けた？　いや助けてくれた」と自体はものすゞぐへ
感謝してるんだだけどや」

俺を助けでどひよつて言つてのアナタ。目的は？　ただ旅を一緒すれば良いのかよ。お前はこの世に平和を築きたいんだろ？
俺助けたら災い呼ぶとは思わなかつたのか。魔王だし。

「一緒に世界征服しあやこませんか？」

せびせしのシャワー攻撃再び。

「ふえええ……」

すまん。いやしかしの無邪氣れに騙されてしまふせんの娘
言ひやがつました。

「おひ、おまつ。ちよつとそこ座りなさい。」

「やつから座つてこますナゾ……」

「やつそこー。そんな細かい話なんぞひども良こんだよー。

「お前が、自分がなに言つてるのか解かつてゐる？　お前勇者様よ？」

「でもーーわたし、世界を平和にしたいんですー！」

「いやー、だからお前が世界征服したら」

あれ？ 勇者だから良いのかひょっとして。
ん？ でも世界征服に良いも悪いもあつたつけ。

「私達がこの世を平定した暁には絶対に世の中を平和にして見せます！」

こんな所で所信表明されても。

「そしてその為には是非とも世界征服の先輩である貴方にじご指導して頂きたいと思つまして」

「本氣で言つてるのか？」

「おお真面目です。道中征服の手解きお願ひします」

「どうしても？」

「どーしてもです！」

じー。

じー。

じー。

全く不眞面目で見つめてくる。傍から見たときつと奇妙な光景
がどのくらい続いたか解らないが、先に折れたのは俺の方だった。

「わかった。わかったから」

そんなに顔近づけるなって。

「やつた！ 有り難い！」
「…」

良いのだらうか。ほんとだ。

「私頑張りますね！」

平和な街の一角で世界征服を宣言する勇者。気分が高揚しているのか、ほんのりと上気した肌に染み一つ無い事まで良く見える程に、顔がすぐ近く近い。

「分かつたから落ち着いてくれよ」

「……あ、『じつ御免なさ』

真っ赤な顔でペロペロしてテーブルに頭ぶつけた。ああほら泣かない泣かない。ね、飴やるからさ、果汁100%で体にめしあや良いらしきぞこれ。

「おひひいです」

そりやよかつた。

ところで俺の『ジャンボデラックススーパー』まだ？

2・「やつ勘弁してやだねこ、ホント！」（前書き）

前話にくらべて随分短くなつてしましました。
各話なるべく同じくらいの分量にしたいのですが、難しいですね。
努力したいと思います。

2・「もう勘弁してください、ホント！」

店を出た』機嫌な勇者と退治された魔王が並んで歩く。

「凄かつたですね～じゃんぱでらつぐすすーぱー」

その言葉に反応してまた腹が嫌な感じに悲鳴を上げた。

俺はいま勇者の策略にまんまと乗られて大ピンチです。

「わたしお財布忘れちゃった」との衝撃のカミングアウトをしてくれた勇者。呆然とした俺の目に飛び込んできた食事代がタダになるとの張り紙。その条件が目の前の山を制覇することだった。

だつてさ、勇者と魔王が一人で食い逃げなんてカッコ悪すぎるだろ？

「また食べましょうねあれ

「一度と食つか！」

『巨人族専用つて書いとけ。

椅子に座る俺の頭より高いアイスの山だぞ？ あんなもの誰が食うつてんだよ。

「わたしどまだいけますよ？」

半分以上食いやがつた異次元胃袋の持ち主が余裕の笑みを浮かべ

ている。

甘いものは別腹と言い切つたコイツの胃袋はある白い世界に通じていたに違いない。だって明らかに胃袋の体積と食べた量に矛盾がある。それくらいの量を平気で食べやがったのだ。

そしてまた悲鳴を上げる俺の体。

ぐつ、これ以上の話題を引っ張るのは精神的にも拙い。強引だが話を変えよう。運良く休めそうな広場を見つけ、俺はふりふりになりながらベンチを手指した。

* * *

「ああ、いい天氣ですねー」

「やうだなー」

「こんな陽気だと甘いものが食べたくなってきませんか?」

「もう勘弁してやれー、ホントー」

賑やかな街の中心から少し離れた公園で、ベンチに座つて語り合つ

勇者と魔王。

俺は未だに半信半疑だった。実はこいつってのほほんと駄弁つている事こそが俺を陥れる罠だつたりしないかと。今斬りかかられた確実にやられる自信あるもんな。そもそも勇者がこんな小娘つて

のが怪しい。裏で操つてる『真の勇者』とか出てこねーだろつた。

「わ、わたし本物ですってば」

「心を読むなつ」

まつたぐ。あれか、何か読心魔法でも使つてゐるのか。今からでも「やっぱ一緒に行くの止める。えへ」とか誤魔化して逃げようかな。

「そんな。ひどいです」

「だから心を読むなつての！」

「うう、『めんなさい』。こんな事他の人とは一切無かつたんですねど、なぜか魔王さんの考えていいる事つて解っちゃつ氣がするんですね」

「何となくにしては嫌過ぎるほど正確なんんですけど。

「せつと私と魔王さんが出来るのは運命だったと思つんですけど」

ああそつだらうと、でも間違つてもこんな形ではない氣がする。何故そこで顔を赤らめて嬉しそうにしているんですか貴女は。

それにしても、と街を見渡す。輝く緑が眩しい公園では子供から老人までがその光を浴びて皆一様に笑顔だ。なんというか、絵に描いたような平和な風景だ。

「なあ。 じゅうやつじ見る限りすづげえ平和つぱいんじすナビーの世界。」

爺ちやんと孫が白い鳩に餌やつてるよ。

「わいですね」

とても優しい顔で、相槌を打つ。誰かが嬉しそうにしている姿を見ることが多いが、こいつは嬉しいのかもしれない。まだ殆ど何も知らない相手だが、そんな気がした。

「確かにこの街は平和です。でも遠くの国では今でも人が死ぬ争いが繰り返されているんです」

命を奪い合うなんてとても悲しいことだから、どうしてもそんな悲劇をなくしたいんです。そう呟く顔は確かに勇者っぽかった。ちよつと感心する。

「なあ勇者。お前や、」

「リアです」

ん?

「最初にする」と決めました。私のことリアって呼んで下せー」

「いや、話に繋がりが全く無いですね。何でそんな怒っているんだお前」

「私はコアつていう名前があるからです。私も魔王さんの」と
名前で呼びますから」

「……まあ、いいけど。俺の名前は

はつ。

「呪いか？呪いで使つ氣なんだろ。名前書くだけで相手を殺せ
る魔導書とか」

サクシ

「あー？ つてさやあああああつ……」

流れのよつな動きで伸びてきた聖剣が額に浅く刺さつた。

「酷いですつ。わたしそんなことしませんつ」

「酷いのはお前だばかちん勇者ー。どこの世界に魔王刺す勇者が

いぬな。勇者なら壁やつてつぱー。

なんだ、そつか。そつこえば当たり前だよな。……ああなんか白
い世界が見えてきた。

「つ大変つー。どつして額から血を流してー？ 今治しますからー。」

何でお前がビックリしてんだよー。といつかお前のその台詞が白
々しいのは氣のせいだよな？

「こでつ、こいででででででで！ やめり、やめてくだれこつ。魔族に聖なる波動は駄目だから止めて！」

「あ、元気になりましたね。よかつた」

田の前の笑顔が何故か怖い。……お前、やつぱり怒っているのか。「さあ、教えてください。貴方のお名前は、何とありますのか？」

考えてみれば、自分だけ名乗らないのも失礼な話だよな。何とか会話の流れが怒涛過ぎてタイミングを失っただけだし、言わない理由なんて無いんだけど、……何故か改めて聞かれると緊張するのは何故だろう。自分の事ながら解らない。

「ダメ、ですか？」

俺が黙ったのを拒否と捉えたりアの顔がしょんぼりと曇る。それから思っていたけどその顔は反則だと想いつ。

「レオンだ。よろしくな、リア」

「はー！ 改めて宜しくお願ひしますレオンさん

ぱあっと晴れる表情は、まるで頭上に広がる氣まぐれな空みたいだ。

これからどうなるかなんて全く予想がつかない。でも一応、俺がこここの世界にやってきた建前は『世界征服』だから渡りに船と言えなくもないし。どうせ他にやることも無いんだ。暫く付き合ってみ

るかの懲へなこ……よな?

「でなつ、張り切つて世界征服やつてみましょー、おーー。」

「あ、おお……」

「ほんせんがと細ひたかべ。」

2・「やの勘弁してください、ホント」（後書き）

読んでいただきありがとうございました。
どうまで続けられるかわかりませんが、少しずつでも書いていきたいと思います。

3・「やつなつたら悪いのは俺か？　俺なのか？」

「早速ですけれど、具体的にはどうしたらいいんでしょうか？　世界征服って」

「そりゃあ、世界征服って事はこの世の全てのボスになるってことだろ？　だから、」

輝く瞳が俺を見つめる。実は頭の片隅で世界征服なんてただの冗談かもしれない、と思っていたのだが……そんなことは無いらしい。すごく期待されていた。

今更ながら、困ったかも知れない。

親父から習つた方法って主に”軍事力で片つ端から制圧”になるんですけど。

ここにこじてこる勇者様の顔を見ながら思案する。

そんな事を正直に言つたらこのヒトに成敗されないでしょうか。争いが嫌いなヤツに対して問題を武力で解決するなんて手法を進言したら逆鱗に触れかねない。

いや、何故か俺に対して妙に素直な態度を取るヤツならば、俺が言えば本当に武力で世界を制圧してしまうのかもしない。本人はこんなぼやぼやした雰囲気だが、手にしている聖剣は間違いなく本物。その威力は十分世界制圧可能なレベルのはずだ。

「世界を平和にするのですっ」とか言いながら聖剣振るつて世界制覇。そして何時しか魔王と呼ばれるリア。そんな未来が想像できてしまひ。

「ここにこじてこいるリアの顔がちょっとだけ傾く。急に黙った俺を見て不思議がつてこらしこ。

「突然頭抱えちゃつてどうしたんですかレオൺさん」

「わうなつたら悪いのは俺か？　俺なのか？」

勇者にそんなことをわかつて良いのかと今更ながら悩む俺。ここでリアを更生させる事でこの世の為なのかもしれん。どうじよつ……ええい、悩んでも仕方が無い。正直に言つた。

言つた。

ピコオッ

「ばつ、危ねえなっ！　ノーモーションで突き刺していくぞじやない！　暴力反対！」

すんでの所で空を切る奇襲。死の香りがしたぞマジで。

「え、エクちゃん？　突然びついたの……わわっ」

…………何をやつてゐるのですかこの勇者。

「んつ、ここの子普段はとってもこい子なのこ、急に暴れだして……エクちゃんいい加減にしなさいってば」

「うやううアは俺を成敗しようとした訳ではなく、突如暴れだした剣を必死に宥めようとしているらしく。だがちっとも成果が上がっていない。がくがくと揺れながらもその切つ先は俺に向いていた。

「ああもひ、エクちゃん。レオンさん」斬りかからいで

その聖剣は職務を全うしようとしているだけだと思つ。……それにしても流石は伝説の聖剣、勝手に動くのか。しかし猛犬エク公も主に繋がれては手出し出来まいとつかつか。

ピカッ

「おわあつーーー！」何か飛んできただぞー！

とつそこに砲撃（？）を上空へと軌道を逸らす。うわ、かなりのパワーだ流石は伝説の剣。

「うーーー免なれこつ、エクちゃん、街中で奥義出でないで！」

「どうなつてゐんだよその剣」

「何故かものす」へ興奮してます

「何とかしるよ。お前持ち主だら、どうすりゃ治まるんだよ」

「一度切らせてあげると落ち着くと困つたんですね」

死んじまつよー。そのお願ひ聞いたら間違いなくあの世行きだよ
！ やっぱりお前怒つてこるだろー

「」のばかちん勇者他に無いのか手は… つてうわ危なつ

俺の銀髪がはらりと散る。どう McConnell に見ても食らつたらアウトだぞこれ。

「うそだ、お前手を剣から離せ。そつすりや止まんじやないのか」

持ち主からの魔力供給が無くなれば大人しくなるかも知れない。

「確かにそうかも知れないですけど、うう、離れないんですね、一回こうなっちゃうと」

呪いの剣かよそれ。……仕方が無い、少々手荒にでも放させてやる。

* * *

聖剣は持ち主の体勢など構いなしに無秩序な機動で暴れまわっている。持ち手と一体でない分動きの鋭さはさほどではないが、全く意味不明の機動を描く為動きが読めない。

とにかく、避けてばかりでは埒が明かない。道具に振り回されている未熟者に向かつて手ごろな木の枝を投げてみた。

「おお、さすが」

一瞬で木屑ビリビリか跡形も無く切り刻みやがった。あれと戦うのか。

おもしろい。

「大人しくしていろよ、リア」

頷くのを確認して、踏み込む。影を残す勢いで突っ込んだ。

互いに衝突する金属音。

剣を握る手を叩いて落とそうとしたのだが、見事に阻止されてしまう。俺に手持ちの武器などは無く、腕を持ち前の魔力で出来るだけ硬化して何とか受け止めているに過ぎない。が、その腕が早々に悲鳴をあげだした。流石は伝説の呪いの剣だけあって退魔の力が凄まじく、あまり長くは持ちそうにない。

持ち手が攻撃の意思を持つた時の威力を考えると空恐ろしいが、逆を言えば今のコイツに本来の威力は無い筈だ。ただ金属の塊が暴れているだけの物に負ける訳にはいかない。

「こいつ。負けるかつ、折角この世界に復帰できたんだ」

俺はまだ何もやつていいないんだ。復帰してからやつた事といえば、まだ変な勇者と話した事と、馬鹿みたいに大きなアイスを食った事だけ。こんな状態で死んだら情けなくて涙が出てくるのでぐつと力を込めて押し返すが、相手も負けじと押し返してきた。

「危なつー。」

唐突に聖剣から不吉な光が溢れた瞬間、強引に腕を振り払つて切つ先を変えた。直後に背後の岩が爆発に巻き込まれて、粉々になつた威力にちょっと寒気がする。闇雲に正面から剣を叩き落そうにも阻止されてしまつし、うがつかしてたら俺もあるの岩みたいになりかねない。さて、どうしよう。

「おーい、リア」

「はいっ、どうしました？」

「当たりをつけたら避けろよ」

はい？ と目を丸くした勇者を尻目にせつゝきバラバラになつた岩の破片を幾つか拾つ。思い切り振りかぶつた俺はそのまま石を投げつけた。

「あやつ！ レ、レオンさん！？」

身を竦ませたリアとは違い、剣が正確な動きで破片を打ち落としていく。それを確認した俺はやや大きめの塊を手にした。リアの顔が少しだけ引きつる。

「あ、あの、ひょっとして」

「頑張れ」

異論は受け付けない。そもそも持ち主がちゃんと猛犬を繋いでおかないからこんな目に遭つんだ。リアの訴える目を無視して、先程と同じように岩を投げつける。しかしその後がちょっとだけ違う。リアの目の前に迫つた岩が、迎撃される前に五つほどに割れた。

リアの四肢と頭を狙つよう綺麗に分かれた岩だが、当然聖剣も黙つていない。僅かな速度の差を見切つて両足、両手を狙つ岩を打ち落とし、最後に頭を襲つ岩を打ち落とした。

「つたく、手間掛けさせやがつて」

カシヤン。

聖剣が地面に落ちた。……動かないな、よし。これで剣が勝手に動いたらどうしようかと思つた。

「大丈夫か？」

「あ……え、どうなつたんですか、今」

「岩に氣を取られている隙を狙つたんだよ」

剣がどう動くか予め解つてさえいれば隙を狙つ事も簡単だ。聖剣がリアの頭を守るように動くことが解つっていたので、そこを狙つて叩き落としてやつたのだ。

ぱたり、と地面にへたり込むリア。

「どうした？ 傾いて。ひょつとして腕、痛かつたか？」

それともまさかホントに俺を擊破する算段が崩れてがっかりしてるとか。

「よかつた、ほんとに良かつたですつ

「おーおー、ビーハーお前が泣きやつくなつてるんだよ」

悔し涙か？

「嬉しいんですね」

もう、と膨れた頬がすぐに笑顔に変わった。

* * *

「それで、あの、先ほぞレオンさんが言いかけた征服のやり方に聞いてなんですかれど、」

「あ、ああ、アレな」

今の乱闘騒ぎに乗じて有耶無耶にしてしまおうと思つていたのにやつぱり覚えていやがつた。いつなつたら仕方が無い、適当な事を言つて誤魔化そう。でないとまたあの剣が暴れだして俺の命が危ない気がする。

「あー、実は、この世界には人間を裏から支配する悪いヤツがいるんだ。そいつのせいで今この世の中に争いが絶えない。そいつを探し出し、やつつけちまえば良いんだ。そうすれば世界はお前の思うままになる……気がする」

どうしよう、我ながらあまりにいい加減すぎる。こんな出鱈田いぐらなんでも流石に信じないだろうし、他にそれっぽい出鱈田を考え

えないと……と焦っていたのだが、どうやら俺の『太話を信じ切ら
つたらしい。

「これから旅の行方が非常に心配になってきた。

* * *

「それにしても、先程は本当に『めんなさい』。一度とあんな失礼な
ことしないように、エクちゃんにはきつーへ言ひておきますから」

俺がこれからの旅の行方を憂いでいる最中、リアはどこかへ唐突
に消えたかと思つたらすぐには座布団抱えて戻ってきた。

何ゆえ座布団？

と突つ込む間も無く座布団の一つを置いてその上にエク公を立て
た。

ほんとに立ちやがつた。バランス思いつきつ無視して立つてるよ
こいつ。呆れている間にリアが同じように座布団を敷いて正座する。

「レホンセヌモジツモ」

何か抗い辛い雰囲気なのでおとなしく言つ事を聞く」と云ふ。
何が始まるんだと頭の中をクエスチョンマークで埋め尽くした俺の
目の前で、リアは気にせず進行する。

「……とこわけで、ね、エクちゃん。この人は魔王だけど私の大

切な師匠なの

こいつの間に師匠認定されてたんだ。というか剣に話しかけてるよ
『マイシ。

「もひ、茶茶を入れないでくださこいつ

怒られた。でも剣に言い聞かせると、俺は軽く封印するとかそ
うこいつのを想像してたんだけど。

『しかし……』

やつ、しかしこくらなんでも本物の「さひ」ってお話をながれお
前は三歳児か。

といひで、

「誰だ今『しかし……』って言つたやつ

無視された。

「もひ、ヒクちゃん頭固じよ。この魔王さんは一緒に世界を平和に
する手伝いをしてくれるんだから

剣だもんな、ガツチガチだろ。

『魔王と行動を共にするなど、私には到底理解が出来かねます』

やつやつ、良こじと叫つね。初めてまともなヤツと口利いた気が
する。

「だから何、誰の？ 今の頃」

「エクリヤさんの声です」

黙考する」と暫し……ああそつか腹話術か、お前上手いな。あ、そうだあれ出来る？ 時間差のやつ。

『「ほんと抜けた男と馴れ合ひながら、できませぬ』

おわかの罵倒にひよひとショック。でもホント上手い。全くリアの脣動いてないぞ。

「だから違いますってば」

む、強情だな。隠れなくつたつていいじゃん。それならそれで考え方があるわ。

リアの背後に回る。不思議そつに中越しに見上げてくるリアに、後ろから抱きついた。

「……」「……」

そのままリアの口を手で覆つてやる。もひひひひつとだけビ、これで腹話術はできんだほりまつぱ。

『貴様ッ！ わが主に手を出すとは許せん！ その穢れた手を離せツ――』

「……おこロア」

「むーむー」

悪かつた。思わず力が籠ついたらしい。

「ふはつ、ど、どうしたんですかいきなり。いやべつに嫌だつたといつ訳じやなくつて、でもいきなりでちょっとびっくりしたというかあのその」

「喋るの？　あれ。」

主人を人質にされたと思つてゐるのか座布団の「ゞゞンゞゞン跳ねて怒りを顕にする聖剣エクスガリオン。

「ああ、はい。エクちゃんとは時々こいつやつてお話しながらお茶を飲んだりします」

飲むんだ。そ、うなんだ。

怒り狂うエク公に向かい降参の意をもつて、俺は両手を上げた。

再び話し合いが始まつて、ようやくエク公の方が折れた。

リアが、言つこと聞かないならここにエクを放置すると宣言したからだ。ものす「」に問題発言だった気がするが俺も自分の身は可愛い。黙つておこう。

『ふん。我が主に変なことをしたら、たたつ斬つてやるからな』

そんな素敵な捨て台詞を残して、ようやく大人しくなつたのだった。

ふん、俺に負けたからつてそんな意地になるなよ。

ズオツ

「つづぶねえな!! なにしやがるエク公!」

『貴様つ！ 我を愚弄するとは許せんそこになおれつー。』

「つづせえ！ てめえまで心読むんじやねえー。」

「もうひ、エクちゃんてばー！」

このパーティの行方がさらに心配になつてきたんですけど。本当に。

4・「レオナルドで方向音痴なんですか?」（前書き）

「んにちは。こんな拙作を読んでくださった方、ありがとうございます。

今回から場面がちょっと変わります。

4・「レオンさうって方向音痴なんですか？」

俺達は今、パレット・ハイロードという街道をのんびり歩いている。

さつきまで滞在していた如何にも平和な街はパレットという名らしい。あの街に長居しても何をやれば良いのか見えてこなかつた俺達は、とりあえず別の場所に行くことにしたのだ。ここパレット・ハイロードを道なりに進むとハイグレイ王国っていう大きな国に通じるらしいので、今はそこを目指している。

外に出て思つたのだが、流石に1000年も俗世から離れていると、地理が全く知らないものに変わつていて困る。が、意外なことに違ひはそれくらいで、今のところ文明は1000年前に比べさほど発達していないように思えるのだが……実際のところはどうなんだろうか。馬を引いて畑を耕す農夫の姿を見る限り、俺には違いが分からぬ。

ただ一つ気になるといえば、時折見かけないモノを手にしている人がいる。アレは何だろ？

「ああ、あれは方角を知ることが出来る”コンパス”です。」

物珍しそうな俺の視線に気付いたのか、横から解説してくれた。でもコンパスって昔から有つた気がするけれど、あんなに大きくなかつたぞ？

「コンパスと言つてもただ方角がわかるだけではありません。地図

を投影することが出来ますし、あのコンパスを持つもの同士、お互
いの位置がすぐに解かるという優れものなんです。」

「へー。でもさっきから何人かが持ち歩いているけど、あいつらの
位置情報がみんな判るのだろ?」

「それって困らないか? 知られたくないやつにまで、今の場所を
知られるんじゃ。」

「その心配はないです。各コンパスは固有の番号を持っていて、番
号を互いに登録した相手にのみ居場所がわかる様になっているんで
す。」

なるほど。このコンパスは最近になって発明されたマジックアイテ
ムらしい。使用者が魔術を使えなくても相手の位置が判るなんて
便利なモノが出来たもんだが、流石にそこそこ高価らしく使ってい
るのは行商人や冒険者が多いのだと。あまり普及はしていないの
だ。

「お前も持ってるのか?」

「はい、私の必需品ですから。」と得意そうに見せてくれた。大き
さはリアの小さな手に少し余るくらいで、まんじゅうみたいな丸い
形をしたコンパスの中心には何やら地図が表示されている。

「中心の三角が俺達?」

「その通りです。」このコンパスの最も優れているところはナビゲー
ション機能なんです。これさえあれば、赤ちゃんだって目的地に辿
り着けるんですよ。」

すゞいでしょう、と何故か胸を張る勇者さま。へー。ああこの灰色が山なのか。こっちの青色が川で、縁が平原。その中心を通る線がこの街道といつ具合に見るんだな。成る程コレなら迷によつがない。

俺が全くこの世界を知らない手前、自然と先導を勇者に任せる事になつてゐるのだが正直に言つて不安だつた。この勇者は恐らく平安な顔して道に迷うタイプに違いない。でもこくらなんでもコレ持つてりや大丈夫だよな。

ヒルハヤツキからキヨロキヨロしてゐるナビ、ビツした？

「……すみません、ヒル、ビリですか？」

「ふわけんなお前ー」

ボケか？ ボケたんだろうお前。ちつとも笑えないけどなー。さつき赤ちゃんだつて大丈夫だと言つてから数秒しか経つてねえぞ。そもそもなんで一本道で迷えるんだよ、ナビいらねえじやんか。

さつきまで絶好調で明るい場所を行進していたのに、気付いてみれば森の中。

いや、何で道を逸れたのかなー、とは思つていたけどね。

「困りました。おかしいですね、ビリしてこんなところに来てしまつたのでしょうか？」

失敗の原因を真剣に考えてやがる。

「とにかく、来た道を戻りつ。せつきの街道に戻ればいいだけなんだろう？」

そうですね、と同意を得たところで踵を返した。やっぱり俺が先頭にならひ。

* * *

「おつかしいなー」

10分経過。俺達はみじに途方に暮れていた。

既に往路に費やした時間は軽く経過しており、もうこの森から飛び出しても良い頃はとっくに過ぎ去っていたのに、ちつとも森を抜けられそうにないのだ。

「レオンさんって方向音痴なんですか？」

「やかまし〜わ！　このおおボケ勇者…」

誰のせいでこんな所をさまよつてると思つてんだお前。

「ひどいですー」と抗議するちんちくりんを放置して真剣に悩む。おかしい、いくらなんでも来た道真つ直ぐ帰るだけで迷うわけがない。いくら1000年の間バカをやつていたからといって、方向感覚までバカになつていたとは思いたくない。多分、おかしいのはこ

の森だ。

さつきから氣になっていた、妙に瘤に障る氣配と何か関係があるのかもしねえ。

誰かに見られている。

「敵意満点って感じだな。ここいつらか？ 森が変になつた原因は

『そのようだな』

……、君の姫さま。

嫌そうに顔を顰めて振り返ると、やつぱり上ク公が座布団の上に鎮座していた。

座布団って必須アイテムだったのか？

「困った時、いつもして上クちゃんにじついたらいこか聞くんです」

リアと一緒にだと俺が信じていた勇者像をこと、「とく否定されいくつに思えるのは氣のせいだろうか……などと思考がふらついた俺をよそに、リアは「ね、上クちゃんじついつ」と話進めていた。

『じつせりの森に居る輩が、我々を敵とみなしてうひつこっているよつでや。』

やつ。森に入った時から変だとは思つてた。野生の動物には無い、色のある殺気がちくちくと鬱陶しいのだ。

『恐らく彼らの仕業でしょう、森全体に惑いの結界が敷かれているようですね。脱出する為には術者を探して解除をせんしかありません』

「でも、探すってこの広い森の中をですか？」

不安そうに眉を寄せるコアの言つとおり、確かにそれは問題だつた。海のように広がる森は、何処までも続いていそうな程に広い。こんな広さの森をあても無く捜索したら、それこそ空腹や疲労で力尽きそうだ。

「転移魔術とか使えないのか？」

俺の勝手なイメージだと、一度行つた事がある場所にはすぐ飛んでいけるような魔術がありそうな気がするんだけど。少し面倒だけど一旦パレットに戻つたほうが樂じやないか？

「うーん……あるにはあるんですけど、敵対する結界が張り巡らされているような不安定な状況で無理に飛ぶと、困つたことになるかもしれません。止めておいたほうが良いですよ」

えー、いいじゃん頑張れよ。飛んだほうが樂じやないか。

「困つた事つて例えば何だよ」

「気が付いたら腕を置き忘れちゃつた、とか。聞いた話ですけれど、過去にそんな例があつたみたいで」

やめましょ。うん。それがいい。

「念の為に聞くけど、コンパスはどうなってる?」

外へ出るヒントが表示されていないかと聞いてみたのだが、リアから差し出されたコンパスには森を示す緑一色と中心の三角しか表示されていなかった。このコンパス最大望遠の表示半径はざつと10キロって所だから、本当なら森以外の表示があつてもよさそうだ。なのにそれが無いという事はコンパスすら影響下に置くのか、それとも森に入った瞬間に奥地に飛ばされたのかもしない。

……だったら気付けよ俺。

なんだか急に自分が情けなくなる。俺は一応魔王だつてのに、こんな罠に引っかかるって気付かないとは。

困ったことに、自分は本格的に呆けているのかもしれない。思い出せば、エク公とちょっとバトルした時もイマイチ感覚がおかしいところか、慣れないところか……とにかく本調子じやなかつた気がする。うーん、全盛の頃の感覚が思い出せない。この1000年一切戦いなんてしなかつたし。

「これからどうしましょつか、レホンセス」

「ま、悲観的に考えてもしょうがないな。ほらほらそんな顔しない。お前、勇者として今までやつてきたのならこれくらいの試練あつただろ?」

「えと、私はずっと仲間の皆さんに助けてもらつていきましたから」

えへへ、と恥ずかしそうに照れ笑いするリア。

予想はしていたが、やはりこの勇者にもパーティメンバーは居たようだ。でも今は一人なんだよな。あ、魔物退治が終わってパーティ解散したのかな。もうちょっとと面倒見ていてくれてたら良かったのに。

『おい』

無粋に割り込む声。

わかつてゐる。探す手間が省けたよ。

* * *

俺たちの代わりに丸焦げになつた木の陰に隠れながら、周りを伺う。

「何人だ？」

複数なのは間違いない。相手は結構な力量を備えているようで、いきなり仕掛けられたこの炎術にしてもまともに当たれば痛そうな威力だった。周りの大木が燃え上がり炭と化してゆく様を横目に、襲撃者を探す。

「5、6人といったところでしょうか。どうしてこんな事を……」

リアも流石に戦闘となると顔つきが変わる。油断なく辺りを伺う表情は間違いない戦士のそれだった。互いに背を向けて周りを伺う。ぶすぶすと木の焦げる音と匂いが漂つてからでは、襲撃者の姿を見つけられなかつた。

「さあな、相手に聞けば早いんだけどさ。ヒーローア」

「なんですか?」

「命を狙われる心当たりは?」

「無いですよ、そんなの」

「それじゃ、やつぱ俺のせいか?」

「え、どうしてレオンさんが狙われるんですか?」

「こいつはお前と違つて常識的なんだ、つと…」

今度は氷だ。1メートルは優に超える氷柱が片つ端から降り注ぐ。

どうやって対応しようか考える俺に先んじて、リアが進み出た。手にした剣を握り締めて1、2、345。最後は横薙ぎに一閃。5つの氷柱が使命を果たすことなく砕け散つた。

「止めてください! 私たちに争いつもりはありませんから」

リアの呼びかけに対する返事は雷撃。威力は氷の一撃に劣るが、

雷は広範囲を薙ぎ払うので回避が難しい。今度は俺が前に出た。

足元に染み込ませておいた魔力を一気に中空へ解き放ち、巻き上げた大量の土を盾のように前に固定する。相手から見れば、突如地面が垂直に立ち上がったように映つたかもしれない。狙い通り雷撃を防ぎきつた土が地面へと還るタイミングを見計らつて、ぽい、と拳大の石を適当な場所へと放り投げた。

「リア。ちょっと耳を塞いでいろ」

「はい。……どうしてですか？」

すぐわかる。

石は地面に触れた途端に閃光を発し、大きな破裂音が周りの草木を振るわせた。俺の影になるよう隠してやつたのに、それでもかなり驚いたリアの顔が面白い。バカにしてやりたいが、先に面倒ごとを済ませないとな。

意識を集中した俺の耳に、俺達とは別の微かな足音が聞こえた。俺の反撃に驚いたのだろうか、浮き足立つている様だ。数は3。恐らく2手に分かれた片方だろう。残りの連中が潜む場所はまだ確信が無いけれど、恐らく俺達を挟んで反対側。挟撃される前に見つけた端から叩いていこう。数が半減すれば攻撃も少しは大人しくなるだろう。

こんな長つたらしい思考をする間に目標を補足した。やはり3人いた連中は、立派だがどこか草臥れた灰色の魔術師ローブを纏っていた。さて、どうしてやろうか。

「とりあえず、気絶してくれ

」「下手に殺しちゃうと後ろの勇者に俺が裁かれかねないし。

苦し紛れに放たれた火の玉を素手で捕まえる。若干暴れる火の玉にちょっと細工して投げ返してやつた。ぽかんと口を開けた三人の直上で”元”火の玉が弾けると、連中がばたばたと倒れる。疲労も手伝つてかアツサリと眠りに落ちてくれたみたいだ。

振り返ると剣の音が止んでいた。向こうの連中はリアが片づけたらしい。よしよし、偉いぞ。

* * *

「ん……」

自分の両手を見つめながら、俺は首を傾げた。やはり、自分の体に小さな違和感がある気がしたのだ。

今回程度の連中（恐らく、人間の一般的か少し上位クラスの魔術師だと思う）を相手にするには全く問題ないが、このままの状態でちょっと腕の立つ相手が現れたらと思うと、あまり笑えない。

今の自分が本調子じゃないという根拠はただの感覚であり、酷く曖昧なモノなのだが、親父らに鍛え（イジメ）られていた頃の自分はもっと力を持っていた気がする。なんだろう、何かされたか俺？

「レオൺさん、ビーハーですかー 逸れちゃダメですよー」

たかだか30メートルも離れていないのに逸れる方向音痴の泣き声で、思考がぱつたり途切れた。嘆息して救出に向かう。

「あれ、ビーハーですかー！」

ひょっとして俺の調子がおかしいのはアソシのせいかもしれん。
本当に調子狂う。

4・「レオンをみて方向音痴なんですか?」(後書き)

前書きに続きまして。

今後の展開は一応考えてあるのですが、その通りに進められるかどうか、結構怪しいです。本当に文章を作るのって難しいですね。

投稿する前に何度も見直すのですが、そのたびに文章を直していくので、辻褄が合わないような変な所があるかもしれません。といづかきつと色々あります。「めんなさい。

5・「ソルジャー、よく行くんだ」

「で、ここからは結局何者なんだ?」

田の前には氣絶した狼藉者6名が転がっている。狙われたのは俺が魔王だからかと思っていたが、よく考えたら誰も俺(魔王)が出てきた事を知らない筈なのに、いきなり襲い掛かられるのもおかしな話だ。ひょっとしてただの山賊だろうか。

『山賊にしては高等な魔術師が揃い過ぎている。恐らくは高位の主を守る近衛兵といったところだろうな』

「随分と具体的な推測だな? あと唐突に喋るんじゃないよビックリするだろ!」

『ふん、貴様は知らんだろうがロープにエンブレムが刺繡されている。これはラインハルト卿のものだ』

さつきの小競り合にのせいか、さらにボロくなつたロープを指して言ひ。誰だそのなんとか卿つてやつは。まつ

「ラインハルト卿といえば、長きに渡つてハイグレイ王国に仕えている名士です。でもエクちゃん、どうして卿の近衛兵さん達がこんな場所に居るの?」

誰もその問いに答えを持たない。

そもそも俺は関係無い面倒事に首を突っ込みたくないのと、そん

なクエスチョンは後回しでもいいと思つ。問題は、どうしたらいの
ふざけた森から脱出できるかつて事だろ。

「といひで、肝心の結界は解けたのか?」

リアが首を振る。やはり俺と同じ意見だった。まだ森の雰囲気は
変わつておらず、方向感覚が狂つよつた気持ち悪さはまだ続いてい
る。

『いやつらを倒しても結界が解かれないところを見ると、術者は他
に存在するという事だろ。この森を出るのなら、何れにせよその
者に会わねばなるまい』

やつなるよな。まつたく厄介な事だ。

『といひでその術者については何處にいるんだ』

『……知らん』

肝心な時に役に立たないなお前。

「といひで、近衛兵がここに留るつて事だ、ここつりがけつてい
る主もの森に居るつて事だよな?」

* * *

「近衛兵が主の傍を離れることは考えにくいですから、そうだと思います。どうしてこの森に居るのかは解りませんけど……」

どんな理由か知らないが、近衛兵はラインハルトをこの森の何処かに匿つてゐる……のだとしたら、俺達がこいつらに襲われたのは、主を襲う敵だと勘違いされたからなのかもしない。ただの迷子なのに。

「……あれ？ この森に要人を匿つているのなら、どうして侵入者が森から出られないような結界敷いたんだろうな」

連中がラインハルトをこの森の何処かに匿つていたとしよう。

それを誰にも知られたくないというのなら、人避けの結界を使えば良いと思うのだが。そうすりや俺達も迷い込まずに済んだのに、この森にかけられているのは恐らく幻覚と封印の結界だ。

『ふん。この森は大きな街道の近くにある。近道にもならない森など、普通誰も近づかぬ。狩に適する獲物にも乏しいしな。』

この森に近づくのは敵である可能性が高いから、追い払うのではなく罠にかけて始末すると？ 情報を持ち帰らせない為に？ 何か物騒な話だなおい。

「うーん、結界の狙いがどうであれ、術者さんに会つて誤解を解かない事にはここから出られそうにないですよね。どうやって探しましょつか。この人達は当分田を見ましそうにないです」

少々脱線した話を元に戻すが、衛兵達は未だに氣を失つてだらしなく寝そべつっていた。

呑き起こしたところで口を開くようなやつ。やじりながら手荒な真似は絶対にリアが許さないだろうし、やうなると他のモノに尋ねるしかない。

「それなんだけどさ、良い方法思いついた

「こそ、」と氣絶連中のポケットを探る。こんな森の中でウロウロしている連中だ。持っていてもおかしくないと想つ。……よし、あつた。

「おいリア、これ見てくれないか

思つた通りに見つかったコンパスを、リアに向かってポイッと投げた。

ゴシッ

「痛いですっ」

お前、運動神経切れてんのか？

「…………これ、どうするんですか？ 人のもの取っちゃうのは黙目ですよ

「借りるだけ。なあ、そのコンパス使えば主の居場所が解からないか？」

はつとするリアの顔。慌ててコンパスをいじり始めると、すぐ口答えが返ってきた。

「ありました、ここから北西約5キロの地点に複数の人が固まっています」

ビンゴ。

「その位置をお前のコンパスに移せるか？ よし、それじゃ行くか」

* * *

あちこちから飛び出る枝葉や青々と茂る草を適当に払いながら、俺が先頭になつて森を歩いてゆく。さつきまで先頭をリアに任せていたのだが、良く見たら全然違つ方向に進んでいやがつたのだ。

「おのれはワザとやってんのか？」

「うーん、不思議です。確かにこっちだと……ひょっとして……」

これはもしかしてコンパスすら結界に惑わされていいのでは……と戦慄するリアの手からブツを奪い取ること20分。目的地はもう目前だつた。

ただ黙つて歩くのに飽きた俺は「やつこえません」と話を振つた。

「やつこの話だナビや」

「なんですか？」

「敵を皆閉じ込めちまえば、確かに森の中の情報は出て行かないだろうけどさ。敵からすれば放った刺客が何人も同じ森で帰つて来ないとなれば、この森にターゲットが居ることがバレちまうんじゃないのか」

「もう既にそくなっているのだと思います。の人たちの格好を見ても、私達と遭つまでに相当の数と闘つていたみたいですか？」

「いつ時々中身変わるんじゃ？　と思ひへりここまともな事言つてゐる。

それにしても居場所がもう分かつていて、でも追つ手を何度も放つても返り討ちにされる。そんな相手に懲りずに追つ手を差し向けるなんて、随分ノンビリした追つ手だよな。

……？

「いたつ……もうレオンさん。急に止まらないでトセーつ」

鼻を押さえて抗議するリアからもつと文句が出てくるかと思つていたが、その前に俺同じ事を感じたらしい。視線が俺と同じ方向を向く。ほんの少し、砂粒よりも小さなパチパチといふ音が聞こえるのだ。恐らくは　俺は空を見て確信する。

上空がみるみるうちに煙で覆われていくのだ。

「わ。な、なんですかレオンさん。急に引っ張るなんて」

「決まってる。急ぐぞ、火の手が早すぎる。つたく、よりによつてこんなタイミングで火遊びとか最悪だ」

さつきの近衛兵との小競り合いで発生したような小火とは訳が違う。明らかに森を焼失させる目的が見えるような燃え広がり方だった。

信じられないと呟くリアの瞳。気持ちは解からないでも無いが間違いない。微かに流れてくる魔力の残滓をコイツも感じたのだろう、悲しそうに眉根を寄せた。

ひょっとしたら放火犯はラインハルトってヤツを狙っている人物かも知れない。探したい相手が森に潜み出てこないのならば、森自体を消してしまえば良いのだから。

……まあ、放火犯がどんなヤツかなんて、今考えることじゃない。どんどん昇つてゆく煙が青空を灰色へと塗り替えてゆく様を見る限り、ここも遠くない内に火が回つてくるだろう。その前に目的人物に会つてさつきと結界解かせてこんな森脱出すれば良いんだ。ほら行くぞ。

しかし、勇者の決断は違つた。くるりと踵を返すと真っ直ぐに煙の立ち昇る方へと進んでゆく。

俺の手を握つたまま。

「じゅうじゅう、どこへ行くんだ」

「火を消しに、に決まつてゐるぢやないですか。急げばまだ間に合います！」

そうですか」苦労様です流石は勇者偉いぞ勇者。でも何故俺の手を握つてゐる？

「レオンさんが居ないと迷つちゃうぢやないですか」

「知らねえよ！自信満々に向を言つてくるんだお前」

つたく、こいつの頭がどうこいつ構造してゐるのか本氣で調べてみたい気分だ。

結局リアが引つ張るままに引きずられて行く俺。放つておいたら後味悪いっつーか、森の中で迷子になられたら探すのが面倒だしさ。

「うひひひ、そつちじやなこいつちだ。

.....。

生木の燃える臭いが強くなり、熱源が近づく。深紅の炎が近づく者を威圧する。地獄と化した範囲は既に視界に收まりきらないほどに膨れ上がつていた。

「うーわ……」

見ただけでゲンナリするほどの光景だった。「火を消すの？ 本

当に？

やつぱり止めないか、とリアに訴えようとしたんだけど、やる気がハンパない勇者は既に水の魔術を唱えたのか大量の水をぶちまけて消火活動を開始していた。

「レオンさんはそっちからお願ひします！」

……と言われても、俺水魔法はあんまり得意じゃないんだよな。どうしたものか。かといってボケッとしているだけってのは情けない。あ、そうだ。

俺はたまたま手にしていたコンパスを見る。都合の良いことに、近くに青い表示があったのだ。あまり大きそつな川じゃないけど、コレを使おう。

ところで、世界征服するっていう当初の目的を忘れていないかお前。

* * *

大体30分も経過しただろ？

ぶつくさ言いながらも消火作業は順調に進んだ。既に燃え残る面

積は三分の一以下にまで進み、俺達が進んだ後には水没になつた木が焦げた体を並べている。随分と見晴らしが良くなつた視界の先にはおお、紛れも無くさつきまで居たパレット・ハイロードと、何やら物騒な連中。

「げ、何か変なものまで見つけちまつた

灰色のローブを纏つたのが3人、これまた灰色の甲冑をつけたのが5人。向こうも俺達を見つけたのか真っ直ぐこっちに向かつて走ってきた。

「がつはつは、とうとう見つけたぜ」

「の妙に偉そうな男がリーダーなんだろうか。スキンヘッドがトレードマークらしいその男は、ニヤニヤ笑いがこんなに似合つヤツも珍しいってくらいにヤラシイ笑みを向けてきた。その髪型すげく似合つてるね。

「おら観念しろ、ここにラインハルト卿が居るコトは割れてんだ。」

何がそんなに嬉しいのか知らないが、男のニヤニヤ笑いにますます磨きが掛かる。

「いや、俺達も探してたんだけど」

俺の言い分を聞いておいて間髪いれずに大笑いしゃがるタコ親父。

「バッカかお前、お前ら森の中に居ただろ？ ならアイツを守る兵士だらうが」

その2つをイゴールで強引に結ぶお前にそがせりとバカだ。

「いや、ホントだつて。パレットつて街からハイグレイ王国に行こうとして道に迷っちゃってわ」

「ウソつくんじゃねえよ！　あんな一本道で迷つ馬鹿がどこのに居るつてんだよ」

いまそこで消火作業しています。

今度は取り巻き連中まで加わつて爆笑しやがつた。あくまで紳士的対応に努める俺だが、堪忍袋の緒が音を立てて軋みだした。

消しちゃおつかな。こいつらなら全員相手にしても多分10秒も要らない。……でもそんな事したらきっと怒るよなアイツ。一応平和を愛する勇者だし。

俺がどうすべきか迷つている間に、消火作業を終えた防火隊長が駆けつけてきた。

「どうしたんですかレオンさん。この方達はお友達ですか？」

これから済そうかと。

「おーおーちつこいガキだな。こんなのに守られてんのかラインハルト卿つてのは」

再び起ころる爆笑。その光景を見て、リアの顔が理解の色になつた。

「やつちゅうまじょ」

「マジックかー!？」

「こいつに堪忍袋は無いらしい。

いやでもさ、仮にも勇者が一般人に暴行事件は拙いんじゃ。

「懲らしめてやるだけです。いいんです。おつまめです。ノープロ

です」

最後のはノープロフレムの略らしい。業界用語（？）に詳しい勇者が手ごろな枝を拾つた。ぶぶんと軽く具合を確かめるリアに、「おこおこおこ。おチビちゃん本氣かよ、俺そんな趣味無いんだけどな」

せりに油が注がれる。つわ、リアの顔がものすっぽい笑顔だ。

「なあおチビちゃん、悪いことは言わ

キした。

俺でも一瞬見失いかける程の動作は、相手からすれば消えたリアが突然目の前に出現したように見えただろう。鼻先一ミリに突きつけられた枝がタコ男を全身金縛りにかけた。

「あなた失礼ですっ、私おチビちゃんじやありませんっ

あの言葉が地雷だつたらしい、以後絶対に氣をつけよう。

寸止めなしでアレやられたりマジで洒落にならなこと無い。

ん?

呆然の取り巻きが見守る中、自分の背後に生じた気配に気付けたのは偶然だった。

避けられたのは、ただの幸運だった。

6・「知らない人です」

空氣すら振動しない。不自然な程に静かすぎる一筋が俺のすぐ傍を通り抜けて、焦げた木の枝を音も無く両断した。

ジャリツ、と乱入者の脚が立てた音が妙に響いて聞こえた。尾のように結んで流している長い髪の色は混じりの無い紅。俺の胸程の高さからから睨んでくる瞳も透き通るような赤色だった。リアよりも僅かに小柄な外見をした女の白い手が持つ得物は、剣の類だがリアのものとは形が違う。確かあれは”カタナ”とかいう武器

「つ！」

語る言葉も持たずにそれが揺らめぐ。空氣を切り裂く音すらしない一撃を咄嗟に腕で防ごうとした。

「げ

魔力で硬化してある筈の服が紙のように散る。紙一重で回避できた腕が自分にくつついでいることを確認して、不覚にも流れた冷や汗を拭つた。

マズい、アレに触れたらただじゃ済まないだろう。斬ることに関してはエク公以上だ。何なんだこいつは……ひょつとして放火魔のボスはあのスキンヘッジドジやなくこいつなのか。

動きの鋭さはリア（エク公のみ）とほぼ同等。だが触れたら腕が落ちかねないモノを腕で受け止める訳にもいかない。木の棒を魔力

で目いっぱい硬化したら、何とか受け止められる……か？

「あぶねっ」

胴を狙う一撃を避けた俺は、地面に転がっている手頃な枝を掴んでありつたけの魔力を込めて強化した。棒切れを振り回すなんて滅多にしないので自信ないけど、素手よりはマシだ。

ぱろり。

え。

赤髪に向けて構えた棒切れが、真ん中から切断されてぱろりと落ちた。

「…………無理だ。」

限界まで強化してこの有様かよ。

棒を投げ捨てて次の手を考えるしかない。

迂闊に背を見せせて撤退するのはダメだと思つ。目を離した僅かな隙に目の前まで間合いを詰めてくるような相手だ。背後からバッサリやられる可能性が非常に高い。

だつたら立ち向かうしかないんだけど、相手に触れられない以上魔法を使うしかない。しかし魔法を使うとなるとどうしても無防備な一瞬が出来てしまう。そんな隙を見逃してくれる程甘い相手には見えないので。何か使えそうな物も落ちていないし。

どーしよう。

気付けばさつきまで居たはずの連中が消えている。何処に行つたか知らないが俺も一緒に連れて行つて欲しかった。

「勘弁してくれよ……」

俺はただの不幸な迷子ちゃんですってば。

生まれた沈黙の時を狙い主張する俺の言葉にも、目の前の赤髪は耳を持たないかのように返事をくれなかつた。

頭、足、胴、肩、腕。凶悪な刃が振るわれる度に冷たい汗が流れる。どうしようもなく心臓に悪い時間を過ごしている俺は、そんな中で一つの光明を見た……気がした。相手は頭を狙つてカタナを振り下ろした後、決まって足を狙つてくるのだ。

これが相手の無意識的な行動ならば、それを見越して攻撃を叩き込む事ができる。

ただ万が一、それが相手の意識的な行動だったとしたら、非常にマズイ結果になりそうだ。俺がこのクセを見抜いて反撃に出る瞬間を、相手が待ち構えているのだとしたら。

「…………。」

あまりウダウダ考へてゐる時間は無かつた。このまま相手が諦めるまで避け続けるなんて選択はむしろ危険だと思つ。俺が避けるご

とに動きに慣れてきたのか、相手の動きはむしろ鋭さを増している。

やるしかないよな。

胸を狙う突きを避けた先へ追尾するように、肩、腕、脚へとカタナが伸びてくる。ぐつと力を込めるように踏み込んだ相手が上段に構えを取った。来る。

頭を狙い振り下ろされたカタナを、まずは右へ回り込むように避ける。

相手はそのまま俺の脚を狙うように動くはず。それを避けて一気に反撃する為に、カタナを飛び越えるようにジャンプして一気に間に合いを詰める。

何かを考える時間も惜しい。無防備に伸びきった相手の腕に狙いを定め、俺の右手に用意した雷撃を叩き付けた。

「ツ
」

相手の驚いたような息遣いが聞こえた。いけれど目論見が成功したことを見た俺は、予想外の動きをした相手にまた驚かされた。

体に雷撃が届く前に、赤髪は飛び込んだ俺の下をくぐるように体を投げ出したのだ。行き場を見失った雷撃が地面に吸い込まれて消滅する。慌てて振り返った俺から離れるように、赤髪は猫のような身のこなしで大きく距離を取った。まるで俺がこんな風に反撃することを予め知っていたような、鮮やかな反応だった。

「……これでもダメか。つたぐ、面倒な相手だ」

* * *

そして俺は、また胃が痛くなるような睨み合いで戻されてしまう。

しかしそれまでのとは少し状況が違った。相手との間合いが10m近く開いているのだ。さつきまでとは違う、剣士に不利な位置関係だ。

この位置なら接近される前に魔法が使える。もう遠慮なんかしてやらない。小さな女だと思って油断していたら「こらんの有様だ。

あれ？

ふと気付くと、赤髪が構えを変えていた。

「……何だこのイヤな感じは。」

殺気が膨らむのが嫌でも解かつた。エク公の時とは違う純粋な敵意が俺に突き刺さる。相手が武器を納めたといつに殺気が膨らむ一方の構えからは、悪い予感しかしない。

昔どこかで聞いたことがある。抜刀術と名付けられた剣技は防ぐ

ことの叶わない一撃必殺。相手の間合いに踏み込んだら最後、俺の体は2つになっちゃうだろ。

しかしこの距離ならば魔法が使えるし、相手の武器は絶対に届かない。射程比べではこっちが圧倒的に有利なんだから、迂闊に前に出なければ大丈夫だ。そう自分に言い聞かせる。

「……。」

それなのに、俺は少しも安心できないでいた。まるで相手の射程距離内に突っ立っているような、皮膚がピリピリするような感覚が消えないのだ。

「。」

赤髪が、短く何かを呟いた気がした。カタナを納めていたヤツの脚が焦土に線を引く。鞘から引き抜かれる刀身が見えない。速過ぎて扇形としか認識できない赤銀が俺の遙か手前で空を切り、

冷たい何かが俺の右の頬に触れた。

「。」

頭に沸き起こる疑問を全てキャンセルした。退け、と考えていたらその時はもう駄目だつただろう。情けなく仰け反りながらも、俺はまだ生きていた。恐る恐る頬に触れても、手に血は付かなかつた。

心の中で舌を打つ。

とんでもないヤツだ。1000年後の世界つてのは「んなのが『ローバー』してるのか？」

何故届いた。錯覚じゃない、間違いなくあれは命を刈り取る一閃だった。ぐるぐる巡る思考と共に改めて無言の襲撃者を見る。そいつは仕留め損なった事にか忌々しげに眉を顰めて、

「ちつ、なの」

変な語尾をつけた。

なの？

ふと殺氣が消えたかと思つたら、そいつは刀を肩に乗せて笑つた。
笑いやがつた。

「ジャイノスの手下にこんな骨の有る輩が居るとは思えないな。
あんた、なに？　なの」

今絶対に無理やり語尾付けただる。

「……道に迷つた旅人つてやつ？」

言つてから大笑いした連中を思い出す。しまつた、もう少し本当つぽく聞こえる言い訳を探してくんだった。こんなのは誰も信じないよな……と後悔したのだが。

「それは大変だつた、なの」

……いつも俺の周りにはちょくちょく稀少（変）なのが出現するらしい。ま、話が早くて助かった。

「俺達は此処から出たいだけなんだ。何とかしてくれないか」

「主様に頼まないと駄目なの。これから会って行く、なの」

* * *

「問答無用で切りかかられた時はどうなるかと思つた」

「過ぎたことをクヨクヨしてもしょうがない、なの」

お前が言つとすぐ腹立たしいんですけど。

口の先まで出掛けた文句を飲み込んで、目の前の赤髪に続いて森を進む。自信にあふれたその足取りは安心して先頭を任せられた。行く手に邪魔な枝を音もなく切り落として一言。

「あんたさつきの攻撃よく避けた、なの」

「あまり良く覚えていないんだけどな」

ふつうほどの前に意識が切れるの、などと物騒なことを言ひつ。

「サキはあなたのこと眞にに入った、なの」

「ヤツヤ デリモ」

「いつサキって言つのか、聞く手間が省けた。まあ褒められたら悪い気はしないので適当に相槌を打つ。サキは上機嫌らしく、ふんふんと鼻歌なんぞ歌つていた。

「なあ、どうして俺に襲い掛かつたりしたんだ？」

「主様を狙つ不届き者の手下だと思つた、なの」

聞けば今までにも襲撃されたことがあるらしい。相手はずいぶんとしつこいやしらしく、もう何度田の事かは覚えていない、とつまらなそうに教えてくれた。

「お前、その間ずっと戦つてきたのか」

「当然なの。主様を守る」とが私の生きる意味、なの

生きる意味、ねえ。良く解らないけど、コイツがいれば何回襲撃されたところで負けないだろ？ 小さい体を精一杯反らしてふんぞり返るその姿はやっぱり小わて。リア以下かもしれない。良かつたな、お前よかちつていのが.....。

！？

「？ そんなに汗水垂らしまくつてびつした、なの」

忘れてた。かんつせんに頭から抜け落ちた。あの馬鹿は何処へ。

いない。どこを見渡してもあの方向音痴の姿が見つからない。

「なあ、さっき会った場所に、お前よりすこし大きいくらいこの女の子居ただろ？」

あんなのでも放置すると後味が悪い。リアのやつ間違いなく森の中で迷っているだろ。サキと会つまでは確かに居たんだけど。

「私を見てすぐ逃げたアレなら森の中に行っちゃた、なの。知り合いなの？」

「知らない人です」

見捨てよう。暫く反省でもしている。

* * *

案内されて辿り着いたレンガ造りの館は、思った以上に立派なものだった。木々に紛れる為か1階のみの造りかと思つたら、どうやら地下に伸びているらしい。それを考へると少なくとも数十人は暮らせるほどの部屋数がありそうだ。扉を抜けると目に入った内装は、派手ではないが落ち着いた色合いでデザインされていて、居心地の良さそうな雰囲気だつた。ここで休めるのなら悪くない。

「あー、何だかとんでもなく疲れた。」

「……」で一通りくつろいでゆっくり休んでから、今頃泣いて反省しているリアを回収してやる。と思っていたのだが。

「もう、遅かつたですねレオンさん」

案内されたティールームに、茶菓子をさせそつに頬張る未知の生物がいた。何故だ。何故貴様がここに居る！？

『ふん、随分と苦戦したようだな』

隣には同じように茶を啜るエク公が居た。ホントにお茶飲んでやがる。リアの茶飲み友達だという告白は嘘じゃなかつたようだ。大ピンチだつた俺が捨て置かれたのはひょっとしなくてもお前の差し金か。

「ほつほ、よつよつ。お仲間の方も到着したみたいじゃな」

エク公に文句の一つや二つを叩きつけていると、笑みの形に皺を刻んだ男がやってきた。

一目で直感する。きっとこの男がラインハルトだ。

「主様、ただいまなの」

俺を席に案内したサキが男の傍へ向かつ。

短く何かを報告したサキは頭をぽんぽんと撫でられて、嬉しそうに手を細めていた。その様子はとても俺を怖い目に遭わせた人物とは思えない。まるで飼い主に甘える子犬みたいだ。外見はどうやらかと言えばネコっぽいんだけど。

「サキも座りなさい。……さて、改めて自己紹介をさせてもらおつかの」

予想通りの名を告げた男に続いて、俺達も簡単に名乗る。

一通り挨拶が済んだところで、ビーブしてリアがこんな所に居たのかを聞いてみた。

「気絶した私達の部下をここまで運んでくれたんじゃよ。」

リアは俺と離れてそんな事をしていたらしい。近衛兵を気絶させたのは俺達なのだがそこは黙つておこう。リアに対し「ありがとうございます」と人懐っこい笑みを浮かべる男の見た目は初老に入ったくらいだが、その雰囲気には同年代と話す気安さがあった。

隣に視線を向ける。静かに茶を啜るサキは”ヨーカン”という甘菓子を幸せそうにつついていた。女の子って皆甘いものに手が無いんだろうか。糸の先に括りつけたら釣れるかもしれません。

「それにしても、あやつらまさか森を燃やしにかかるとひとちとゆづくつ構えすぎたよつじやはつはつは

かんらかんらという表現がとても似合ひ笑い声とその表情からは、追われている者の恐怖が全く読み取れなかつた。リアが綺麗にした皿の上にフォークをそつと置く。紅茶の香りを楽しむようにゆづく

りと一口。

「おじ……ラインハルト卿はもう随分ところへ居ひりしあるのですか」

「ふふ、無理にそう呼ばなくとも良い。おじいさんなり、好きに呼んでくれて結構じゃ」

顔を赤くしたリアが恐縮するのを見て何故かこっちまで恥ずかしくなる。それにしてもずいぶん出来た人のようだ。

「」の森に来てから今日でもう一月近くになるかの。あんな国でもワシの愛する国でな。簡単には見捨てられんのじやよ

「どうしてこんな事をなさつているのですか？ ラインハルトといえば」の辺りでは知らぬ者は居ない程の名士であり、代々王に仕えてこると聞いていますが……」

「一言で言えば退屈しきの相手かの」

意味をうまく読み取れない。リアも同様らしく困惑の顔で一口紅茶を含んだ。いつしか空になつた俺のカップを見てじいさんがおかわりを勧める。目を離していた隙に侍女のような格好になつていたサキがテキパキとお代わりの準備を進める中で聞いた話は、数分程で話し終える簡単なものだった。

* * *

その王は、平和でつまらない世の中が退屈だつたらしい。嘗ては魔王を相手に戦つた勇敢な国だったが、魔王が消えて久しい現世では自分達が戦う相手が居ない。強力な手駒を持て余す事に耐えられなかつたというのだ。

「なんか子供っぽいなそいつ」

思つたことを素直に言つと、じいさんは怒るどころか苦々しい顔で笑つた。

「その通り、私も言つてやつたよ。もつとも禮便にならぬ言い方に気をつけたがね。返ってきた言葉は『無礼者』じゃつたよ」
ますます子供だ。良くそんな王の居る国が繁栄を続けられたな、と思ひ。

「最近即位したてのはやはりじやからの。王様であることはしゃいであるのかもしねん。なんせ1~2歳じやから」

ホントに子供じやないか、そんなのがトップなのがあの国は。どうりであるの兵士も品が無いと思つた。

じいさんが言うには、ジャイノスという男が王に近づきだした辺りから、王の考えが変わつていつたらしく。

「好戦的な意見ばかりを取り入れだした王に、厳しいお灸をすえた

かつたのじゃが……何度意見を申しても無視されるばかりか、とう
とつわしを含めた明確な反対派は反逆者扱いになつてしまつたのじ
やよ。はつはつは。」

これっぽっちも気落ちしていない風に笑つてゐるその様を見てい
ると、何となくこつちの方が王様っぽい氣がする。風格つてやつだ
ろうか？ 視線をサキに向けると、彼女はそんな主を見て誇りしげ
に微笑んでいた。

「それで、この森に？」

彼らは逃げられないのではなく、逃げなかつたらしい。そもそも
この森に結界を張つた理由は追つ手を呼び寄せることにあつたのだ
といつ。捕られた追つ手は殺してしまふのではなく、わざと情報を
『』えて逃がしていた。そんなことを意図的にしていると思わせない
よつて軽い記憶操作をしてゐるらしいが。

「どうしてそんなことを？」

「退屈しのぎに付き合つためじゃよ」

暇になつたからと兵を動かすような王だ。周囲に進言されて隣国
へ攻め込むといった一大事を引き起こしかねない。その目をこぢら
に引き付けておく為にこうして篭城めいたことをしていたらしい。
アピールの為に、進入してきた相手に宣戦布告めいた書簡を渡した
事もあつたのだとか。思い切つたことをするじいさんだ。

「じゃが、やはりたかだか數十人では限界といつものがある

もともとこの森には50人の私兵がいたのだという。それが今は

たつた6人+サキだけになつてしまつた。選りすぐりの兵といえど限界などとつぐに来ていたのだ。そこにきて今回のように森を燃やされてしまえば、隠れるところそのものが無くなつてしまつ。地の利を生かして戦力差を埋めてきたこれまでのように行かなくなれば、あつといつまに勝負は決着するだらう。

ほんの少しだけ、初老の男の顔が悲しそうに歪む。しかし一瞬のこと、すぐに彼は笑つた。それが義務であるかのように笑顔を最後まで崩さなかつた。

「わかりました！」

短絡思考が大真面目に手を上げる。

根拠は無い。しかし、何故か厄介なことになる予感がした。『私がその困った王様にお灸をすえちゃいますから！ 大丈夫です。ノープロですっ』なんて言い出すかも、とかそんな予感。

やめてほしい。

そういうえば何故こんな立ち入った話をしているんだ俺達。

「おレリア、発言は良く考えてから」

「わたしたちがその困った王様にお灸をすえちゃいますから！ 大丈夫です。ノープロですっ」

「つて俺もかよ！ 何でだよー。」

そんな俺の心の叫びは当然のように無視された。

6・「知らない人です」（後書き）

ここまで読んでくださってありがとうございます。

あらすじにも追記したのですが、物語の進行上どうしてもシリアルスッぽくなる話が出てきます。もつ少し先の話なのですが、そういう話が苦手な方はご注意ください。

お気に入り登録をしていただいた方がいるみたいでびっくりしました。ありがとうございます。この面白くなるのかちょっと自信ないですが、話の区切りが付くまでは今のペースで投稿したいと思います。

7・「小さな所で何をつてんだよ前ひ……」

全くもつて不本意なのが、俺は結局「一度王様を見てみましょう」と主張して止まない勇者を止められずにハイグレイ王国に連行されていた。俺とリア、そしてサキが加わって3人となつた俺達は、美味しそうな匂いを漂わせている出店でちよつと買い物をしている所だ。

「んまい」

いま俺が食べている、トロトロになるまで煮込まれた肉や野菜を穀物の生地で包んだ食べ物は”ピロタン”という。この国の名物らしいのだが結構おいしい。他にも色々魅惑的な匂いをさせている屋台が多いので、いつか全部制覇してやろうと思つていい。

王様見学に来ている俺達だがこんな楽しみでもないとせつてられない。どうして俺まで実行犯に選ばれたのか未だに納得出来ないし。ところがおかしいだろ。

「リアっち。アイスクリームお待たせ、なの」

「わっ、すげく長いです」

クリームだけで30センチはあるアイスを片手にうつとつする勇者は、いつの間にか随分サキと仲良くなつていい。別にいいんだけどさ。

「おこしこですか？」

「なの」

お前らどんだけ甘いもの好きなんだよ。

「レオンさんも良かつたらどうですか？ とっても美味しいですよ」

「子供じゃあるまいし、大人はそんなもの喜んで食わねーよ」

「レオンも私達とそんなに年齢違ないとと思うの」

1000年単位で俺のほうが年上だっての。人間換算なら近いかもしぬないけど。

* * *

これじゃまるで子守じゃねーか。

きやいきやい騒ぐ黒っぽいのと赤っぽいのを他人行儀に眺めながら、俺は改めて街をぐるつと見渡した。この国も一見すると平和だ。人通りが多く市場は活気付いているし、とてもこれから争いの火種になろうとする国には思えなかつた。

サキから聞いた話だとこの国の人口は1万人ほど。かつては魔物討伐の拠点として多くの冒険者、傭兵が集まる大きなギルド（組合）も存在していたらしいが、魔物の脅威がほぼ去つた今は既に解散し

た後だといつ。少し興味があつたのでギルド跡地に行つてみたのだが、今は武器・防具を扱う店に変わっていた。他よりも一際大きなレンガ造りの建物の内部は、この国の工匠が持ち寄った作品で溢れていた。

「……持ち運ぶのが面倒なんだよな。」

いつまでも武器のひとつも持たないでいると、この間みたいな情けない目に遭うかもしないのだが……どうも惹かれる品物が見当たらない。俺は両親の良くわからない教育方針によつて武器防具の類を持つことを禁じられたまま育つたので、下手に武器に頼ると余計に弱くなるかもしれないし。

何の附加効果もない装飾品を楽しそうに見て回つている2人を放置して店の外に出た俺は、他の面白そうなものを求めて回る事にした。

「……お?」

何気なく覗き込んだ路地の先にも、レンガ造りの建物が林のように立ち並んでいる。だがどこか感じる氣配が違つていた。一本道を逸れただけの空間には、同じ街とは思えない湿つた空気が流れていった。

どうせリア達は暫く店を見て回ると言つていたし、サキがいれば迷子にもならないだろ?。どこか懐かしい雰囲気に惹かれた俺は、そちらの方へと足を向けてみた。

* * *

染みが奇妙な模様を描く木の戸を押す。油の切れた甲高い、しかし懐かしい響きが俺を迎えてくれた。その場にいる4割が煙らせている煙草と7割が遠慮なく出す罵声に似た大声、そして全員が手にする様々な酒の香りが力の限り大人の遊び場を主張している。100年経とうがこういう場所は変わらない。お子様なあいつ等と違う、大人な闇の帝王には相応しい世界だ。

まずは酒でも飲もうかな。酒は良いよね、嫌なことを忘れさせてくれる。

カウンターに座り指を立てる。言葉無く俺の手に収まつたのは金色をしたキツイやつだった。無言の勧めに応じて一気にあおる。

喉を通るなんともいえない熱さ。呼吸するだけで噎せ返るような

「げほっ。」

これ、が俺、の悩みを、ゴホッ 忘れ、させて、ゴホッ くれる。

「お密さん、無理すんなよ」

何コレ強すぎだよ。

どんな代物かと思つてボトルを見たら骸骨マークが付いていた。
殺す氣が。

「じゃあタバコでも喫むかい？ お密さん」

「……ああ、それじゃ賣おうかな

タバコは良い。肺に溜めた煙をむりへつと吐けば胸の内につかえたモノまで吐き出せてくれる。やう、こらぬことに悩ませられている俺にはタバコこそ必要だ。マスターに合図すると差し出した指に葉巻を挿してくれた。渋い音をさせてマスターの手が石を擦る。果物の香りがする洒落たその煙を肺一杯に吸い込んでケホッ、ケホケホグホッ。

「お密れど、コレ飲みな

「げほつ、ああ、ありがとわ。」

強面からは全く想像できないマスターの細やかな心配りにひよつと感動する。やつぱり俺にお似合いなのは手の中のホットミルク

「じゅねえよ！ 誰がミルクの似合ひのお子様だよ！」

「はつはつは、そう怒るなよ。イイ男が台無じじゃないか

そんな平べったい声で言われてもちつとも嬉しくない。やや乱暴に飲み干した俺が次はどこへ行こうかと考えていたら、マスターがまた俺に話しかけてきた。

「お密れど、オトナなら向こうでひと勝負してきたらどうだ？」「

「勝負？」

「良い暇つぶしなると思つた。帰りにどうなつてゐるかは保障できないけどな」

マスターに礼を告げて奥のテーブルに向かうと、刺す様な緊張感がまた一段と強くなつた。無言でカードを切るディーラーと時折巻き起こる歓声と悲鳴。一瞬にして一月の稼ぎが消えたかと思えば一年分の稼ぎが舞い込んでくることは、時の流れすら歪んでいくようだつた。

「ちよつと遊んでやるか

不敵な笑みを浮かべて席に付いた俺の目の前で、ディーラーが恭しく頭を下げる。

ブラックジャックは1から11まであるカードの数を足して21に近い方が勝ちというシンプルなゲームだ。ディーラーと一对一で勝負し、勝てば掛け金に応じてチップが支払われる。

最も強いのは21なのだが、22以上になつてしまつと”バースト”となつて無条件で負けになつてしまう。また、同じ21でもエースと10を組み合わせた”ブラックジャック”が成立した場合はそちらが優先される。単純だけど結構奥深いゲームだ。

手持ちのチップは500。どんと10倍、いや100倍にしてやる。愚民どもよ、魔王の実力に恐れ平伏すが良いわ。わはははは。

「残念、バーストですねお客様」

えつ。

けしからん”ディーラーを睨むが涼しい顔で受け流された。……まあいい、初戦はツイてなかつたが慌てる必要は無いさ。たつた100枚チップを巻き上げたからってイイ気になつてんじゃねーぞちくしょう。

「18だ！」

「19です」

「どうだ、20だ！」

「残念、わたくしは21です」

「なん、だと……」

無常な宣告と共に没収されてゆくチップの山。くそ、流れが悪いのかちつとも勝てない。これではただのカモだ。残り200枚のチップを見ながら続行するか暫し迷う。

だがこんな事で逃げ出したらそれこそ笑いものだ。絶対に勝つてやる、~~や~~ふんと言わせてやるつ。

「掛け金は200だ」

ディーラーの眉が小さく動く。完全なポーカーフェイスの相手が初めてを見せた小さな表情だった。

「どうだ。」

伏せて配られたカードはハートの6とスペードの8。合計14しかないので俺は迷わず3枚目を要求した。

「……む」

新たなカードはクラブの3だったのでこれで計17だ。21を超えたならバーストになり無条件で負けになつてしまふこのゲームでは、とにかくバーストこそ警戒しなくてはならない。ディーラーと1対1の勝負なのだ。相手がバーストしていれば例え17でも勝てる。

しかしディーラーのアップカードはキング。そしてそのままスタンディングしているということは、最低でも17ということ。自信ありげに俺を見下ろす目からして、きっとそれ以上の手が入っている。

もう一枚引くしかない。このムツツリは間違いなく余裕の面だ。ディーラーに指を掻き込むような動作を見せて、次のカードを要求した。

ちょっととぞぞぞぞする。さて、勝負

引いたのは、ハートのエース。

「……また微妙なの引いたよ」

エースは1か11として扱える。11だとバーストなのでこの場合無条件で1となり合計18だ。どうしよう、後一枚引くとなれば

候補は1～3までしか無いのでバースト率はかなり高い。でも、

「もつ一枚だ」

俺の勘が叫んでいる。「ティーラーは絶対に18以上の手で待っている、行け！」と。

勝負だ。手の中に滑り込んできたカードに手を置き皿を握った。

深呼吸。

もう一回深呼吸。緊張感に滲む汗すら心地良い。神よ、俺に祝福を！

音を立ててめくった最後のカードは。

ダイヤの3。

震えた。21だ。今俺は大人の階段を一步昇った気さえする。勝ち誇った顔で残る4枚を叩きつけてやった。さあチップを寄越すがいい！

「21だ！」

「ブラックジャックです」

うん、あれだ。良く考えたら祈る相手を間違えた。

* * *

がつくりと肩を落とす俺の背後でにわかに歓声が巻き起しつた。どうやら大勝ちしているヤツがいるらしく、青くなつたディーラーがダラダラ流れる汗を拭つてゐる。それを見つめる背中は一つ。小柄ながら自身に満ち溢れた指裁きでチップを積み上げてゆく様は、まさしく勝負師の姿だつた。

あれだよ。あんなふうにカッコよくこの世界を渡り歩きたかったんだ。

「見学しようつと」

軽めのドリンクを頼んでから近づいてみると、やつぱりかなり小柄な一人組みだつた。肩までの艶のある黒髪と赤く長い髪を尻尾のように縛つて流した女二人。傍らには不釣合いなほどの剣が主を見守つていた。

ゲームはポーカーだつた。二人の対面に座る客との勝負らしい。

対戦相手はかなり負けが込んでゐる様子。その表情は険しく、スキンヘッドに走る青筋がぴくぴく動いてこれでもかと威嚇する。しかし手前の二人組は全然氣にしていない。一人で仲良く

「いれこらない、なの」

「やつですね、じゃあこれ切っちゃいましょう」

とかのたまつて手札を切つた。

.....。

.....落ち着いた。冷静になれ。Be coolだ。

そんなワケない。アイツらはまだこんな世界とは無縁なお子様なのだ。そもそも、やつらは幸せそうに馬鹿でかいアイスクリークを頬張っていたではないか。そんなあいつ等がこんなところに出来没するハズが無いって、いつか絶対に門前払い食いつだる。年齢制限とかそれ以前に見た田で。

さうか、世の中には同じ様なヤツが3人は居るといつ。そういう違いない、きっと名前は全然違

「リアつちまた勝つた、なの」

「サキちゃんのおかげです」

.....。じつやら間違にならじー。

「あ、レオンちゃんー」

「やつぼー、なの」

「いんな所で何やつてんだよお前」

.....。

俺の姿を見てぱっと嬉しそうな顔をしたリアは、何故かサキと一緒に座っていた長椅子の真ん中に座るよつお願いしてきた。そして何やら「こそこそと耳打ちされる。

「実は私たち、レオンさんの妹だと説明してここに入れてもらつたんです。ですから、少しの間だけ話を合わせてもらえませんか？」

「お願いおにいちゃん、なの」

全然似てないだろ俺達。

呆気に取られた俺を見て了承したと勘違いしたのか、二人はじやれ付くように腕を絡めてきた。途端に射抜くような視線があらゆる方向から突き刺さる。……え、なんで？

「一イイチャン、両手に花なんて羨ましいねえ？ ハツハツハツ」

ちつとも笑っていない声で睨んでくる野次馬の男。良く見ると周りのギャラリーのうち殆どの男が似たような視線を送ってくれていた。

「あやつ、お兄ちゃん怖いですっ」

「なのつ」

「お前、やんなキャラじやなかつただろ！？」

ぎゅっと腕を抱きしめられて、小さな膨らみが両側から押し付けられる。周りからの視線がさらに倍ほど厳しくなったせいで非常に

居心地が悪い。

テーブルを見ると、一人が飲んだと思われる果実酒のコップが半分ほど残っていた。ひょっとして一人とも酔っ払っているのかもしない。たつたコップ半分なのに。

「オイオイお前ら！ いつまで対戦相手を放置してイチャイチャしてやがるんだ！！！」

「さやー」

「さやー、なの？」

もう止めてくれ。そのうち呪い殺されそうな視線になってきた。

* * *

ようやく勝負が再開し、俺達の前にカードが5枚配られる。……信じられないが、二人の前には大量のチップがうず高く積まれていた。それに引き換え相手側には申し訳程度の小山。大勢は明らかだつた。

「ツーペアだ」

「スリーカードです」

勝つた。

「スリーカードだ！」

「フラッシュの」

勝つた。

「どうだ！フルハウスだ！」

「フォーカードですっ」

また勝つた。

なんなんだこの鬼のようなツキは。

「ぐ、ぬぬぬぬぬぬうう」

もはや相手は真っ赤を通り越して浅黒い。気のせいかどうかで見
たことのある強面と相俟つてかなりの迫力、どうりでディーラーま
で青くなる訳だ。

しかしそんな威嚇もこの一人には全く通用していない。なんせ相
手を見てもいない。一人で仲良く談笑しながらデタラメにカードを
捨てている。どれくらいデタラメかといふと、まず“55777”
と配られたカードから5を一枚だけ捨ててしまう。そして7をもう
1枚引いてくるのだ。

これはさつきフォーカードでフルハウスに勝った時の手札だ。相
手の手札は“A A K K K”的フルハウスだったので確かにあのまま

”55777”で勝負すれば負けていた。だが相手の手札が見えていない状況で、フルハウスを崩す気になど誰がなるか。こいつらどんな思考回路しているんだよ。

普通じゃないつてのは薄々気がついていたけどさ。

「クソッタレ！ 次だ次だ！」

強面の怒鳴り声のせいで更に青くなつてゆくディーラーから新たに配られたカードは、スペードの1・2とハートの3・4・5。強運は未だ継続中らしく、最初からストレートが成立していた。

「どれを交換しましょうか」

おいおいおい。

「1Jの3つこらない、なの」

しつとノータイムで捨てられるハートの3・4・5。

おいおいおいおいおい。

シユツ

……ん？

微かな気配を感じて対戦相手へ目をやると、なにやらくねくねと不穏な動きをしている。非常に気味が悪い姿だ。

「…………。」

男はくつくつ、と悪い笑みを浮かべてカードを凝視している。ついでに言えば、その直前にティーラーから何かが渡った所もばつちり田撃してしまった。平たく言えばイカサマだ。よほど良い手札を仕込んだのか男は歯をむき出して笑いを浮かべながら有り金全部を積み上げていく。

『……おにいちゃん？　どうした、なの？』

まだそれ続いてるのな。

怪訝な顔の俺を見てサキが首を傾げていた。……」んな勝負で負けるのも馬鹿らしいし、教えておいてやるつ。

『あいつがイカサマを仕込んだのを見たんだよ。悪いことは言わなければ降りておけ』

『ヤなの』

即答だった。

『勝負で逃げるのは私の一番嫌いなこと、なの』

サキの赤い瞳が好戦的に光る。ちょっと待て、と止めようとしたけど遅かった。

「勝負なの」

「バカが、食らいやがれ！ キングのフォーカードだ！」

おおお、と沸くギャラリーと勝利を確信して大笑いするスキンヘッド。面白くない光景だがさすがにこれに勝つのは無理だろう。引き際を知らぬとは所詮お子様はこの程度だったか、と思つてたのに。

「ふつ、なの」

ぱたりと倒したその手札は、スペードの12345。

勝っちゃつたよ。

泡を吹いてひっくり返ったティーラーと赤を通り越して白くなつたスキンヘッド。もう終わりと見たのか颯爽と席を立つ2人組み。

すっかり氷が溶けて不味くなつたカクテルを飲んで思つ。

これは多分悪い夢だ。

7・「いさな所で向むひてたまふ哉。」（後醍醐）

今回も読んでください。あつがいの「れこめ」。

お酒とタバコは、七十歳を過ぎたら、でも願いしまく。（念のため）

8・「 むづバレてる、なの」

あのバーに随分長居をしていたし、空氣の籠つた部屋から外に出るとすっかり陽が落ちていた。

「 また甘いもの食べましうね、サキちゃん」

「 なの」

俺の後ろでは不良勇者とその仲間が稼ぎの山分けに興じている。元手に幾ら使ったか知らないが、アイスクリームなら気絶するくらい食べてもまだまだ余りそうだ。

「 そろそろ飯にしないか?」

時刻は夕食の時間に差し掛かっている。辺りの食事処からは競い合つように魅惑的な匂いが撒き散らされていて、肉や魚が焼ける良い匂いや音はどれも旨そうだ。どこの店に入るか迷つたが、結局はサキお気に入りの店に突撃する事になった。

「 ここは色々な食べ物が揃ってる、なの」

案内されたのは明々とした松明が外観を照らす華やかな雰囲気の店だった。流石に地元住民は良い店を知っているらしく既に結構な数の客が並んでいる。数分ほど待たされた俺達は店員の案内で奥のテーブル席へと案内された。

「美味しいな」

「おいしいですか？」

「口に合つて良かった、なの」

俺は米と色々な具材を豪快に炒めた鉄鍋料理を頼んでみたのだが、食べてみると色々な味が混ざつて面白い。明日もここに来ようかな。……ああ、忘れてた。そういうえば明日の予定について話し合つんだっけ。

「明日王様に会つ予定だつたよな」

「そうなの。明日は謁見の日、なの」

「くくりと頷いたサキは”サシミ”という生魚を美味そくに食べている。余計な心配だらうけど腹を壊さないのだらうか。

「でもそう簡単に会えるのかな。謁見は飛び入りの申請が通りにくいですし」

幸せそうにパスタを口に運んでいたリアが額にソースをつけながら割り込んできた。見た目はふざけているが言つてることは正しい。珍しく。

「最近は誰も会いたがらないから、すぐ会えそうなの」

どうやら相当人気が無いらしい。

それも当然かもしけない。さつきのバーのマスターにもちょこつと話を聞かせてもらつていたのだが、兵隊にずいぶん甘く好き勝手を許しているらしい。実際乱暴な兵士による厄介事があのバーでもよく有るやうだ。反面国民には厳しいらしく、突然税を重くして全て軍備に回すなんて暴挙も有つたらしい。

「やっぱり大分嫌われているみたいだな」

「みんなジャイノスのせい、なの」

黒幕、ねえ。そいつには会えるのか？

「あいつ王に四六時中くつこっている。金魚のフン、なの」

顔でも思い出したのかサキの箸運びが乱暴になつてゐる。主を齧かす敵だからか、ジャイノスってヤツが相当嫌いなようだ。

「まあ落ち着け。ところでその謁見にお前が出席しても大丈夫なのか？」

「ほら、お前じいさんの側近だし顔割れてるだらう。城に入つた途端襲われそうじゃん俺達まで、と主に自分を心配して言つてみる。

「そうなると、俺達だけで行つてくれるつてのが妥当だよな。気が乗らないけど」

「その心配は無いの」

「なんで？」と首を傾げる俺が食べていたチャーハンに変な影が映つた。何この丸い影。

「もうバレてる、なの」

「よう。ガキ共」

「あ」

俺の後ろでスキンヘッドが笑っていた。もうあれつきりの人だと
思つたのに結構しつこい。さつきポーカーでコテンパンにされたの
にまだ懲りないみたいだ、といつか相当怒つている模様。

「これはひょっとしなくても面倒事になるのでは」

「こまわり、なの」

「すみません、食後のデザートお願ひします」

一人だけ無関係ぶつているヤツがいるぞ、こいつ。

結論から言つと、サキがあいつを蹴散らした。

大体相手も悪い。チビだのガキだのさんざん叫びまわった拳銃こ
つちに問答無用で殴りかかってきたのだ。かなり酔っ払っていたが、
そんな事は沙汰に手心を加える理由には少しもならなかつたようだ。

* * *

スイッチは、じこさんを侮辱するような言葉を大声で叫んだ事だろう。

『もうこちどり言ってみろ、なの』

凶悪な視線が男を射抜き店内が音を無くした。それでも意地だけでサキに突っかかったのは賞賛に値するかもしない。俺なら逃げる。

連中自慢の鎧もサキの刀の前には紙同然だった。しつこく絡む男に何気なく振り下ろされた一閃は、あろうことか鎧だけを両断して見せたのだ。いや、殺つちゃったと思ったのは俺だけではない筈だ。何度も思い出しても男が一つに分かれていながら不思議だった。

何より恐怖したのは体験した本人だろう。真っ青だった顔を憤怒の形相に変えて

『貴様ら絶対に覚えてろよー!』

という教科書どおりの捨て台詞と共に退散したあいつけ、また登場する気だらうか。出来るだけ面倒なことはしたくないんだけど……あまり深く悩んでも仕方がないか。

「へりやつせまです。美味しかったです」

手を合わせて行儀よく食後の挨拶をするコロは、ちつとも気にしないなによつだし。

* * *

ほぼ同時刻。ここにはハイグレイ王城、王の間。

「ふん」

おもしろくないという心境を全身で表すように、少年がただ広い王の間でふんぞり返っていた。この国では誰よりも上に立つ人物である彼は、小さな頭に大きすぎる王冠を載せて大層ご立腹の様子だった。

またラインハルト卿の始末に失敗したのだ。

宣戦布告の書を寄せられた時、王はこれを自分に対する挑戦だと受け取った。指揮を一手に引き受け、自分の優秀さを知らしめる良い機会だとこの一月の間追々手を差し向け続けた。

しかし一向に成果が得られない。今日も役に立たない兵士長から言い訳ばかりの報告を聞かされるのだろう。

「も、申し訳ありませんっ！」

「ごちん」と王剣の鞘で叩かれた男が鼻を押さえてうずくまる。最近王は会話開始後の数言で結果が判るようになつてきているらしい。

もうすぐ聞く前に結果が解かるようになるかもしれない。

「こんの役立たず！　ばか！　お前なんてどつからりやえつ！」

「じつ、失礼します！」

兵士長に格上げされたばかりだったこの男は、今回の失敗で雑用まで一気に降格することが決定している。背後から同情の視線を送っていた文官を押しのけるようにして転がり出て行った。

「どいつもこいつも、ボクの作戦をちつとも成功させない！」

誰も声を掛けられない程怒りを顕にするその様はただの駄々っ子にしか見えない。下手に機嫌を損ねれば待つのは暗い未来しかなく、家臣達は一様にこの王を恐れていた。ただ一人の男を除いて。

「ゲッゲッ、お静まりください、グレイス王」

両生類が声を持てばこんな感じになるのだろうか。まるで蛙が「ゴゲゴ」鳴いているような人間離れした音が、王を振り向かせた。

「ジャイノスか。うん、少し取り乱してしまったな」

誰も手に負えない王を一言で鎮めてみせた男の名はジャイノス。現在の王の右腕を勤めており、執政全ての事実上の支配者だ。彼のことを、周囲の人間は揶揄と恐怖の念を込めて”ドールマスター”と呼ぶ。

というのも、何故か王はこの男に対してだけ耳を傾けるからだ。

他の者は首を捻るしかない。ガラスを金属片で引っかく音くらいに酷い声が王には心地よく聞こえるらしいのだが、周りの家臣達には全く理解出来ない。

そんな声を笑顔で受け止めた幼い王は、ジャイノスに先を促した。

「ゲ。実は王が懸念されている問題について報告がありました。ラインハルトを守護しているサキが、現在この王国内に潜入しているらしい、と」

「それは本当か！」

サキの名に王が色めき立ち、周りの人間も互いに顔を合わせる。

彼女を知らぬ者はこの場に居ない。かつての王の右腕ラインハルトの下に舞い降りた、”紅き守護天使”と称えられる少女剣士だ。失脚したラインハルトに今なお忠誠を誓う彼女は、彼を守る最大の壁として立ち塞がっている。煮え湯を飲まされた回数はもう小さな両手でも追いつかないほどだった。

「それで、サキは今何処に？」

興奮気味にまくし立てる王を片手で制す。腰を下ろすのを待つて、ジャイノスは玉座の間全体に響くように迷惑な声を張り上げた。

「ゲッゲッ、申し訳ございません。それは現在調査中でして、具体的な場所は申し上げられません。が、この状況を見逃す手はありません。守護の居ない今こそ絶好のタイミングと存じます。ここで一気にラインハルトに引導を渡すことを、強く進言いたします」

王側近の一人が隣と目配せした。相手も困惑の顔だった。

ここに居る誰もがラインハルトという男の重要さを知っている。

彼を殺してしまつ事は、國の首を絞めることになりかねない。

不幸な事故で両親を亡くして半年余り。落ち込む幼き王に対し厳しくも真摯に仕えてきたラインハルト卿が反逆者として追放された時は、誰もが驚いた。王にどんな心変わりがあつたのか、誰もその真相を知らない。ラインハルトの後釜となつたジャイノスが怪しいと呴く者も居る。

だが誰も何も言わない。言えないのだ。ジャイノスの発言中に口を挟む事は、暗黙のうちにタブーになつっていた。禁を破つた数人が既に処刑されている今、とても迂闊なことは言えない。

皆が同じ事を考えていたのだろう、誰も声を発しない。

「そうか、わかつた」

本当に内容を理解しているのかと疑いたくなる程王はあつさりと了解する。満足そうに礼をしたジャイノスは「ゲッゲッ」と低く笑つた。

夜の闇が深くなつてゆく。耳障りな哄笑だけが、我が物顔で飛び回つていた。

9・「言つてゐる場合かー」

「なあ」

「どうしましたか？ レオンさん」

「お前はいつも事態を予測しなかつたか？」

「あ、はは。ちょっとだけ思つました」

視線を泳がせるコアに同調するよつと、諦めの吐息をひとつ。

「コアひかり回じ、なの」

しれつとそんな答えを返すサキの額には、ベシックと裁きの拳をつけた。

「お前、とんでもない有名人らしいな

”紅き守護天使”とかいう大層な一つ名持ちのそいつが、惚けた顔で反論する。

「向こうが勝手にそう呼んでいるだけなの。私はそんなこと知らない、なの」

お前が知らなくたつて向こうにはお前のファンが沢山居るんだよ。タダでさえ田立つ赤い髪を堂々と晒しているのに、お前自身がそんな有名人じゃ敵に発見してくれつて言つてる様な物だらうが。

昨日は堂々と街中を歩いていたのに騒ぎが起きなかつたので大丈夫だと思っていたんだが、サキのファンは兵士に限つて圧倒的に多く存在していたらしい。今朝になつて王に会つためノコノコと城に出向いた俺達は、次の瞬間には一斉に追われる身になつていた。

薄い壁を挟んだすぐ向こう側でまた罵声が通り過ぎていく。午前中に宿を出た俺達の頭上には既に太陽が昇りつめていた。

数に頼つたしらみつぶしの搜索は確実にその範囲を広げ、このままチントラしていたら見つかるのは時間の問題だつた。ただの様子見のつもりが見事に騒動の中心に巻き込まれた格好になつている。

まあそもそも計画がいい加減すぎるんだけど。

「大体、何なんだそのふざけた変装はー?」

今に至る要因の10割を占めるそれを詰問するが、本人にはちつとも反省の色が見えない。

「変装だなんてコソコソした作戦は性に会わない、なの

髪の縛りを少し変えて帽子を深く被つただけの変装に飽きが来たのか、サキは帽子すらポイと投げ捨ててしまった。

「そもそも、もうバレてるって昨日言つた筈なの

「今朝ノープロノープロ言つていたヤツは誰だ!」

「はいっ

……そりが、お前だつたな。

「一応聞くが、その根拠は？」

「皆私たちを探していく、今のお城にはもう殆ど兵士さんは居ないはずです。今が王様とよく話し合えるチャンスだと思います。」

「……なるほど?」

ホントにこいつは頭が良いのか悪いのか良く解からないが、確かに言われてみればその通り。

「でもどうやってそこまで行くんだよ? 一歩でも外に出たら即見つかるぞ?」

「私に任せてくれださーい!」

リアが自信ありげに俺達の腕を取ると、何やら詠唱を始めた。俺とは書式が異なる印を結んだ途端に光が溢れ思わず目を窄ませる。

こいつこんな事もできたんだつけ、と思いつ間に転移術が発動。気付けば俺達は王城の屋上に立っていた。

* * *

代々受け継がれた武人の魂のような無骨な造りは、城というより皆を思い起こさせる。余計な装飾がなく機能だけを求めた造りは王の志向なのだろうか。12歳にしては渋すぎるから先代の趣味かも

しない。

騒がしさから一転した音の無い世界。静寂が支配する「」ハイグレイ王城は、確かにリアの言つ通り兵士達の気配が希薄だった。

「ふつ、作戦通りな」

しつと嘘つぐじやないよ。どうもえたつてお前何ももれていなかつただひ。

「バカなこと言つヒマがあるならわつせと用件を済ませよ」

今回の目的は王様と一度話をするつて事だよな？ わつきの騒ぎで俺とリアまでサキの仲間だつて知られた以上、今更簡単に事が運ぶとは思えないんだけど。

「あはは、なんとかなつますよ。」

「なの。レオつちは心配しすぎ、なの」

その根拠をぜひ聞かせてもらいたい。一人とも、口を逸らすんじやない。

「あの王様つて、お前から見てどんなヤツなんだ？ 確かグレイス四世つて名前だよな」

昨日聞いた話ではまだ1~2歳の子供で、ジャイノスつてヤツに唆されて色々問題起こしそうなんだっけ。これだけ聞くと、その子供はとても素直にお喋りに応じてくれそうにないんだけど。

「半年前に前王様が亡くなる前までは、主様が教育係みたいになっていた、なの。」

じいさんの護衛として常に傍に控えていたサキも、グレイスを良く知っている。我慢を言つことも確かにあつたけれど、グレイスが最も信頼していたのはじいさんだったという。

「ジャイノスが来てから王は変わっちゃった、なの。」

やつぱりジャイノスか。昨日も言つていただけどサキはジャイノスを何とかすれば解決すると思っているらしい。俺達の中で唯一事情を知るサキの意見だから、多分正しいのだらうけれど。

「王様とちゃんとお話をする為には、その人をビリビリして王様から離す必要がありそうですね」

「やつだよな。ってコトは、それなりに面倒なコトになりそうだよな、やつぱり。」

* * *

屋上での会議に区切りが付いたところで、俺達はいよいよ本格的に探索を開始した。城の内部構造を知るサキが先頭に立ち、俺とリアはその小さな背中にについてゆく。

「やっぱり、レオンさんが言つた通りになりそうですね」

気配を殺して進む最中、何故か上機嫌なリアが俺にキラキラとし

た顔を向けてきた。

「何が？」

「ほひ、レオンさんが仰っていたじゃないですか。争いの影にほひ
つと、悪いことを企んでいる誰かが存在するって」

あー、ちよひと前にほひんな戯言を呴つたような気がある。

「？　何の話、なの？」

ひやひそ話す俺のそばにサキが寄ってきた。どんな説明をすれば
良いのか考えるのが面倒なので、適当に誤魔化すことにしてみる。

「えつとですね、レオンさんは魔ね」

しつと妙なことを口走つやつになつたリアの口を問答無用で塞
いだ。

「むぐ？」

ちよひとこひおこで。ヒコアの首根つじを掴んでサキから距
離をとる。

「今何を説明しようとしたか貴女」

「あ、あの。レオンさんそんな、恥ずかしいです」

何を言つてゐるんだリア。お前が今何を想像したか知らないけど
絶対それ違うよ。

「別に俺達が何者なのかななんて情報、今説明する必要ないよな？」

勇者である」とを隠す必要は無いかもしれないが、俺は違う。この世界で魔王だとバレて得したことなんぞ一つも無かつた。といふか俺はそのせいで約1000年程酷い目に遭つたんだよ。

「サキちゃんならきっと大丈夫だと思いますけど」

まだそんなことを言つわからずやの類をつまむ。

「いや、いやにふんのれふか、」

「い・い・な？」

思い切り顔を近くして懇願する。祈りが通じたのかそれできつやく頷いてくれた。

「…………あう」

「なんだか一人だけで楽しそう、なの」

サキが何の話か知りたそうな顔をしていたが、これちっとも面白い話じゃないからな？

* * *

「ここにも居ないぞ」

第一候補の玉座の間、第二候補の王の寝室、第三候補の大広間（ここで食事が行われるらしい）すべて探したが、俺達は王らしき人物をまだ見つけられないでいた。兵は出払っているとはいえ最低限の人間は配置してある。見つかれば厄介な展開になるのは間違いない、かといってここで逃げ帰ってはわざわざこの国に来た意味が無い。

「あとはどこの怪しいと思つ?」

残る可能性は、城の関係者ならば誰でも入れるような場所しか残っていない。護衛の兵以外にも人が居る可能性が高いので危険度が上がるが、目的を達成するまではサキもリアも絶対に帰りたがらないだろう。さつさと見つけて早く終わらせたいし、少しくらいのリスクは覚悟しよう。

「いいか、お前ら絶対に騒ぎを起こすんじゃないぞ。いいな?

「それでは少々危険ですけど、それらしい部屋を一個一個探ししますか?」

3桁に達しそうな部屋数を誇る城だ、一体どれだけ時間が掛かるやう。

• ०

「ここにも居ない」

つてな具合に地道に丁度10部屋目を探し終えた時だつた。

「なにか」ギャラリー

早くもサキが音を上げた。その気持ちほんのくわしく解る。もう帰りたい。

「これが以上」んな事しても埒が明かない

何を思つたかサキは躊躇無く物陰から飛び出した。拔刀してから言ひ。

「そ」の男とつ捕まえて聞いてくる、なの」

何故かグッと親指を地に向けて爽やかに出て行った。

止めるなんて無理な相談だつた。神速で忍び寄られて鋼鉄すら両断するであろう刃を目の前に突きつけられた男は、サキの出現に驚愕しつつもひと言ふた言喋つたかと思うとアツサリ首を切断された。

「最初からこうすればよかつた、なの」

「ちょっと待てよおこつ！？」

何だ、何故そんなに冷静なんだお前は！ 死んだ？ 死んでるだろアレ！？ 刀が間違いなく首を抜けたようにしか見えなかつたんですけど…

騒ぎを起こすなつてどれだけ口を酸っぱくして繰り返したと思つてんだお前は！

「王様朝から出かけてるらしこの」

やうか。 そなうのか。 ならこくら探しでも見つかるわけ無いよな
残念無駄足かー、 つて

「言つてる場合か！」

渾身のノリツッコミにも、ぶんつと刀の鍔を落とす仕草をするこ
いつはちつとも意に介していいない。

「つんつん。……あ、だいじょぶです。ちやんと息していますから」「当たり前だ、生きて……何で生きてこるんだよ？」

ハツキリと斬つちやつた現場を目撃した者としては、俄かには信じがたい。しかし改めて見てみると確かにそいつは死んでもいないし首をちゅん切られてもない。見る限り全くの無傷だった。

「わかりやすく言つとこの剣のおかげ、なの」

俺が訳わかんない、という顔をしていたからだろ？。すらりと
た刀身の背を手に乗せて、犯人が凶器を自慢げに見せてくれた。

サキの刀を間近で見るのはこれが初めてだった。臘姫おぼねひめと名付けられた細身の刀は、曇り一つ見当たらぬ赤銀の輝きを静かにたたえている。良く見たら刀身には微かな意匠が掘り込まれていた。……なんだうづこれ。羽根、のように見えるけど違うかもしない。

俺はそんなに武器には詳しくないが、見れば見るほどこれに斬られて無事である理由がわからない、それくらいにこの得物には迫力があった。

「斬つたと見せかけて斬つていなかつたのか？」

そうじやないと説明がつかない。田で追えないほどの一閃だつたから、見間違いの可能性なら否定はできないけれど。

「ん？ 思いつきつ殺やつたなの」

頼むから不穏當な言い方をしないでほしい。

「詳しく説明すると長くなるし私も良く知らない、なの」

そこは威張るとこじやねえよとシツコむ前に、サキが臘姫を壁に突き立てた。

普通はどんなに良い刀であってもそんな事をすれば刃毀れの一つもあつて当然だ。なのにサキの刀は、まるで水の中に差し入れたような気楽さで音も無く壁を裂いてしまったのだ。とんでもない切れ味　いや、これは。

「『Jの子の刀身には実体が無いの。マボロシ、なの』

神刀朧姫。製作年は不明、製作者も不明。ただ、これを創つた者は人間ではないらしい。代々ラインハルト一族を守る刃の筆頭に貸し与えられていた業物だそうだ。

間近で観察しても実体があるようにしか見えないのだが、実体ある物が突然消える筈が無い。おもしろい武器だが相手からすれば厄介だろうな。俺もかなり戦^やりづらかったし。

ところで、刀身が幻だといつても確かにその刀にはモノを斬る力がある筈だ。まだ出会つて間もない頃こいつは音も無く木を切断して見せたことがあるし、何より今日の前で壁を切り裂くというアホな事までやつて見せたのだ。その切れ味なら人間が斬れない筈が無いのに、どうしてそこで倒れている人間は無事だつたんだろう。

その答えは『J』く簡潔なものだった。

「『Jの子はヘンなヤツなの。人間には当たらない様になつている、なの』」

そう言われて昨日の酒場での出来事を思い出した。鎧だけ斬られて驚愕に目を剥いた男は確かに無傷だったのだ。一体どんな理屈なのか興味があつたが、サキは詳しい原理なんて知らうともしていいならしい。変なヤツで片付けられてしまつた朧姫にちょっとだけ同情した。

サキが言うには、この刀は神が授けた守るために力なのだそうだ。かつて魔王と呼ばれた存在が人間に恐怖を振りまいていた時代、迫り来る魔物の脅威から身を守る為に朧姫は生まれたらしい。その力

が人同士の争いに使われない様、人間を斬れないという一種の封印を施したのだとか。

不思議なもので、そうすることによって対魔の力がより増幅されたらしい。エク公とは違うけど、これも伝説レベルの武器なのかもしない。

「まさかとは思うけど、それ喋つたりしないよな？」

「？」

「うん、違うならないんだ。忘れてくれ。

「”人間”には効かないのか」

「斬られても体には一切傷がつかないの。その代わり、その人間に流れている“氣”を一時的に断ち切ることによつて無力化できるの。それがこの子の攻撃、なの」

腕を切り落とすように切れば腕が動かなくなり、首を切り落とすように切れば意識が落ちる。

「お前が普段遠慮なしに刀を振り回すのは、どうせ切れないって思つてゐるからなんだな？」

「そな。だからレオンといなだ遊んだ時も本気だった、なの」

強そうなのを見るとウズウズするの、などとマニアックな発言を

するサキに対し、今更ながら嫌な汗が流れた。

”人間には”。その言葉を聞いて、若干の不安が鎌首をもたげて二タツと笑う。

「……人間以外は？」

「ふつーに斬れる、なの」

「例えば魔族なんかは」

「効果バツグン地獄行確定、なの」

ですよね。

改めて目の前が暗くなつた。あの時サキの刃を避けられなかつたら、俺は今頃死後の世界だつたのか。

……いやいや落ち着け。目の前のこいつはこれでも仲間みたいなものだ。今更俺に向かつて振り回すようなクレイジーな行動はしないよなそうだよな信じじるぞ？……でも念のために言つておこう。

「あのな、サキさん。それもう一度俺に向かつて振るんじゃないぞ」

「こんな風に？　なの」

「振るなつて言つただろーが！」

何気ないようになつて見えて少しも手加減のない一閃をギリギリでかわ

した結果、万歳の格好でそのまま倒れる俺。

「大丈夫、痛くないの。最初は誰でも怖がるの」

「コイツは一体何を言っているのか。どうやら今まで誰にも剣を避けられた事が無かつたらしいサキは、怪しげな微笑を振りまきながら俺に歩み寄る。

「やめつ、止めろおいバカ!!の、うわつ...」

* * *

.....。

10分後。俺には10時間くらいに感じられた洒落にならない運動が終了した。

「まあ過ぎたことを気にしてもしょうがない、なの」

前にも言ったが、それはきっと加害者が言ってはいけない言葉だと思うんだ。

「いやいや、まさかレオンが魔族でしかも王をまだったなんて、な

の

結局正直に事情を話して事なきを得た（？）んだけど、棒読みでそんな事を言わると余計に腹が立つのは俺の度量が狭いからなのだろうか。

ふうっ、ヒ一つ大きな息を吐く。

激しい運動と恐怖で暴れていた心臓がようやく落ち着いてきた。

結局サキは、俺が魔王だからといって即座に切りかかって来るような真似はしなかった。それどころか、

「ん、ごめんなさい、なの」

しぬじゅくへ謝る」の姿を見ていると毒氣も抜かれるわけだ。

「もう解かったよ、だからもう俺に向かって振り回さないでくれよ

「うん。……それにリアックも、なの。まさか勇者様だったなんて、なの」

それはさきっと誰にも解らなかつたと思つから氣にしなくていい。

「わ、様なんて付けないでよサキちやん。お願いですか？」

普段のリアを見ていると勇者という肩書きに若干の疑問の余地があるのだが、そこは黙つておいた。まるでつこでとばかりにカミン

グアウトしたけどいいのか？一応秘密だつたんじや。

「……まあ、とにかく」

周囲をぐるりと見回して一言。

「これからどうするかだよな」

当たり前といえば当たり前なのだが、あれだけ騒いで兵士に見つからないというのは幾らなんでも虫が良すぎる。そこまで気の抜けた警備である訳もなく、俺達三人は大量の兵士に囲まれていた。

「結局こうなるんだよな……」

おおよそ前から数百人、後ろからも同程度。じわり、と円を形成しながら迫つてくる。逃げるどころか出口すらみえない混雑具合だった。

「どうする？」

「どうしましょうか

「取り合えずレオンを生贊にしてみる、なの」

「却下だッ！」

「か弱い女子達に戦えていい筈、なの」

そのか弱いお前に殺されそうになつた経験を持つ俺は、一体何で形容されればいいのだ。

「あーむひ、とつあえず包囲を突破するぞ。いいな？」

異論は無いよつなので「せーの」で息を合わせて一気に突破しようとした俺達。

しかし、予想外の人物がそれを遮つた。

「そこまでだ！ 愚か者共め」

この場に似遣わないソプラノ声。全ての視線を集めるとそこには、これ以上ないつてくらいに得意げな子供、もとい王の姿。

そして、背後には何故か拘束されたじいさんがあった。

「……もしかして私達、ピンチですか？」

返事をする氣にもならなかつた。

9・「書いている場合かー」（後書き）

読んでくださいありがとうございます。

私用のため、2日に一度更新というペースからずれてしまいますが
本日投稿します。

次回投稿は27日の予定です。

10 「まあ、やうなんだけども」

「捕まつちやいましたねー」

「捕まつちやったのー」

「捕まつちやった、なの」

「……」

「困りましたねー」

「困つたのー」

「困つた、なの」

「……」

何だよこのやるやるな空気は。

こんな薄暗くてじめじめした不快指数満点な地下牢で、こんな能天気な会話とか。普段能天気な人間のシリアルスな一面が見れるかなー、なんて少しでも思つた俺がバカだった。

当然のように奪われた武器はここにあるはずも無く、リアもサキも丸腰状態だ。魔法が使えるリアはまだしも、サキはただのお子様に格下げである。こんな状況でもてんてこ劇いとか何を考えているんだねー。

多分何も考へていらないんだろうな。

「今なんか凄く失礼なこと言われた気がする、なの」

「氣のせいだ」

あの後、俺達3人はじいさんを盾に抵抗するなと脅された。じいさんを守ることが何よりも大切だとするサキの強い願いに押されて、結局俺達は抵抗することなくこの牢屋に押し込められる道を選んだ。

「まさかあの状況でアンタが出てくるとは思わなかつたよ」

「ほほほ、すまんの」

「こんな状況になつても相変わらず飄々としたじいさんだ。

「じつらじせよむづく潮時じやつたからの、この機会に賭けてみようと思つたんじや。まさか君らにこんな迷惑をかけるとは思わなかつたものでの。」

じこせんはさつ語りと、若干沈んだ顔で今までを語り始めた。

* * *

一月以上も続いた暇潰しの付き合いも限界だった。味方は傷つき、もう戦う力が残っていない。これからどうするべきか判断に迷つて

いたじいさんの潜む森に俺達が迷い込んだのは、丁度そんな時期だった。

「渡りに船とはまさにこのことじゃ、と神に感謝したよ」

サキを俺達に同行させるという決断には、殆ど迷いが無かつたといつ。サキが王と会う事で事態が好転する切欠が掴めないかと期待していたらしい。

「どうして俺達を信用したんだ？　ふつう少しばかり疑うと思つんだけだ」

俺達がどんなヤツかも良く知らないのに。自分で言うのも変だが、リアはまだしも俺は無害そうな顔をしていると思わないんだけどな。一応魔族だし。

「サキが手放しで誰かを気に入るなど、サキに出会つてから初めての事じやつたからの」

「気に入るつて、俺を？」

「リアつちも、なの」

どうして？　と尋ねるリアと俺一つの視線を感じたのか、サキが人差し指を額に当てる。どうやら考えるポーズらしい。

「なんか、二人とも面白そうだったの」

何だその理由は。

「あ、私もそれわかります。お一人と一緒に居ると何故か、わくわくしますから」

リアも直感だけで生きているらしい。お前実はただの直感で魔王を連れ回そうとか思つたんじゃないだろうな。

「ふたりって、わし仲間はずれ?」

じいさんはちよつと黙つてくれ。

「面白そつて、それだけで仲間にしようつて?」

「勿論、実力も凄そつて思つたの。私一人じゃいくらなんでも国にケンカ卖れないの。でも二人が助けてくれるなら何とかなりそうつて思つた、なの」

「ケンカつて、お前話し合いをするために此処に来たつて言つていなかつたか?」

「備えあれば、なの」

……まあ敵地に乗り込む以上そういう事態はありえるつて考えるよな。見たところサキは対多には向かない能力だと思つし、わらわらと寄つてくる敵を一度に相手は出来ないのだろう。

「で、ろくに話も聞かないまま流されるよつて俺達はハイグレイに来た訳だが」

片隅でイジケていたじいさんに話の続きを促した。

「サキから離れるのはせいぜい一日か二日の予定じゃから大丈夫と思つたのじゃがの」

「こういう期待は往々にして嫌な方へと転がるもので、唯一恐れたいたことが起こってしまった。今まで最低3日は空いていた襲撃が今回に限り翌日に来たのだ」

「予想外の出来事じゃつたが、大軍を田の前にして覚悟が決まつてしまつたよ」

派手に燃えてしまつた森では結界も口クに作動せず、進軍の妨げになどならない。さほど時間も掛からずにつつかつてしまい、結局投降する道を選んだのだといふ。

「どの道、今までの状態が長く続くとは思つていなかつたしの。最後の会話に賭けてみようと思つたんじゃよ。ジャイノスを盲信する王を上手く説得できるかどうかは判らんのじゃが……」

大罪を犯した者に対する刑の執行は、王の御前で行われるしきたりなんだそうだ。そこでもう一度だけ、王と話す機会が与えられる。

命を賭けたラストチャンス。それに全てを賭けようと言つのだ。

「そんな、危険すぎます。……こんな事考えたくないですが、もしも駄目だったら」

「つむ。その時は、別行動をとっていたサキに助けてもらおつかと思つておつたんじやがのう」

前言撤回、命賭ける気ゼロじやねえか。

ソレで会話は振り出しに戻る。

「困ったのー」

「困りましたねー」

「困った、なの」

「何か他人事のように心配しているけど、俺たち全員死刑っぽいよな」

……なんだこの沈黙は。

「やつぱりそういう思います?」

「何の為にこんな所に入れられると思ってるんだ。立派な罪人として認められたからこんな歓迎を受けてるんだろう? 大反逆者ラインハルト卿に『した不届き者として』

「照れるのー」

ホメてねえよ。

「でもでも、悪い方にばかり考えても仕方が無いですよ」

良い」と言つね。流石は前向きで純真な勇者様だ。

微妙に視線が合っていないのがビーいう意味か知らないけどさ。

「ひやつーー？」

何気なく肩に手を置いたことがそんなに意外だったのか、リアの体がそんな悲鳴と共にびくんと震えた。大袈裟な反応に不可解なものを感じながらも、一応謝つておく。

「悪い、脅かすつもりは無かつたんだ」

「あれ？……あ、そつか……」

一人で驚いて一人で何やら納得していた。

「セクハラ大魔王、なの」

そういうことをほそりと呟つんじやない。誰かに誤解されたらどうすんだ。

「あ、え、と違うんですつ。『めんなさい変な声出しちゃつて』

なんでもないんです、と笑うその表情はいつものリアだった。しかしあの驚き方はちょっとヘンだなと思う。俺が肩に手を置いたのがそんなに意外だったのだろうか。

「大丈夫か？ 色々面倒」とが重なつて疲れているんじゃないかな

「大丈夫です。牢屋なんて日常茶飯事ですから」

何処の世界に牢獄が日常にある勇者が居るのだといつしつ「ミサ
もつ面倒だからしない。結局押し切られたような形でいやむやにな
つたリアの話は、そのまま忘れられていった。

* * *

頭を切り替え、これから事を考えようとした頃。

随分と真面目な顔をしたじいさんが、俺とリアに笑いながら言つ
た。

「いじなったのもわしの責任じゃからの。君らだけでも何とか助か
るように、サキについてもらひつもりじゃ」

ワシとこう荷物をえなければ、脱出も不可能ではないじゃね?
とじいさんがあつ。

「まあ、やうなんだけども」

それだとじいさんを守る役が誰もいなくなる。

俺の隣にいる禿者を見ても、同じじいが言えるか? じいさん。

「わたしは残ります。そのまま見ぬふりなんて出来ませんから。せ
ひお手伝ってさせてください」

時折見せるガンコな声でそう言われて、流石のじいさんも舌葉に詰まる。再び俺の方を向いたじいさんは肩を竦めて見せるしかない。

「心配してくれるのは有難いけど、俺もリアも自分の身くらいは守れるつもりだ。説得が上手くいか判らないけど、じいさんの思うようにやってみればいい。駄目だった時の逃げる手伝いくらいはしてやるよ」

「ここまで首を突っ込んだんだ。今更結末だけ知らないというのも氣分的にスッキリしないしぃ。

「……ほほほ。サキ、本当にワシらは幸運じゃの」

「はい、なの」

じいさんは、サキと一緒に「ありがと」と頭を下げた。

改めてそんなことをされると妙に照れくさこねえ、そんなに悪い気もしない。

散々リアのことを勇者っぽくなこと言つて居る自分も、相当変なヤツだと思つ。自分の事ながら。

* * *

「そろそろ、明日に備えて休みませんか？」

ちょっと周りがうるさいですけど、トリアが不満そうに牛の外を見ながら言つ。

俺達が捕まつたとの知らせは既に全軍に届いており、城の警備体制は未曾有の人口密度に膨れ上がつていて。ちょっと耳を澄ませば暑苦しい鎧同士の擦れる音が聞こえてくるような状態だ。そこまでしなくても逃げないつてのにご苦労な事だ。

「おうおう、いい様だなてめえら」

「…………。またお前か。」

定時の見回りなのか、例のスキンヘッドが勝ち誇った笑みで近づいてきた。昨日サキが蹴散らして以来忘れていたが、ひょっとしたらサキの情報を知らせたのはこいつかもしれない。

ちょっとムカついた。

「……でただ座つてるのも飽きてきた、なの」

瘤に障るそれを目の端に留めたサキが言つ。

「なん」と言つたつてお前、何か策あるのかよ

ぽん、と俺の肩をたたく紅きなんとか。

「おねがい、なの」

100%丸投げだつた。

仕方ない、わざわざいじめ場頂いたコレに手伝つてもいいことじでんぢよ。

死刑執行の日は、少し汗ばむくらいの快晴だった。

見事に晴れ渡った空は何処までも青く、さわやかな風が吹き抜けでゆく。こんな格好じゃなければきっと良い気分だつたらう、と目の前で鈍い光を放っている手枷を見ながら思つ。

幸い手枷に大した仕掛けは無さうなので、すぐに抜け出せる筈だ。この手枷を壊して何時でも飛び出せるように軽く手首を捻つて具合を確かめる。俺の背中には、スキンヘッドを操つてまんまと奪還したエク公と朧姫が出番を待つていた。

「貴方はお父上の何を見てきたのですか。ハイグレイの力は抑止力ですぞ、加害になじ使って良いものでは無いのです！」

罪人として連行された俺達4人は、処刑の場である闘技場で仲良く身柄を拘束されている。そんな俺達の代表として発言を許されたかつての家臣が、王に最後の説得を試みていた。

しかし事態はのっけから不穏な空氣に包まれている。王がじいさんの説得を途中で切り捨てたばかりか、この場で他国を征服すると宣言したのだ。

「これだけの力、眠らせておく父上が馬鹿だつたんだ。僕はそんな無駄な事はしない。この武力があれば我が国は更なる発展を遂げられるのだ！」

「そのような暴挙で富を手に入れても人の心は集まりませぬ。いざ
れ更なる大きな暴力によつて飲み込まれてしましますぞ！」

「ばーか、ボクが負けるとでも思つてゐるのか。ボクにかかるば世
界征服だつて簡単さ」

「ホントですか？」

「黙つていような、リア」

話がややこしくなるから。

「何と滑稽な。わたくしげときを捕らえるのに一月も要した貴方が、
そうた易く世界をおさめられるとお思いか？」

「何だつて」

切り返された言葉に今までの余裕顔が一気に沸騰した。本当のこ
と言われて怒つてゐる姿は滑稽で面白いが、この駄々つ子は一応俺
達の生殺与奪権を握つてゐる人物もある。あまり刺激するのはマ
ズイのでは。

「ゲ。口が過ぎるようですが、『老人』

ほら保護者が出てきた。

思えば声を聞くのは初めてだつた。こんなふざけた力エルみたいな
声一度聞いたら絶対に忘れないだろう。今まで王の後ろで影のよ
うに佇んでいたジャイノスは何かを囁いた後、大人しく下がつた王
の前に進み出た。

「お王に用はない！ 王に！」

「ゲッゲッ、口を慎め。辞世の句を詠ませてやるとの王の心遣いを嘲笑いおつて」

手を掲げたカエル男に従つて周りの兵が一斉に弓を構え、矢の先をじいさんに向けて静止した。これ以上の発言は許さない、という無言の圧力。

それでもじいさんはそんな脅しに屈しない。あくまで王との対話を続けようとしてジャイノスを無視して語り掛ける。例え幾つもの矢が襲い掛かるとも、じいさんの隣には守護天使が控えているのだから。

「ふん、そんなもので主様は殺させない、なの」

たった一本の剣をどんな風に使えば全方向からの矢を殺せるのか。俺が手を貸すまでもなく、機械的に放たれた全ての矢が地面に叩き落された。

「ここまだだ。じいさん、下がつてくれ」

サキに続いて俺が一步進み出る。手枷など既にぶつ壊した。説得がすんなり行く訳が無いと覚悟していた通りの展開になつちまつたが、そうなれば俺達も予定通りにコトを済ませてしまつたとの場を脱出しそう。

「待つてくれ」

しかし、そんな俺達をじいさんは片手を挙げて制止した。

「頼む、待ってくれ。ここを逃したらもうチャンスは無いかもしねのじゃ」

「ゲッゲッ。幾らほどいつも無駄だ。偉大なる王の考えは変わらぬわ。……たつた三人の護衛で何が出来る?」

拘束を破つた俺達を見てもジャイノスにまるで驚いた様子は無く、それどころかますます高慢に笑う。呆れるくらい耳障りな音を撒き散らす男を、じいさんは正面から睨みつけた。

「もう一度言ひ。お主に用は無い、そこのをどけ」

「……ゲッゲッ。殺せ。」

号令に従い、狙いを定める兵士の手が機械的に矢を放つ。シユルシユルシユルと空氣の中を泳ぐ音が幾重にもなつて一点に向かう。当然、サキがそんなものを見逃す筈も無く、地面に新たなゴミが増えただけだが。

「じいさん、俺にちょっと任せてくれないか?」

再び進み出た俺が確認を取ると、憎憎しげにカエルを睨みつけていた顔が悔しげに下を向いた。諦め切れないのかもしれないが、これ以上この場での説得は無駄だ。あの子供王は恐らく意識を上から塗り替えられている状態 平たく言えば操り人形になっているのだから。

注意深く観察しても微かにしか感じられないからよっぽど上手く隠したんだろうが、俺の目は誤魔化せない。犯人は勿論あの変な声

のカエルなんだろう。巧みに王の意識をコントロールして、自分は最も王に近い立場に収まっている。カエルの狙いが国の乗っ取りなんかどうかは知らんが、どうであれコントロール下にある相手を説得しても徒労に終わるだけだ。

「……と思つんだけど、お前はどう思つ? リア」

「わたしは意識操作の術を使えないでハッキリとは解りませんけれど……でも、確かにあの王様の呼吸が不自然に見えます。息を吸うのも吐くのも、タイミングがあまりにも一走すぎて逆に違和感がありますね」

「言われてみれば確かにその通りだった。傀儡師の見習いがよくやる初歩的な失敗だ。やっぱり思った通りで間違いないと思つ。」

「そんな事が……すまんな、こんなことに巻き込んでしまつて」

俺達の話に愕然としつつも得心したのだろう。結果的に自らの行為が無駄になってしまったと思ったのか、申し訳なさそうに丸めた背中。それを俺がペシッと小突いた。

「そんなもうすぐ死ぬみたいな顔するなつての。リア、サキ」

兵士共の輪が出来上がりつつあるのを横目に、背中を預けている2人に問う。

「結局これからどうする? なの」

「喜べ、解かりやすいぞ」

と、カエルを指す。

「要するに、後はあいつをぶつ倒すだけだ」

そうすればきっとあの子供も田を覚ます。その後じいさんにたつふり説教でもしてもらひたばこの騒動も解決するだろ？。

「その前に、この兵士さん達を何とかしなこといなことですけどね

リアがエク公を構えながら周りを見渡す。俺達はじいさんを囲むよう背中を合わせた。

「俺は魔術師の連中を相手する。そっちの鎧着た暑苦しいのは任せていいな？」

「任せられた、なの」

「私はサキちゃんのサポート回りますね

頷きを返して囁く。

「よし……行くぞ」

* * *

数多の呪詛が一斉に吐き出され、数多の剣が殺到した。

俺の向いた先からは幾多の炎が燃え盛る。しかし慌てる必要は無い。生まれた炎同士が融合して巨大な炎になろうとも、所詮は鳥合の衆が生み出すモノ。全て受け止めたって痒くも無い。

「かつつか。温いわ、こんなチンケな火で俺を焼こうなんぞ片腹痛い」

俺が今までどれだけの炎を浴びせられてたと思つてゐるんだ。俺の鬼畜両親が繰り出す灼熱地獄に比べたら、こんなの焚き火にあたつている様なもの。

勝ち誇ったような顔をしていた魔術師どもの表情が凍る。もう遅いけどな。

「ひいいいいっ！？」

魔術というのは要するに自分の体内に持つエネルギー、俺は魔力と呼んでいるが、それを体外に放出することで色々な現象を巻き起こすモノだ。その手順は千差万別で、例えばリアと俺が全く同じことをやろうと思つてもその過程は異なる。

一般に良く使われている方法は、自分が何か道具を使つていてるイメージをそのまま投影してしまったり方だ。

例えば小さな火を起こしたいなら、火打ち石を打つようなイメージをしながら指を鳴らすと初心者は結構出来るようになるらしい。生まれた火が指先から垂れ流れていた魔力に引火してしまい小火を起こして怒られる、なんて失敗はちょっと魔術師に話を聞けばいくらでも出てくるだろう。

精度や発動速度は練習と経験を積み重ねる程に上がつてゆく。複雑なもの、特殊なもの程難しいが、成功すれば様々な現象を巻き起こすことが可能だ。例えば今俺がイメージする物は、鏡だ。

そつくりそのままお返しして差し上げるのだ。

「ぎゃああああっ！？」

俺の目の前で頑張つて燃え盛つっていた火を全て弾き返す。連中に当たる直前で地面に触れた炎の塊が火柱を巻き起こし、悲鳴もろとも吹き飛んでいった。

「余所見なんて随分ナメてる、なの」

火柱に目を奪われていた最前列の兵士は自分が斬られた事に気付く前に昏倒していた。目の前で仲間が倒れた2列目の兵士がサキを追おうとした直後に膝を屈する。

届いていない筈の刃が斬られていらない筈の鎧を切断する。そして次々と意識を刈り取る様は何度見ても不思議だ。大層な二つ名に恥じない力がありありと見せ付けるサキへ、さらに待ち構えていた兵士が一斉に剣を振り下ろしても結果は変わらない。

「100まんねん早い、なの」

別空間を跳躍するかのように淀みなく大群の間を駆け抜けけるサキにたつた一太刀すら浴びせられない。兵士が姿を認めて身構えた時

には、もう終わっているのだ。

「え？」

そう漏らした兵士が最後に見た光景は、既に最後列の兵士すらも同じ道を辿る姿だった。

「あの、私することないです」

戦場のど真ん中で、仕事の無かつた勇者が一人で拗ねていたのは放つておこう。

12・執行の田・2（前書き）

「」もで読んでください。あと、「」も。

今回残酷表現に当たる（と思われる）部分が少しありますので、苦手な方は「」注意ください。

「どうした力エル野郎。お前の手下はこんなモンか？」

周りに這う兵士の恐怖の視線を感じながら力エル魔導師に言い放つ。子供王すら驚きに田を見張るその様はなかなかに愉快だ。思い知つたらさつさと降参でもしなさいふははは。

「ゲッゲッ！」

だといつのに、ジャイノスだけはまるで堪えた様子が無かつた。ざつくりと突きたてた己の杖を両手に持ちながら、あの氣味の悪い声で詠唱を始めたのだ。

『炎よ、万物を無に還す力の源よ。我に従いて目の前の仇にその力を示せ』

魔術師の周囲を覆うようにオレンジの炎が顯現し、一気にその場の気温が数度跳ね上がった。聞き慣れない呪文だが炎の攻撃魔術でも上位に位置する威力を持つているようだ。人間にこれだけの力を持つている魔術師はそうそう居ない筈だから、威張るだけの事はあるかもしない。

「リア、出番だ」

「私ですか？ わかりました！」

今の所一番ヒマそうな勇者の背中を押すと、久しく出番の無かつ

た手元のエク公が嬉しそうに光を反射した。座布団があれば『よつやく出番か』とか憎まれ口を叩いているかもしない。俺の言つまに進み出たリアは珍しくじょと眉を吊り上げた。

「ジャイノスさん、こんな暑い日にそんな熱い魔法使っちゃダメですよ」

……その通りだけじゃ。もつちよつと他に無いこと無いのかお前。

「ゲッゲッ、やかましいわオマケが。貴様からこんがりと刑を執行してやるわ」

「……おまけ？」

あ。

外見は一貫一貫してこるリアの周りだけ温度が数度下がった気がした。

勇者として色々規格外な存在であるコイツは堪忍袋の短さも規格外な所がある。どうも正義の血が騒ぐのが、気に入らないヤツが相手だとその長さは特に短いみたいで。

「いやですねレオンさん。わたしそんせんもおひといませんよ？」

怖いよその笑顔。

「ゲッゲッ！ 消し炭になるがよい！」

一気に膨れ上がったオレンジの光が壁となって前へ進む。大量の熱が周りの兵士を巻き込む事など構いもせず、リアを一気に飲み込む勢いで迫ってきた。

対するリアは「いくよ、エクちゃん」と小さく呼びかけて上段の構えへと動く。掲げた刀身には既に輝く水が宿り、大上段から振り下ろされた聖剣が水のカーテンを描き出した。

オレンジ色の炎と淡く輝く水が正面から激突する。

リアの笑みを見た時点で予感していたけど、決着は想像以上にあつけなかつた。

水と炎のぶつかり合いの結末は、水が蒸発してしまつか炎が消えるか。……だと思っていたのだけど、微かにじゅっと音をさせた水波動が炎の壁を真つ一つに引き裂いてしまったのだ。

「ゲゲッ！？」

核を打ち抜かれた炎の壁が霧散すると同時に、固まつたカエルの杖の先端がポロリと落ちる。やるな、そこまで狙つていたらしい。

「ひどいです！ 私オマケじゃありません！」

ところでやつぱりそこに怒っていた。こいつの地雷は何処にあるのかいまいち解かり辛いのでうつかり踏んだらどうしようとか本気で思う。

「……げう」

自らの杖を呆然と眺めるカエルの顔が不健康な色に変わる。元々不健康そうな色をしていた顔は面白いように蒼褪めていた。

* * *

「……小瀆なマネを。貴様、何をしておるー。早く賊共を殺さんか！」

暫し呆けていたジャイノスが、先端の無くなつた杖を振り上げながら無様に声を張り上げる。

「どうした、殺せ、殺さんか！」

しかし誰もジャイノスの言葉に何の反応もしない。それどころか兵士たちの様子が明らかにおかしい。冷水をぶつ掛けられた後みたいに眼を見開いて近くの仲間を呼び、そして何事かを口にする。皆一様に驚いている様子なのだ。

「ううつー……？ うああ……ツ」

突然の変化は奥の天覧席に鎮座していた子供にまで及んでいた。頭を抱えて苦しそうに蹲るその姿に、世話係らしきメイドが血相を変えてしまふ飛んでくるのが見えた。

変化はそれだけじゃない。よくよく見れば、先程までどこか虚ろだった兵士たちの視線が随分ハツキリして、この人数に相応しい音

（例えば小さな囁きや、鎧の擦れる音）が聞こえる。それでようやく気付いたのだが、今までこの空間は不自然な程に静かだったのだ。あの杖が壊れた途端にこんな反応があるってコトは、この場の兵士全員がカエルの影響下にあったのかもしれない。

「やっぱりあのカエルさんが色々と悪事をしていたみたいですね。でもこれできつと元通りになるはずです」

つまり、今リアが切り落とした杖が催眠魔術のキーだつたつて口とか。

確かに少し前までジャイノスから感じた力強さをもう殆ど感じない。これ以上何をする力も残っていないだろう。

「ゲ、静まれいつ！ 王の御前であるぞ！」

やがてハッキリ声を出す者も現れ、場の混乱は加速度的に大きくなってゆく。勢いは留まる事を知らず、このまま行けば皆が正気に戻るのも時間の問題だった。

「のまま何事もなかつたら、の話だつたんだけど。

「おやおや、大失態じやないの？」

地鳴りを巻き起こしそうだつた程の勢いが嘘のように止まる。

新たに登場した人物は心底愉快そうに唇を歪めて、くすくすと笑っていた。

* * *

その人物がジャイノスよりも格上だということは、本人のみつともない動搖振りからも十分理解できた。リアより少し大きいくらいの背格好をした男が頭3つ分は大きいジャイノスを圧倒しているのだ。

鮮やかな金色の頭髪がクスクスクと笑う度にゆらりゅらと揺れる。それにすら怯えるようにジャイノスは一步後退し、喘ぐように相手を凝視した。

「いやー、ラッキーだったよね。冷やかしのつもりでちょっと寄つてみただけなのに、こんなに面白こものが見られるなんて」

ふふふ、とまるで気の置けない友達との会話のように男は楽しそうに囁く。

「ねー、どうするの？　このままじゃお前、間違いなく殺されちゃうよ？」

殺される？　内容を理解できない俺達の事は全く視界に入れずに、闖入者は金の髪を無造作にかきあげて深い闇色の瞳を窄ませた。

「まだ失敗などしておらぬ！」

「冗談言わないでよ、完全に力負けしていたじゃない。アレでしょ？　“宝玉”を開放する為の鍵を処理するつて仕事だったよね？　まだ終わっていなかつたんだ？　もうかれこれ何ヶ月経つてるか知つてる？　お前が非力な力エルだつて事は知つてゐるけど、流石にもう終わつてゐるだろ？　と思つてゐたんだよ。けれど想像以上にお前は愚図だつたんだねえ。ボクなら一日要らないような仕事をコレだけ時間掛けて失敗でした、じゃあもつ言い訳できなによ。あーあ

男は相手が口を挟もうとする所に被せて言葉を連発する。ジャイノスは反論すら出来ないまま脂汗をポタポタと垂らす事しかできないでいた。

「ぐ、うぬう」

「……おつとそんなに睨まないでよ。何のために圧迫されたと思つているのやつ？」

今までジャイノスに注がれていた珍品を見るような目が今度はじめさんを捕える。まるで值踏みするようにその瞳が動いて、「ハツ」と馬鹿にするように口元を吊り上げた。

「ほんなどボ爺を始末するのにどれだけ手間掛けているんだか。仕方が無いから手伝つてあげたよ。感謝しなよ？」

手伝つて、あげた？

何を言つてゐるんだコイツ。突然出てきてべらべら喋りやがつて、あまつさえ訳のわからない事まで。不可解な言い回しをした男はもうじこさん興味を無くしたのか再び視線がジャイノスへ向く。

「そつそつ、鍵つてコレだけ？ 他には？」

ドサツと二つ音と共に、じいさんの体が地面に崩れ落ちた。

「な

「あ、主様！？」どうしたなのっ！？」

血相を変えたサキとリアが駆け寄る、その様を眼の端に捕えて金髪は言つ。

「なんだ、先代のグレイスを既に始末したのなら次で最後じゃん。だったら折角だから、ボクがお宝を運んで行ってあげるよ」

「ゲ！？ それでは困る！ それはワシが

運ぶんだ、とでも言つたりだつたのだろうか。抗議の意を持つて背中に触れた瞬間、その腕が奇妙な方向に捻じ曲がつた。

「ギャウ！？」

「汚い手で触るな」

金髪は一切手を触れていない。ただジャイノスの腕がさらに捻じ曲がりミシミシと音を立てて

ボキン、という乾いた音をさせた腕は、まだその動きを止めない。既に折れた腕をさらに捻り上げ、そして。

「やめら、止め」

「ぱいぱーい」

なにか、形容のし辛い音がした。鮮血が放射状に散らばつて周囲を赤く染めた。

「ゲ……グ……」

「おー綺麗綺麗、どんな愚図でも血の色は紅いんだね。ボクこれ大好きな色なんだよね」

出血がショックか、腕を千切られたジャイノスはもう息を止めていた。壊れた人形のようにヒクッヒクッと痙攣する姿を呆然と見守る周りの誰かが「ひいっ」と引きつった悲鳴のようなものを漏らし、それを皮切りに恐怖が波のように広がつてゆく。その様をくつくく、と楽しそうに眺める金髪は友達に語りかけるように明るく和やかに言ひ。

「さて、ちょっとだけ時間を無駄にしちゃつた。 そういう、君達も死んでくれる? これって一応部外秘なんだよね」

地面に染み込むよびとして消えていった金髪の言葉が引き金だつたのだろうか。気付けば音が再び静止していた。俺達は狂気に染まつた兵士に囲まれていた。

* * *

「つ、主様っ！ 目を開けてなのつ！ あるじさまーー！」

「リア！ ジーさんを連れてここから退くぞ、何処へでも良いくから
跳べ！」

振り下ろされた大剣を弾き返しながら叫ぶ。水の奔流を出現させて兵士たちを食い止めていたリアが、一際でかい波を打ち出して一気に押し流した。しかし間髪なく、際限なく凶刃は殺到する。

「つ、でも！ この人たちは……つく！」

襲い来る剣の嵐は先程までと威力も速度も段違いで、しかも完全に囮まれているのだ。一度に相手をする剣の数は十を超える、さらにそれごと潰す勢いで火炎が降り注ぐ。ジーさんを庇いながらの状況で相手をするのはいくら何でも苦しかった。

「俺達が居なくなれば止まる！ このままの方が危険なんだよ！」

それに、と後ろを確認する。俺の背後で必死に呼びかけるサキの声色は焦燥を通り越して悲痛な響きすら混じっていた。

「……解かりました、掴まつてください！」

大きく剣を薙ぎ払つた後に出来た一瞬の安息の間に、リアが素早く術を完成させる。

まだ意識の戻らないじいさんを抱え俺達は光となつて空を駆けた。

13・日天玉(ひあめ(へめんがめ))

辿りついたのはまるでボールを真ん中から切ったような、見慣れない様式の建物だった。リアが以前旅の拠点として使っていた物らしい。先頭に立つリアが手を触れた途端、何もなかつた外壁に扉が出現した。

「リアです。ついてきてください」

じいさんを抱えた俺は、余計な衝撃を加えないよう気を遣いながらも早足でリアに従つた。指されたベッドらしきスペースにそつと横たえる。相変わらず回復の兆しすら見せない主に、サキがそつと毛布を掛けた。

ただの回復魔術ならもう試したのだがそれでも全く効果が無く、しかし命を失つたわけではない。ただ目を覚まさないだけにしか見えないこの不可解な状態を、リアは理解しているらしい。

『水よ 命の源たる母よ その御心で伏したる彼を救いたまえ』

リアの体が淡く光を発し、徐々にじいさんに移つてゆく。薄い青色の幕が傷ついた身体を優しく包み込むと、若干じいさんの顔が柔らかくなつた気がした。

……それでも、目を覚まさない。

「リアっち、主様はどうして目を覚まさない、なの？」

主を守る事が自分の生きる意味とまで言い切つたサキには、何よ

りもそれが気掛かりなのだ。生きてこようといつ喜びから一転、その表情が翳つてゆく。

「えと、どうやって言ひたらいいのかな

一仕事終えたリアの表情も同様に暗かつた。どうしたんだ、どう、あとは回復するまで時間に任せるしかないと思うのだけど。そう俺が口を挟むと、リアは申し訳なさそうに否定した。

「それが、少し違うんです。あのねサキちゃん、落ち着いて聞いてね

リア曰く、今じいさんを蝕んでいるものはある種の呪いらしい。先程の治療ではその進行を止めるのが精一杯であり、このままでは永遠に眠り続けるしかないのだという。

「元通りに回復させることでどうしたらいい、なの

「それは……」

リアの言葉が詰まる。サキからの視線を受け止めていた瞳が迷いの色に変わった。それは多分、解決法を知らないんじゃなく言づかどうかを迷っている表情。

「言えよリア。どうして黙つているんだ？」

「お願いなの。主様を助けたい、なの」

サキの真摯な瞳を受けて何故かリアが視線を逸らした。らしくなり様子についつい口を挟んでしまう。ずっと何かを考えている様子

だつたリアがようやく口を開いたのは、それから大分後の事だった。

* * *

「『日天玉』^{ひあめのたま}』といつ宝玉を耳にしたことがありますか？」

「それがあれば主様を救える、なの？」

「結論から言えばそうなんです。」

「何処にあるのか教えて欲しい、なの」

迷い無く答えを求める。方法があれば例え世界の果てにでも今すぐ向かうつもりなのだろう。真剣そのものの表情で提げた愛刀を握り締めたサキに、リアは首を振った。

「在る場所はわかります。でもその宝玉は使えないんです」

「壊れるのか？」

「そういうじゃないんですけど、それがなくなるとみんなが困ってしまうんですね」

リアは感情を抑えるように、少しづつ説明を始めた。

リア曰く、この世界は各国に点在する日天玉によつて支えられて
いるらしい。普段当たり前に生活している全ての生物は知らない内
にこの宝玉に守られていると言つのだ。

「宝玉は常に膨大なエネルギーを国内中に発しています。無限と云
われるその力は例外なく国を栄えさせると伝えられていますし、事
実その通りになつています」

日天玉と名付けられた宝玉から溢れ出るエネルギーは、その通称
を”命の息吹”といつ。無限にしかも膨大に溢れ出るその力は何に
も染まつていなか”魔力の原型”と言えるものらしい。

個体差はあるものの生物は体内に魔力を持つてゐる。魔術を全く
扱えない子供も、海を自由に泳ぐ魚も、空を自由に飛ぶ鳥も例外な
くそれは変わらない。魔術師でもない限り意識することは無いが、
実は魔力は宿主の体を支えている重要な要素の一つだ。

仮に体内における魔力が枯渇、または過剰に蓄積するなどして極
端に変化すると、身体に悪影響を及ぼす。軽い症状だとめまいや吐
き気、発熱程度だが、重度となると命に関わる程の体内機能不全に
陥る。

そして生物はただ生きているだけで魔力を徐々に消費していく。
早くも1週間、遅くとも1月以内には体内の魔力が枯渇してしまつ。
その為どうしても魔力の補給が必要になつてくる。

大多数人間は魔力というものを良く知らない。当然、コントロ
ールする方法も知らないので魔力を補給したくとも出来るわけがな
い。そんなあらゆる生物に魔力を補給し続けているのが、日天玉だ

とこうのだ。

「日天玉はあらゆる生物の体内に魔力を送り続けています。ですから普通に生活していれば魔力が枯渇する事はありません。ですが、もしも日天玉からの魔力供給が止まれば当然大変なことになってしまいます」

黙つて聞いていたが、ここまで説明ではリアの言いたい事がまだよく解からない。

「じいさんを叩き起こすにはその宝玉の力が必要だつて話だつたよな？ 日天玉がどんなモノかつて事は解つたけど、どうしてそれがじいさんの為に使えないんだ？ 膨大な力を発散し続けているのなら、少しくらい借りたつて問題無さそうだけど」

「ラインハルト卿を治療する為に必要なモノは命の息吹ではなく、宝玉の内に眠つていてる”何か”なんです。私も実物を見た事は無いのですけれど、それを使えばどんな奇跡も実現すると言い伝えられています」

その奇跡にかかれば、最高の名医が匙を投げた人の命でさえ救う事が可能なのだという。言い換えると、じいさんの現状はそこまで厄介な状態らしい。

そして、宝玉を自在に扱えるのは”語り部”と呼ばれるごく一部の人間だけだそうだ。それは宝玉の内側にある”何か”を操る能力を持つた人を指すらしい。

「その語り部つてのは、どうにいる？」

「……ごめんなさい、知らないんです。昔お世話になつた方の中に一人だけ居たんですけれど、もう亡くなつてしましましたし……」

非常に珍しい能力で、大陸に一人居るかどうか位の割合らしい。

そういう人間はやはり特別視されるらしく、何らかの形で世に影響力を持つ。その為に争いに巻き込まれることも少なくないらしい。詳しく述べなかつたけれど、リアの知り合にもその口らしかつた。

「もし、その語り部が居ない場合はどうしたらいいの、なの」

当然の質問に対する答えは、まだ「どうしようもない」と言われた方が良かつたかもしない。

語り部の力を持たない者が同じ奇跡を願おうとするなら、宝玉を壊して中身をむりやり引き出す手段しかないとリアは言つたのだ。

そうすれば願いは現実になるらしい。

サキの主は助かるのだ。

「…………。」

ようやくリアが説明を逡巡した理由が掴めてきた。サキが今どうしても欲しいそれは、現状この国に住む何万という人の命を壊さないと手に入れられないモノなのだ。平和を守りたいリアと、主を救

いたいサキ。」のままだと確実にビガリカが折れるしかなくなってしまう。

「その宝玉はサキの国にある一つだけじゃなく、他の国にもあるんだろ？ 探せば一つくらい誰も使っていないヤツが在るんじゃないのか」

「……『めんなさい、私が知る宝玉は全てその国を守っている大切なものです』」

「だったら宝玉なんて使わないで、アイツ締め上げればそれで解決しないのか？ 呪いつてアイツの仕業だら？ あの妙な金髪」

「普通の術には確かにそういう解決法もあるんですけど、呪いといつものは効果が無い場合が殆どなんです」

思々しい事に、呪いの類というのは完成した時点で術者の手を離れる。つまりサキの主をこんな目に令わせた張本人をここに強制連行して、『さあ元に戻しやがれ』と迫つても意味が無い場合が殆ど。しかも呪いは術者が死んでも効果が持続するという特性まで持つていて。

半ば予想できた返事だったが、そうなるとこよこの手詰まりだ。

かといつてじことんをこのままにするのも後味が悪いけれど……。

「……『めんなの、リアっち』

それは覚悟を感じさせる声だった。サキは愛刀を鳴らして立ち上がり、不安定だった瞳には強い光が戻っていた。

「サキ？」

「思い出したの」

サキが言う。まだ主が座に就いていた頃、宝玉の間に一度だけ立ち入ったことがあると。

「王国の丁度中心に誰もが無断で入れない地下神殿があるの。あつとそこにあるモノが宝玉、なの」

「待ってサキちゃん、気持ちは解かります。だけどそれは……それはハイグレイ王国みんなが困る事になつちゃうんだよ。王国のことを誰よりも考えているラインハルト卿ならきっと、」

「だつて！……だつて、私には主様を守ることしかない、なの」

激しく髪を揺らしたサキがまるで叫ぶようにして遮つた。しかしすぐに、まるで空気が抜けた人形のようにその語尾は弱々しく、震える。

「私は、主様を助けたい、なの」

自分を確認するように、奮い立たせるように。サキは少し掠れた声でそう言った。

13・田代（たしろ）（後書き）

ここまで読んでくださりありがとうございました。

なんか説明ばかりの回になってしましました。文章は一応見直して
はいるのですが変なところが（いつも以上に）あるかもしません。
。。もし発見されたら指摘してもらえると嬉しいです。

14・サキ（前書き）

「とにかく。読んでくださってありがとうございます。」

今回は、最後のシーン以外はサキ視点になっています。

この話は番外編にするべきか悩んだのですが、結局はそのまま掲載する事にしました。

私は、自分の言葉が嫌いだつた。発言の最後に付けるそれは私にとって一種のまじないであり、護身術だつた。

もうハツキリと顔も思い出せないが、両親は私が6歳になつた頃に他界してしまつた。私の生まれはハイグレイ領の端にある寂れた山村で、一人で厳しい世の中に放り出された子供が生きる為には他人の庇護がどうしても必要だつた。

意外な事に、私の引き取り手はすぐに見つかつた。余分な人口は排除される事も珍しくない村なので、それは幸運だつたかも知れない。しかし私にとつてそんな事は気休めにもならないほど現実は厳しかつた。

引き取り手に名乗りを上げたのは村唯一の商人だつた。まだ大人の腰程の上背しかなかつた私は、使用人として雨の日も風の日も雪の日も数キロはなれた小川までの水汲みを一日の労働として課せられていた。

水汲みの量は一家一日の消費量だから、自分の小さな手に持てる桶で水瓶を満たすには数十回も往復する必要があつた。運ぶ水の量は幼く非力な私にとつてあまりにも多すぎた。それこそ死ぬ氣で運んでいたものの、ただでさえ栄養不足で発育が悪かつた私に大人でも悲鳴を上げる重労働が勤まる筈が無かつた。

夜が明ける前から始めた水汲みが日が落ちても終わらない。不甲

斐ないその様に怒った商人は様々な罰を私に与えた。

一番辛かった罰は、その日の食事を取り上げられたことだつた。最後の一滴まで搾り出した体はボロ雑巾のようにくたくたなのに、それを癒す栄養が与えられないのだ。一家が寝静まつた後、寒さに身体を震わせながら桶を手にして小川まで行き、飢えを凌ごうと浴びるよにして水を飲んだ。辺りに生えている草にも手を伸ばし、考える前に口に運んだ。

やつとのことで戻つてきた後は、少しでも体力を回復する為に眠ろうとした。でも私に貸し与えられた衣服は囚人が着るようなボロキレで、外気の冷たさがそのまま肌に突き刺さる。栄養がまるで足りない体は震えが止まらず、そんな日は碌に眠ることすら出来なかつた。

次に辛かつたのは商人一家から受けた悪意だつた。少しずつ身体が成長し、次第に課せられた量をこなせるようになつてきました私を面白くないと思つた子供が、何かにつけて暴力を振るうようになつたのだ。いつの間にか私はストレスのはけ口としての役割も兼任させられていたらしい。

「あ、の。桶を返して……ください」

少しでも機嫌を損ねたら執拗な罰が繰り返された。ただの悪戯で取り上げられた桶を返してもらうだけでも神経を削りに削る。どんなに頑張つても結局は暴力を振るわれるが、気分次第で回数が減ることはあつた。ただただ謝り続け、ただただ耐え忍ぶことが一番効果的だと知つてからは、亀のように身を硬くして無言で頭を下げるよつになつた。

それで暫くは何とかやり過ごせていたが、ある日唐突に商人の息子が

「お前、たまに“の”とか“なの”って最後につけるよな」

と、そんなことを言つてきた。自分では気付かなかつたが、それは私の両親の故郷特有の言葉で、この村では私しか言わないことをそいつが指摘したのだ。

「そ、そんなこと、ない……」

直感的に新たな暴力の口実にされると悟つて思わず否定する。それが狂つた耳には強い口答えに聞こえたらしい。私の体がくの字になつて吹つ飛んだ。

「口の利き方には気を付けろつて言つただろうが！……まあいい、卑しい生まれのお前にその訛りはお似合いでよ。いいな、これからはその卑しい喋り方をしろ」

「ゲホつ、つハ……は、はい」

左の頬を思い切り叩かれる。すっかり色褪せた私の髪がぱつと乱れて血のように舞つた。

「もう一度」

「つ……。はい……なの」

「はい」の後に「なの」をつけるかどうかなんて判らないけれど、そんな事を知らない子供には言い訳など通用しない。無理矢理でも何でも、言われた通りにするしかなかつた。

それから暫くはそのことで何度も口実を『えてしまつた。無言を貫けばよかつた今までとは違つて受け答えを強要されるので、どうしても隙が多くなつてしまつ。赤黒く変色するまで肌を叩かれ、その度に自分の迂闊さを呪うしか無かつた。憂さを晴らしてスッキリした顔の商人達が離れていくまで、地獄のよつた時間はずつと続いた。

* * *

そんな生活が数年続いたが、不思議と死にはしなかつた。水場に写る私の姿は今思えば酷いものだつたし、どうしても栄養が不足がちだつた為に背は大して伸びなかつたけれど、それでも私は生き続けていた。

それなりに成長した私が12歳になつた（これは適当に数えたものなのだが）ある日。いつものように水汲みに向かおうとした私に商人から声が掛かつた。

「おい」

「はい、なの」

「今日は隣の町まで商売に出て行く。お前も連れて行くから用意を
しひ」

「え……？ 私ですか」

はつと身を硬くする。あまりに突然な話に氣をとられて言付けに疑問を返してしまったのだ。私はこれから来るであろう「衝撃に目を瞑つた。しかし、驚く事に不間にされた。

「その薄汚れた顔を良く洗つておくよう。半刻後に出る」

ぐるぐる巡る疑問の答えを得ないままに街に連れてこられた私は、首に犬のような拘束輪を付けられた。その輪から太い鎖が伸びて自由が利かない格好で繋がれる。周りには似たような格好をさせられた年の近い子供が虚ろな目を泳がせていた。私はようやく自分の運命を悟つた。

これから自分は売られるのだと理解しても、私は全く動搖しなかつた。自分が見てきた世界以上の地獄が想像できなかつたから、なのかもしれない。

どんな所に売られようとなるようにしかならない。そう考えていた私は、自分の運命が変わる重大な局面だというのに他人事のように奴隸が売られてゆく様を眺めていた。

真つ赤な髪と瞳が珍しい色だったことから、私は商人の思惑以上に高く売れたらしい。

最初で最後に見せた商人の笑みも、私に何の感動も与えなかつた。

ぐいと引かれた鎖に引っ張られて首が痛い。私を買った男は舐めるように体を眺め回してきた。

「これからお前にはオレの店で働いてもらひつ……が、その前に俺がキツチリと仕込んでやる。きひひひひつ、今夜から覚悟しておけよう事は決まっていた。

「これから、よろしくお願ひします、なの

「あ？ ヘンな言葉遣いしやがるなお前、まあいいや。それも個性つてやつだろ……う？」

不意に鎖から掛かる圧力が消えうせる。

視線を上げると、私の髪よりも濃く黒ずんだ飛沫が男の腕から噴出していた。

「があつああああああああ！…？？ な……なん、うがッ！…？

悲鳴を上げる口に力強い拳がめり込んで、男は無理矢理に沈黙させられる。

「……貴様ら、覚悟は出来てあるんじやうつなつ！…？」

白髪交じりの男が発した辺りを搖るがす声が合図だつた。人身売買を取り締まる銀灰色の鎧を纏つた兵が一斉になだれ込む。

「ここから本当の、私にとつての運命の変革が始まった。

* * *

「サキ、昨日は良く眠れたかの」

「サキ、今日の昼飯は美味かつたの」

「サキ、よく出来たな。よしよし」

どれもが初めての言葉だった。

髪は櫛で梳かして手入れをするものだと知った。

服は重ねて着るものだと知った。

食事は日に三度もあることが普通なのだと知った。

眠る時は暖かいベッドを使つことを知った。

私の間違つた常識を知る度に初老の男は悲しそうな顔をして、それから優しく本当のことを教えてくれた。

ラインハルトと名乗つたこの人は忙しい身でいつも仕事の道具を片手に歩き回つている程なのが、館で私に会う度に立ち止まって声を掛けてきた。

「サキ、元気かの？」

「……はい、なの」

今思えば過去の自分を叱りつけたくなるが、当時の自分はまだラインハルト卿という人間を信用できないでいた。私が発した言葉は恐れに満ちてたどたどしく、擦れていた。何が原因でこの夢が醒めてしまうか解からないと考えていた。未だに残る体中の癌が呪いの様に私に囁いてきて、いつか酷いことをされるという確信に似た予感がどうしても消えなかつたのだ。

そんな思いを抱いていた私がとうとうそれに耐えられなくなつたある日、私は竜の洞窟に飛び込むような覚悟で仕事が欲しいと嘆願した。自分に出来ることならどんな事だってするからと必死だった。何か主の役に立つ事をしなければいつか酷い目に遭わされるという強迫観念を植え付けられていた私は、近くの森で薪を拾つてくると、いつ役目を仰せつかつて心底ホッとした。

「危険は無いはずじゃが、気をつけろんじゃぞ」

また初めての言葉をかけられ、どう反応していいか困つてしまつ。そんな私の心情を知つてか知らずか、私の頭を優しく撫でて主は外出していくた。

* * *

森の入り口には館から歩いて30分程で到着した。そこには手頃な枝が一帯に転がっていたので作業はとても楽だつた。私の腕はあつという間に薪で一杯になり、結局一時間ほどで頼まれた量を終えてしまつた。

「あれ……もういいの、かな」

あまりに樂すぎて、これでは満足してもらえないのではないか、という不安が湧き上がつてきた私は、もつと立派な成果を得ようと森の奥へと踏み込んでしまう。去り際に主から「決して森の奥に踏み込んではいけない」と注意されていたのに、成果を得ることに必死だつた私はその禁を破つてしまつたのだ。

果たして森の奥には薪の代わりに瑞々しい果物が沢山生つていた。これを持って帰れば許してもらえる、などと考えていた。冷静に考えれば許すも何もないのだけれど、私は染み付いた恐怖に突き動かされて夢中で果物を集めていた。そうして帰ろうとしたときに愕然とする。歩いてきたはずの道が何処にもなくなつていたのだ。

必死で帰り道を思い出そうとしても一向に解からない。ついには陽も落ちて途方にくれた私は、とうとうしゃがみ込んで顔を膝に埋めた。自分に残された選択肢は、夜が明けるのを待つ事しかなくなつてしまつたのだ。

「あ……あ……」

とんでもない事をしてしまつたと蒼褪めた。自分の事などどうでもいいが、主が必要とした薪を届けることが出来なかつたのだ。もう駄目だ、と思った。今までの分を取り戻すかのように恐ろしい罰を与えられるだろう。とうとう夢から醒める時が来たのだと、真剣

にそう思つた。重厚な音で唸る鞭の音が、下種な笑いを浮かべながら拳を振るわれる感触が、打ち捨てられボロボロになつた身体を自分で抱きしめながら必死に生きていた時の事が、私の頭の中に鮮やかすぎるほどくっきりと甦つた。

「あ……つああああつ……」

どんな罰を『えられるのだろう。夢にも思い描けなかつた今の生活の中で少しずつ小さくなつてきていた火種の燃りだつたものが、一気に燃え上がるよう』に私の思考を全て多い尽くして

「おお、こじにおつたか。心配したぞ」

だから、このとき聞いた言葉を、私はとても現実とは思えなかつた。

「大丈夫かの？　おお、こんなに体が冷えて……寒かつたじゃね？」

私の小さな体をすっぽりと覆うように抱き寄せて暖めてくれたその温度が、どれだけ私を変えたのか。それはとても言い表す事なんて出来ないだらう。

「おお、おお。もつ大丈夫じゃよ。大丈夫じゃからな

目が痛い。頬が熱い。喉が震える。不意にぽろっと飛び出た涙がまるで今まで感情に蓋をしていた物だったかのように、言い表せな

い気持ちが後から後から溢れて止まらなくなってしまった。

ぱりぱりぱりぱりぱり。

「よしよし。大丈夫じゃ。大丈夫じゃからな。」

ひくひく、と喉が引きつる。止まらない。止められない。

「 つべ。あつ。うああ 」

もう一度ぎゅっと強く抱きしめてくれた主様の腕の中で、私は生まれて初めて声の出るまに泣いていた。私という人間はこの時に生まれたのだと、今でもそう思っている。

* * *

主様は、本当に優しい。

「サキの髪も田も鮮やかな紅色じやな。紅は命の色じや。確かに珍しいが決して不吉な色ではないぞ、わしの好きな色でもあるしの」

「背の低さを気にしておるのか？ わしは可愛らじくて好きじやがの」

「生まれが卑しい？ 誰じやいそんな事を言いおつた間抜けは。わしが成敗してくれる」

こんな風に私の嫌いなモノ一つ一つを、上から力強く塗り替えて

くれた。中でも私の心に響いたのはこんな言葉だった。

「サキは東方の生まれかの？ その言葉遣いは遙か東に住む刀使いの特徴によく似ていての。誇り高く田の覚めるような剣技の使い手が数多く生まれてある有名な国なんじゃよ」

未だに抜けきらなかつた“なの”という癖。私にとつて悪夢への引き金だつたそれを主は誇れと教えてくれた。自分が言葉を口ににするたびに嫌でも思い出してしまう悪夢を、私の主が塗りつぶしてくれたのだ。

「刀使い、……なの？」

そして、主様の何気ない言葉が切つ掛けで私は剣を齧うこと決めた。主様は最初良い顔をしなかつたが、私の気持ちは変わらなかつた。修行を続けて剣技を修め、目の前のこの人を命ある限り守ろう。それは唐突に浮んだ考えだつたが、私はその為に生きてきたのだとすら思える程、思いは強くなる一方だつた。

苛烈を極めると脅されて入門した道場の修業だけれど、私には何が大変なのかよく解からなかつた。同門の皆が悲鳴を上げる荒行の数々も真剣を用いた手合わせも、自分の過去と比べれば遊びに等しいとすら感じた。

とても幸運だつた事に、私には剣の才能が備わつていたらしい。師範に「動体視力と反応速度は誰よりも優れている」と評された私は、剣を始めて一年余りで道場の誰よりも強くなつていた。

その頃から少しずつ主様の仕事を手伝わせてもらえるようになつた。がむしゃらに務めを果たし続けた私は、気がつけば主様の護衛

として筆頭に立っていた。隴姫を貸し与えられたのはその頃で、それを使いこなす為に私はまた修行に明け暮れた。

主様は私が剣を持つことに不安を感じていたらしいが、それでも私が務めを果たす度に褒めてくれた。それが嬉しかった。

私が傷を負うと主様はとても悲しい顔をした。それが悲しかった。

だから、私は何処までも強くなるうとした。主様を守りたいとう思いは絶対に消えない。でも悲しい思いもさせたくない。全てを満たす為には、私は強くなるしかなかった。

がむしゃらに強さを求めた私は、やがて人々から賞賛されるような成果を何度もあげた。そんな私が王の目に留まり、ある日王直属の護衛兵にならないかと誘われた。誰から見ても破格の待遇で、十人が十人とも選ぶだろうその道を、私は断つた。

当たり前の事だ。

私にとつての第一は主様を守ることであり、全てにおいて優先されるべき大切な決意だ。私の力は、私に生を与えてくれた主様に捧げよう。何があつても、例え命に代えてでも守りぬこうと、そう決めたから。それはずっと続く、私の存在意義をかけた誓いなのだから。

* * *

サキが行く手に立つリアを正面から見据える。じつと何かを語るよつの目で対峙したまま、どれくらいの時間が経ったのだろう。

「國の人たち皆を困らせる様な事をして、許されるとは思わないの。いつも、主様もきっとそんなこと許してくれないと想つ、なの」

「だったら、ね、サキちゃん。私も」

「でも、このまま治せなかつたら、主様はどうなる、なの」

もしもこのままじいさんの眼を覚ます事が出来なかつたら？　ずっとこのまま現状維持なのか、いつかは目を覚ますのか、それとも。

答えは、リアの表情^{かお}で解かつてしまつた。

部屋を飛び出したサキが、慌てて駆け寄つたリアの腕をすり抜け外に出る。追つて外へ出た俺達の視界が辛うじて捕えたサキの姿は、来た時と同じく光を纏つて空の彼方にあつた。

これからどうするべきなのだろう。今にも泣きだしてしまいそうだったあいつの顔を見て、俺は判らなくなってしまった。

ハイグレイ王城の後方に広がる森は、神聖な森だと教えられる。この国を守る神様がそこに居るからみだりに入つてはいけないと、子供の頃から口煩く教えられる。

ひつそりと広がるそこには何もない。美しい花も、甘い実をつけ
る木も、日々の糧になる動物も何もない。虫すら禄に見かけない。

誰からも見向きされない只あるだけの森だが、その周囲は國に厳
重に監視されている。深く立ち入るほど凶惡になる罠が至るところ
に張り巡らされ、森の周囲は常に交代で見回りが立つ。ただ、見回
りの兵士ですら何故その森を守る必要があるのか知らない。そし
て何故か誰もその事に疑問を持つたりしない。

サキはラインハルトの腹心として一度だけ案内されたことがある。
万ーの時は何を差し置いても、例え王を見殺しにしてでもこの神殿
を死守せよと教えられた。

この場所の存在は「じぐじく」一部の人間しか知らないので決して口
外してはならない、とも教えられた。そう教えたラインハルトが見
たことが無いほど厳しい表情をしていたのを、サキは良く覚えてい
る。

入り口は小さい。知らなければ只の岩の集まりにしか見えないそ
の隙間に体を潜り込ませると、中には驚くほど広い空間が待つてい
る。長く伸びた天然の通路には仄かな明かりがポツポツと並んで辺
りを薄暗く照らしていた。

「…………。」

サキの田^たが訝しげに動く。入り口から近いこの通路には蜘蛛の糸のような細さの封^{くわ}がされているはずだった。それを切れば仕掛けが発動し、侵入者を更なる地下奥深くに叩き落し、そのまま朽ち果てるまで封印してしまつ筈だ。しかし床に罠^{わな}が発動した形跡は無く、ただ糸が切れている。

(誰かが先に侵入している? 罠を解除して?)

サキはそう考えたところで、あの彫々しい金髪の男が何やら樂しげに吐いていた言葉を思い出した。

サキの思考^{しりょう}が一気に沸騰する。駆け出したくなる衝動^{せうどう}そのままで足を動かそうとしたが、グッと歯を噛み締めてそれを耐えた。

(……ダメだ。落ち着け)

背中に感じる壁にぴたりと身を寄せ、息を吸う。一瞬止める。ゆっくりと時間^{じかん}をかけてそれを吐き出す。

もう一度。

息を吸う。サキは落ち着けと血ひに無い聞かせながら、細心の注意^{ゆうじ}を払つて息を吐いた。

まるで存在を消してしまつかのよつて息を潜める。田蓋^{たあわ}の瞬きすら聞こえてしまいそうなこの無音の空間は、王ですら勝手に立ち入る事が許されない場所なのだ。サキがここに存在する理由なんてど

れだけ探しても見つからない。

ゆえに、バレたらそこまで。

サキの過ちは、すなわちラインハルトその人の過失となる。いくら「自分が勝手にやつたこと」だと主張した所で、主が責任を問われる事は避けられない。絶対に、絶対に失敗など許されない。

一瞬ごとに血を巡らせる鼓動の音がうるさい。じわりと滲んだ汗を拭つた。愛刀を握る手が肝心な時に滑らないように、そつと握りなおす。ただの兵士の見張りならばここまで緊張などしない。この守護者は、人間ではないのだ。

サキの耳と肌が相手の気配を捉えた。圧倒的な威圧感を受けて勝手に震えだそうとする体を押さえ込み、気配を殺す。

(大丈夫、まだバレていない)

強すぎる気配ゆえに感じ取ることは容易だった。歪な十字に伸びる薄暗い通路の奥で、そいつが周囲に目を光らせているのが手に取るように解かる。きょろきょろと首を左右に振った守護者が後ろを向いたところで、サキはそっと壁の隙間から姿を確認した。

深紅の翼を持つ偉大なる竜族 レッドドラゴンだ。

その口から放たれる業火を受けて、形を留めていられるモノなど存在しないだろ？

宝玉が守護者に護られているという噂は聞いたことがある。しかしそれは御伽噺であり、今時子供ですら話半分にしか聞いていない

ような他愛も無い作り話でしかないと、サキは今まで思つていた。

それが本当のことで、しかもその守護者が竜族だったなんて。

ドリゴン種は極めて希少な存在だ。冒険者と呼ばれる人々が一生に一度その姿を目に出来るかどうかといづれlevelであり、それが叶つたならばとてもない幸運だということ。

(私は今とんでもなく不幸だけれど)

田指す宝玉はすぐ近くにある筈なのに、幸運のそれが邪魔をする。とんだ幸運のシンボルだ、と愚痴つた後でやつぱりそれは間違つていないのでどうな、と情けなくサキは笑つた。私欲の為に宝玉を壊そうとする行為は誰が考えても悪なのだから。

今ならまだ引き返せるかもしない。いいを諦め、血眼になつて他の方法を見出す方が良いのかもしれない。仮にこの宝玉を首尾よく手に入れたとして、その後に待つものは主との永遠の別離に他ならない。取り返しのつかない大罪を犯した人間が傍にいられる理由など無いのだから。

でも、他の方法を探していたのでは間に合わないとサキ自身が反論する。主の容態を考えると残りの時間は恐らく数日もない。そしてその間に代替案が浮ぶとはとても思えない。

主を守る事こそが全て。それはあの田からずつと変わらぬ誓いだ。例え世界中から非難されようと構わない。絶対に主様を救つてみせる サキは握りすぎて白くなつた手をさすり、感覚を確かめた。

グルルルルル……

底冷えするような低いひと鳴きを残して、重苦しい足音を残しながら気配が遠ざかってゆく。もう一度手の感触を確かめながらその姿を見送った。

(……アレを倒すのはまず無理と考えたほうがいい)

なんとかやり過ごし、隙を突いて目的を達成するしかない。サキはここを諦め他のルートを探そうと一歩を慎重に踏み出した。

「わあああああああ……」

耳に痛いほど響いた叫び声に身を竦ませたのは、一度そのときだつた。

* * *

(ん……ん……?)

唐突に田を覚まして辺りをぼんやりと見回していたグレイスが「何かおかしい」と考えたのは、妙に視界が暗いからだつた。今はまだ田中の筈なのにどうしてこんなに薄暗いのだろう。そう考えた王は近くに控えているはずの侍女に声を掛ける。しかし返事は一向に返つてこない。

「マコン？ 何処に」

「わっ……」

「うわあああああああ……」

突然背後から声がして、こんなに動くのかと驚くほど心臓が跳ねて絶叫が木靈する。反射的に背後を振り向いた視線の先で、金髪の男がケタケタと腹を抱えて笑っていた。

「な、な……」

「やあ、やつと田が覚めたかい？」

「ふざけるな！ 私を誰だと知つてのことかー？」

「知つてるよ。最近即位したばかりの、蛙に操られていたお飾りだつて」「ともね

闇目の少年が唇を歪めて笑っている。たったそれだけの仕草に何故か心臓を掴まれる様な悪寒を感じて、グレイスは一步後退した。

「まあまあ、そんなに怖がらないでよ。言つことさせ聞いてくれたら命なんて取らないからさ。ね？ ほら笑つてよ？」

男の不可解な言葉に不快感が一層強くなる。少しも笑う気になどなれず、笑うのは恐怖に震える膝だけだ。グレイスはそれでも恐れを意地だけで押さえ込んで、状況を確認しようと周りを見渡した。

そして、ここが何処なのかを理解して愕然とする。

「……こなま玉の間ではないか！ 貴様、何故こんな所に
！」

「うそ、その宝玉をいただきに参りました」

あまりに平然とした口調で返されて、グレイスはぽかんと口を開けてしまった。

（どうして僕もコイツもこんな所にいる？ 今まで僕は何をしていたんだ？ 鬥技場で何かをやろうとしていた気がするけれど……
鬪技場？ 僕はどうしてそんな場所に……）

グレイスの思考は混乱するばかりで一つの仮説にすら辿り着けない。何故か苦しくなるほどの胸騒ぎが収まらず、白い顔を青くしてごくりとツバを飲み込んだ。

「混乱している所悪いんだけど、そろそろコレ開放してくれない
？」

少しも焦つていらない口ぶりで急かしてくる相手の口は、絶対的な優位に立つ者そのものだ。だけど、だからといってハイそうですかと頷いて良いワケがない。

「馬鹿な事を！ これを失った国は遠からず滅びの地になる。誰にも渡す訳にいかないのは当然だ！」

「知ってるよ。でも君の国がどうなうつとも、そんなコトゼバいいで
も良いじゃないか」

「ふざけるな！ 話にならない、即刻ここから立ち去れ……」

「そつか、うーん残念だなあ」

少しも残念がっているように見えない気配で「仕方がないな」と男はグレイスに歩み寄ろうとする。反射的に後ずさった姿が可笑しいのか、くつぐ、と金の髪を揺らした。

「平和的に話し合いで解決するように言われているんだ。もう一度だけチャンスをあげるからや。 早くしなよ？」

（気圧されている事を相手に悟らなければダメだ。例えハッタリを使おうとも、弱みを見せたらお終いだ）

そう口煩く自分に教えた教育係を思い出す。ラインハルト　彼ならこの局面を如何にして切り抜けるだろう、と。

（　そつだ、宝玉の守護竜は何処にいる？）

誰彼構わず襲い掛かる凶悪な赤竜だがこの状況なら贅沢も言つていられない。上手くけしかけられたらどんな相手だって

「無駄だと言つてはいるのに、どうして解らないの？」

必死に頭を動かしていたグレイスが闇色の田を見た途端、動きが止まる。

彼の記憶が続いているのはここまでだった。

* * *

「あーあ、やつちやつた。だつて仕方無いよね、この子強情なんだもん」

光を失つた瞳を覗き込みながら男はつまらなさうに鼻を鳴らした。

「ま、いいか。意識を奪つただけで変な痕跡は残らないし。許容範囲内だよね。……つたぐ、サクッとやつちやえれば簡単なのにわ」

サキがよつやくその場に辿り付いたのは、あの男が宝玉を台座から取り上げようとしていた時だつた。厳重に封印されているはずのそれを難なく拾い上げた男は、白く輝く球状の宝物を満足そうに眺めて「さて」と呟いた。

「 そこのキニ。何か用かな？」

反射的にサキの体に緊張が走る。

(気配は消えてるはず、なのに)

「そんな熱い視線を無視できるほどボクは鈍感じゃないんでね。隠れていで出でおいでよ?」

「ふん」

もとよつ「イツから逃げるつもりは毛ぼぞも無い。サキは一瞬だ

け目を瞑り、意識を戦闘用に塗り替えた。

「じょーとー、なの」

キッチリ決着をつけてやる。

そんな決意を胸に鐸を親指で弾いて、サキは舞台へと降り立つた。

初撃はナイフのような武器に防がれた。それがただのナイフでない事は、愛刀が貫通しなかつた事からも明白だ。少なくとも何らかの祝福を受けたマジックアイテムの類でなければ、そのナイフごと相手を刈り取るはずだった。

数個の蜀台のみが闇を照らすこの薄暗い空間で、相手をはつきりと見定める事は困難だ。受けに回るよりも攻めきつた方が有利に傾くと判断したサキは、受け止められた反動をものともせずに一撃目を放つ。

キイ……ン、と澄み切った音を残しながら双方の刃が影を残して踊る。リーチで勝るサキと手数で上回る相手の攻防は互角の状況が続いた。

「驚いたよ」

ひとつ大きな金属音を残して男が後退る。サキとの打ち合いで傷んだナイフをくるりと回したかと思うと、まるで手品のように無傷のナイフが現れた。

「こんな使い手がまだ居たんだね、こここのセキュリティも満更穴だらけじや無いらしい」

どうやらサキのことを警護の人間だと勘違いしているようだが、正してやる義理などない。早くケリをつけないと、本当の守護者に見つかってしまうのはまずい。非常にまずい。

「 うん？」

攻防の最中、2人よりも背の高い蜀台越しに対面した。普通はそれを避けて剣筋を走らせる。しかし、サキが持つ神刀にとつてそれは障害にならない。眼の錯覚かと思わせるほどの一瞬刀身が焼き消え、蜀台をすり抜けた刃が相手の死角を突く。男の笑みが初めて驚きに変わった。

（よし、利き腕を奪つた！）

ポタツ……ポタツ。

「……え」

驚きに眼を見張つたのは、サキも同じ。

虚を突いた筈だったが浅かつた。驚嘆すべき反応速度だが、問題はそこじやない。刃が微かに捕えた腕から鮮血が流れている。人間には当たらないはずの朧姫が腕を裂いたのだ。

（つまり、こいつは。）

「……ク、クク」

モンスター、にしてはあまりにも人間に酷似している。

相手の正体について思い巡らせていたサキに冷たい汗が浮かぶ。金の頭髪と闇のように暗い瞳、人に比べやや小さい耳を持つ姿は、太古に絶滅した筈の伝説の存在と余りにも似ていたのだ。

「鬼……鬼族、なの」

返事をしない相手はペロリと白いの鮮血を舐め取り、一イツと笑つた。

「…………？」

不気味な笑みに眉を寄せゆつも早く、サキの体に異変が生じる。

「…………な、どうなつている、の」

何が起きたのか理解できなかつた。何もされていない筈なのに体が重い。見えない何かに急速に自由を奪われている。

(「んなの、まるで呪い　呪い?）

「ま、さか」

まるで水中に放り込まれたよつだつた。サキにとつて周りのスピードが倍に感じる程に動きを封じられた今、相手の動きは絶望的なまでに速かつた。防ぐよりも速く鬼の手がサキの首を轡掴む。

「つぐ！…………！」

「イツは本当に、ただ相手を睨むだけで術を完成させるのか。

それ以外の可能性が、幾ら考えても思いつかない。普通は大なり小なり何かアクションをしなければ魔術だろうと呪いだろうと成立しないはずなのに

ググツ……

掴まれたサキの体が徐々に上へと吊られてゆく。伸びきった脚が苦しげにもがく様を鬼がせせら笑い、鋭く伸びた牙が口から覗いた。

「……つ……ぐうつー！」

「苦しいかい？ 苦しいだろ？ 今樂にしてあげるからね？」

相手の右手に持つナイフが不吉に光る。

狂氣を宿した闇色の瞳で覗かれると、まるで心を直接踏みにじられるような酷くおぞましい錯覚に襲われる。頸動脈を圧迫され続けるサキの握力が徐々に失われてゆき、柄を握る手が震えだした。

「ぐ……うあああああー！」

それでもサキは必死に掻き集めた力で刀を振った。掴まれた腕を狙つた刃はあまりにもトロい速度だつたけれど、なんとか首は解放された。

クラリとする意識を無理矢理取り戻す。呼吸の度に血の巡りが戻つてゆく。掴まれた喉が焼けるように痛くなつっていた。

「ゲホツ、ツハ、はあつ、はあつ……ー？」

空気を求めるサキの腹に爪先がめり込む。

悲鳴すら上げる間も無く、サキは数メートル背後の壁に叩きつけ

られた。

「こんなモノじゃ済まなさない……あ、立ちなよ」

「……く……う」

(強い。)

近接戦闘においても互角、さらにはの呪いのような能力は厄介どころの話ではない。相手を見るだけで術を完成させるなんて非常識も甚だしいが、そんな反則技も鬼族なら有り得る話だ。実在自体が疑わしい魔眼の類も、鬼という伝説の存在なら持つっていても不思議ではない。

(本当に、不幸だ。)

ドリゴンをやり過ごしたかと思えば鬼が居た、なんて三流以下のひどいストーリだ。

「……ひとつ、聞きたい、なの」

この状況を打破する手段を、サキは一つしか持っていない。それを実行する前に、どうしても確かめておかなければならない事があった。

サキが問う。極力冷静に努めた声色は、怒りが滲むのを隠せなかつた。目の前の相手をどうしても許せそうになかったから。

「……無理だね。もうあのジジイは助からないよ。本当に、零れた水が一度と返らないのと同じようにね」

果たして得た回答は最悪だったけれど、その言葉に安心感を得たのも事実だった。

「そつ……わかった、なの」

何故なら、これで心置き無く戦えるから。

不俱戴天の敵といつべきコイツを、許さずに済むから。

(今はただ、コイツを、倒す。)

サキは体を沈み込ませるようにして、ゆっくりと構えを変えた。

呼と吸。人は息を吸って吐く。全ての人間が行うこの動作は、やり方によつて身体に多大な影響を与える。“呼吸法”と呼ばれるその技術は一般人の生活の中にも存在し、例えば痛みを和らげる効果などは良く知られているが、身体の機能を一時的に活性化させる方法も存在する。

その効果の程は微々たるものに過ぎないのだが、ある物と併用するとその効果が爆発的に跳ね上がる事は、あまり知られていない。

それは体内を常に巡っているもので、サキは”氣”と呼んでいる。

鍊度によるが、氣を併用する事により呼吸法は一気にその威力を増す。高めれば高めるほどにまだ先が有り、どこまでも強化できるよに思えるほどだ。

今、サキの身体は目の前の鬼によつて動きを半分程に封じられている。解除法は解からない。仮に解かつたとしても本当に相手が睨むだけで発動する能力ならば、すぐさま同じ目に遭わされる。この状態をひっくり返す方法は一つしかない。

そう、身体をそれ以上に強化してやれば良いだけの話だ。呪いを跳ね返せるほどだ。

「……ツ、ツ……」

微かに漏れ響く吐息の間隔が短くなつてゆく。サキを囲む空気が歪んで見えるようになる。まだ、まだ足りない。強化の度合いは”段”で数えるのだが、今までに実戦で経験した強化限界は参段まで。

恐らく今必要な段数は 最低でも伍^し。

肆段以上をまだ試した事がないのは、肉体の限界を超えた途端に体内に收まり切らない力が激痛を引き起こすからだ。限界を超えた途端に襲い掛かる激痛は耐えがたい苦痛だった。

(けれど、例え身体が壊れたって構わない。私の大切な人を傷つけられた、その痛みに比べたら大した事じゃない)

田の前の敵を、絶対に許さない。

必ず主様を救つてみせる。

その決意が力となつてサキの体内に宿つてゆく。

「ツ……」

肆段。時の速さがマイナスからプラスに転じた。

痛い。

手も腕も胴体も脚も関係なく全部が痛い。体中が一斉に悲鳴をあげている。気を抜けばすぐにでも気絶してしまいそうだ。

それでも止める訳にはいかない。

歯を食いしばる。余計な事は何も考へるな。

(アイツを倒す。アイツを倒す。アイツをぶつ倒す!...)

最後に大きく吸い込んで、氣合と共に一気に吐き出す!...!

「カクゴじやがれつ、なのツ!...!」

伍の段に到達した身体が、踏み出した足が、痛みに絶叫するのを黙殺して敵の傍まで一足で跳ぶ。地脈を縮めるが如くの速度は完全

に相手知覚を凌駕した。

相手の動きが突然跳ね上がりれば対応も当然遅れる。短剣で防ぐより早く自らの体をつき抜けた刃を見て、恐怖に顔を歪める鬼の様を、サキには確認する余裕があった。

「なん……だつて……」

何の躊躇もなく赤銀が胴体から抜けた。

サキが手にする神刀のもう一つの名は”赤羽根”。その異名が示すように噴出した鮮血が羽根のように辺りに舞い、周囲を赤く染めた。

何の手応えも感じなくなっているサキの腕が刃の血を振り払い、微かな水音が静寂の中に生まれて、また静かになる。鬼の体がゆっくりと、ゆっくりと沈んでゆく。

「バ、力な。こんな、」

ひとり、と地面に音をたてて転がった宝玉をサキが拾う。

主の命ともいいくべきそれを両手でそつと包む。

まるで放心したよつこじつと見詰めたまま、サキは強く強く宝物を握りしめた。

「せ……て。破……しない……と……」

だからサキには聞こえていない。限界を超えて全てを運動能力強化に充てたツケは聴覚にまで障害をもたらし、さらにこれで終わつたという油断が、泣きたくなるほどホッとした心理が、この後るべき行動を遅らせた。

「消え……諸とも……終わ……」

鬼の体が地面に染み込むよつこ、呪詛を残して消えてゆく。

仰向けの唇が微かに動いても、もつ声は出ない。

「……ツ」

サキの身体が揺れを感じた。絶望のリズムを刻む足音の主がここに向かっている。何よりも恐れていた守護者が、罪人を裁きに来たのだ。

「イツ

相手を陥れたことに満足した、狂った笑みを浮かべながら、最後まで残っていた唇は溶けるように消えていった。

16・WEBの閲・2（後書き）

読んでくださいてありがとうございます。

続きは明日、大体毎前後には更新できるようにがんばります。

17・結末（前書き）

今回は前半に残酷描写があります。苦手な方はご注意ください。

咆哮は、唯一の出口のすぐ向いにまで迫っていた。

出口はひとつ。正面から戦って勝てる相手だとは到底思えない。まださつきの鬼のほうが可愛く思える程に、サキは壁越しのプレッシャーを感じていた。戦おうにも擦り切れた雑巾のような体はもう満足に動かない。逃げる道も無い。隠れる所なんてあるわけ無いけれど、それでも探す。

(もう少しでヒートルなのに、もう少しで、主様が助かるところに)

グオオオオオアアアアアアアアアアア ! ! ! ! !

サキの胴より何倍も太い四肢で地面を揺らしながら、火竜が姿を表した。

足が、竦む。

剣を取つてから今まで、どんな相手にも恐怖を感じなかつたのに。サキの歯が力チ力チと乾いた音を立てる。

「お……う」

守護者が罪人を裁きに来たのだ。

真紅の鱗を持つ巨竜がサキの姿を認め、凄まじい怒氣を叩きつけてくる。

サキの顔ほどもある巨玉が凝視しているのは、手にした宝玉。

刀身が情けなく震える。全身が疲労と激痛でまともに動かない。

「ぐッ」

出口は守護者の背後にのみ。

手にした宝玉を隠すように胸に抱き、激痛を噛み殺してサキが駆ける。

（主様の命は、もう残り少ない。絶対にこの宝玉の力が必要）

ガアアアアアアアアアアアッ！……！……！

薄暗かつた空間が眩い白色で染まる。突如膨れ上がったとんでもない熱量が全身に襲い掛かる。サキの体が意識から離れてのたうち回った。

「……！」

直撃したら骨も残らないような炎が目の前で炸裂したのだ。人の形が保たれているだけでも驚きだったのだろう。竜がそのぎょろとした目を不満げに細め、巨体をゆっくりとサキに向かって進めた。

ヒツ……ヒツ……ヒツ……

喉を焼かれ、奇妙な音にも聞こえる苦悶の声は、サキ自身にももう聞こえていない。

うつ伏せに倒れこんだまま、宝玉を守るように握り締めた。

「 が 、 の」

右の手が地面の石畳に爪を立てる。

「お がい、 だ 」

体を起こそうとして、力を入れた左腕が動かない。

「おねが 、だから、主 を、助 、わたし 、どう
い い 」

色が失われたサキの視界に映る守護者が、獲物を冷徹に睨みつける。縋るように口にした言葉を聞き入れる筈も無く、その巨体は止まらない。

悪夢のように巨大な足が、サキの体に圧し掛かった。

「が、あああああああああ」

跳ねた手からことり、と宝玉が転がり出てしまう。必死に手を伸ばしても届かない所にまで行ってしまった。

(死ぬ。ここで終わってしまったら、何よりも大切な人が、死

んでしまつ)

「だめ……なの?」

ギッと噛み締めた口から鮮血が流れる。ぽろぽろと涙を流しながら、必死に巨大な足から逃れようと足搔く。

「 けて。 、誰 、け……て」

グアアアアアアアアアアアツ！…………！

ふと、サキが体に感じていた絶望的な戒めが消失した。直後に巨体が地面を搖るがす音がして、パラパラと小石が辺りに降り注いだ。

「……トカゲ相手に、こんなにもムカついたのは初めてだ」

霞む視線の先に、別れたはずの人物が居た。酷く傷ついた体を抱き起こし、不機嫌そうな顔でサキを見つめていた。

「 、 ？」

「いい。ちょっと大人しくしてろよ」

魔王がそつと眼前に手をかざすと、そのままサキの意識は彼方へと沈んでいった。

* * *

「だいじょぶです。あとは安静にしていれば数日で回復するはずです」

リアは心底ホッとした顔でサキの体に毛布をかけた。その後すぐこの隠れ家に戻ってきた俺は何もやっていないように見えたかもしれないが、とにかく疲れている。

ああ、またたく。「イシシリ」と一緒にトライブルが大挙して押し寄せてくるのは絶対に気のせいじゃない、と声を大にして言つが誰も聽いちゃいない。

「なんだドラゴンなんかと戦わなくちゃならなかつたんだ。つたく……」

酷い目に遭つた。レッドドラゴンなんて久しぶりに見た。耐久力がハンパない相手なのでやり過ごううと思つたのに、良く見たらサキが足元に居たのだ。何あんなのが居たのか良く解らないけど、俺が不幸だったという事は間違いない。

「きっと宝玉を守つてる守護者だつたんですよ。それにしても大変そうでしたね~」

「そつ思つとならお前も手伝えよ！？ 何あんな厄介なのと俺一人で遊ばなくちゃならないんだよー！」

見てみるよホラ此処、と有り得ない火力で焦がされた服の端をプラプラさせて見せてもちつともリアには効果がないので諦めるしかない、といつか泣き寝入りに近い。

まあ、リアはじいさんの看病をずっと続けていたから仕方ないんだけれど。

「それで何処に飛ばしちゃったんですか？ サキちゃんをこんな酷い目に合わせたんですから、ちゃんとお仕置きしたんですよね？」

「あのトカゲ、そんな遠くに飛ばされるほど軟な体してねえつーの」

ムカムカした感情を込めた右ストレートをあの竜にブチ込んで、通路から強制的に退かしたに過ぎない。まともに相手してたら冗談抜きで決着前に日が暮れる。その間サキを放置する訳にもいかないだろ？

恐らくあの地下神殿の端辺りで目を回している筈だけど、もう一度と行く予定は無いからどーでも良い。ツノ折つておいたし。

田の前で横たわるサキが大事そうに握り締めている宝玉が、光を反射した。眠っているにも関わらず、まるで硬直したように握つて離さないので、そのままにしてある。

ぐー、と息を立てて眠るその姿は平和そのものが、体はリアが

悲鳴を上げる程ボロボロだった。

「つたぐ、無茶しやがつて」

サキが誰と戦っていたのか、おおよその予想はつく。

じいさんを助けるためにドラゴンとまで戦っているとは思わなかつたけど。

ついでに言つと、何故か柱の影に転がつていたオマケも想定外だつた。

「なあリア、あの子供はどうなつてる？」

思い切り無視しても良かつたのだが、発見してしまつたので仕方なくサキと一緒に運んだ人物はグレイス？世。少し前まで闘技場で偉そうにしていた子供だ。

「誰が子供だ無礼者」

「なんだ生きてたのか」

少し前に意識を取り戻していたグレイスが、小憎らしい視線を向けながら部屋に入ってきた。リアの治療が一段落したらしい。

「ふん、大体の事情はリア殿に聞いたよ。僕がじいを……ラインハルトを処刑しようとしていたと聞かされたときは驚いたけどぞ」

その姿はやっぱり小さいけれど、グレイスが見せた表情は前までのイメージと随分違う。本当に辛そうに目を伏せるその姿は、自分

の事だけを考えて喚き散らす子供とは別人のように思えた。何か変なモノでも食べたんだろうか。

「あの男は、サキが？」

「金髪ヤローのことを言つているのなら、本当のところは俺も知らん。サキに後で聞いたらしい。俺が見たのは馬鹿でかい火竜だけだ」

俺がその場に到着した時にはもうヤツの姿は見えず、サキは竜の下敷きになっていた。だから今は想像するしかないけれど、サキの状態を見る限り、かなり激しいやりとりがあつたんだろう。

グレイスは一つ大きな息を吐いて、目を瞑った。

「やつぱさ、僕の責任なんだろうね」

俯き加減で呟くグレイス。何が？と尋ねるとしぶんだ声色が続いた。

「じいやサキがこんな目に遭つたことだよ。僕がもつとしつかりしていればと思うと情けないよ。……それで、じいを救うには宝玉が必要なんだ？」

「ええそなんです。でも」「

「いいよ」

何でもないよとに言い切られたせいで、理解するまで大分時間が掛かった。理解しても意味がわからなかつたけど。

「いろいろ小言ばかりでつるむとこヤツだけば、居なかつたら物足りないしね」

「でも、それでは宝玉が

「さつきリア殿はこの宝玉を壊して使つて言つていたけれど、それ間違いだから。僕なら壊す必要なんて無いからね。今のじいを治す程度の奇跡なら、宝玉に影響があつてもせいぜい暫く国に渡る風吹が微減するくらいだと思つ。リア殿が進行を食い止めていてくれたお陰だよ、ありがとう」

「え？」

ハモッた。

「僕は“語り部”だからね

まるで悪戯に成功したような得意気な顔をして、グレイスは笑つたのだった。

17・結末（後書き）

次話で一章完結になります。
明日の昼頃までに投稿したいとおもいます。

18 「終わりだ終わり。むつ次へ行けませ」

瞼をゆっくりと開いたじいさんに飛びつくように抱きついたサキは、まだ回復しきっていない体も手伝って、腕の中ですぐに眠りに落ちてしまった。全ての緊張が解けたお陰か、その寝顔は先程までと違つてとても柔らかなものになっていた。

少し照れた風に「ほっほ」と笑つて大切そうにサキの頭を撫でるじいさんは、事情を知つて驚いた様子だつたけれど、皆が無事だったことが何よりだと喜んでいた。

暫くして落ち着いた面々を前に、グレイスとじいさんは「是非御礼がしたい」と城に俺達を招待してくれた。結果的に国を救つたことになつてゐるらしい俺達に、王様からお褒めの言葉や褒美を頂戴する話が持ちあがつたらしい。けれど堅苦しいのは嫌いだし肝心なところでも何もしていなかつたので、辞退した。

結局は立場上断れないサキだけが盛大に祭り上げられ、そのことで文句を言われたのは、まあ余談だろ？

* * *

「サキちゃんには深く考へないで、つて言われたんすけど……」

サキを称える式典の歓声が微かに聞こえる城の片隅で、リアは困

つた風に笑つた。

さつきから浮かない表情をしているのは、ずっと考え事をしてい
たせいらしー。

「結局、私はどうすれば良かつたんでしようか」

そう俺に問い合わせたリアは、懺悔するように頭を伏せた。

あの時リアは多くの人を守ることを選択し、サキは一人を守ることを選択した。

どちらも己が正しいと信じ、どちらも譲れない両者。双方が満足する手段が存在せず、必ずどちらかに身を置くしかない時、傍観を許されない勇者が取るべき正解は何なのか。

リアは「いくら考えても解からないんです」と呟いた。

「レオンさんが私の立場だつたら、どうしましたか？」

もしもグレイスが語り部じゃなかつたら、なんて仮定の話で思い悩んでいたらしい。

魔王に勇者の教育が勤まるとも思えないけれど、リアが余りに思い詰めた表情をしているので、話に付き合つてやることにした。

例えばさ、と前置きする。

「もし、グレイスがじいさんを助ける事が出来なかつたなら。宝玉をぶつ壊すしか道がないのだとしたら、サキはそうしただろ。お前はそれを黙つて見ていらされたか？」

「……うう、なんとしよ止めよつとした、と思こまゆ」

「サキが悲しむとか、じいさんが助からないと解かつていて、それでもお前はサキを止めよつとした。この国の連中を守りたいと思つてそう決めた。そつだろ？」

「……そ、です」

「それはお前の中にある価値観がそつさせたんだろ？ 同じくらい大切としても、お前はほんのちょっとだけ平和を守る側に傾いていたんだよ」

「……。」

「サキだつて同じなんぢやないか？ 国の連中が困る事も、ひょつとしたらじいさんにまで怒られる可能性もあると解かつていて、それでもじいさんを救う為に宝玉を壊すとこう道を選んだのは、そつち側に傾いていただけなんだと思つ。ここまではいいか？」

「はい。でも私には、どちらが正しいのか解からんんです」

どちらかが善、という考え方は魔物という解かりやすい敵としか戦つていらない勇者だからなのかもしれない。

「お互い様なんだよ。サキも言っていたんだろ？ 深く考えるなって。どっちが良いとか悪いとか、立場が変わればどんなものだって解釈は全然変わるだろ。だから、自分が正しいと思つぽつと進むのが正解だと思つ」

「自分が正しいと思つぽつ、ですか？」

「やう。だからお前の質問に対する俺の答えはリアの信じた道、つまりサキをぶん殴つて止める、だろ？」

「わ、わたしそんな事しませんよ！」

まあ、とにかくだ。完全な答えがない問題にいくら突つかかっても袋小路に迷い込むだけ。リアは勇者だからか自分よりも”正義”つてやつに拘る節がある。だから今回みたいな場合はどこまで考えても答えなんて出ないだろ？

「でもひ、それじゃ絶対にどちゅかが悲しい思いをしますよね」

「うん。俺が言った答はそういうことになる。そしてリアが求めた答えは、きっとどちらもがハッピーエンドを迎える選択肢なんだろう。欲張りなヤツだ。

「なら、お前がもつと凄いヤツになるしかないよな。今回の場合、宝玉に頼らずじいさんを治せたなら、それで終わった話なんだ。そう考えると簡単だろ？」

どんな無理難題にも手を差し伸べられるようになるなんて、俺にはとても出来る気がしないけどさ。お前がなろうとしているのは人間が崇める神みたいなものだし。

「…………誰かを助けるつて、難しいですね」

「そんな悩むなつて。じこせんもお宝も無事だつたんだからそれで
良いじせん」

「うー、だつて……」

まだスッキリしないわからず壁にドーパンをアレンジしてやつ
た。

「終わりだ終わり。もう次へ行こうぜ」

何だそのいかにもビックリしましたって顔は。そんなに痛くなか
つたろ？

「あ。えと、」

「今度は何処へ行くんだ？ もうこの国に留まつてすること無さ
うだしな」

今度はもつと気楽に暇を潰せる展開を望みたいもんだ。

「そなの。もう一生分褒められたりさり、なの」

「うおうーーー！」

突如乱入してきた声に素でびびつた。

ん、ヒュースした手をひざに向かっている真っ赤髪の頬までが少

し赤みを帯びてゐるのは、恐らく主に無理やり飲ませたせいだろ
う。

「サキちゃん！ あれ？ 式典は？」

「もう皆べらんべらんのぐでんぐでん、なの。あれはただ騒ぎたか
つただけな氣があるの」

意識を向けると、主賓が居なくなつてゐるところに遠くに感じるダンチヤン騒ぎトーンショーンが収まる様子はない。完全に宴会モードに突入しているみたいだ。子供王と香氣じいさんの笑い声が一際大きく木靈してゐるは別耳だと思つておひや。

「どうわけで連れてつて、なの」

主人の傍にいなくて良いのかといふ俺達の間に、「問題ないの」とこう一点張りしか返つてこない。

「ね、レオン。リアつち。お願ひなの

「サキちゃん……いの？」

「前に言つたはずなの。一人の事氣に入つたつて」

その言葉にびっくりしたよつて眼を大きくしたリアだが、やがて大きく頷いた。

「うそー、サキちゃん。これからも宜しくね

」「ううううう、なの」

……ま、いつか。

* * *

その日の夜遅く。

既に戦場跡と化した式典会場の片隅で、一人だけが生き残っていた。

「あの子は大層私の事を慕つてくれております。それはとても嬉しいことです。しかし、今回の一件を知つて、サキに対する一つだけあつた懸念が現実のものになつたと思つたのでござります」

サキはラインハルトという人物を絶対的な第一位に据えている。その考え方が、サキを今回のような行動に走らせてしまつたのだろう。運良く事無きを得たものの最悪の結果も十分有り得た、と再び元の座に就いた老人は若干落ち込んだ表情をしてみせた。

「サキはこの老いぼればかりを大切にしそぎて、自分を余りにも軽視している。王もそう思われたことはありませんかな」

「ああ、それは僕も良く解かる気がするよ」

主に寄り添うサキの姿を思い出してグレイスが相槌を打つ。死屍累々と酔っ払い共が寝そべる光景の中、余っていた野菜ステイツク

を手で掴んでパキッと齧った。

「ふと思つてしまふのです。もしも私が居なくなつたら、あの子は空っぽになつてしまふのではないか、と」

シャリシャリと野菜を噛む音だけが響く。行儀の悪いそれに老人が一瞬眉を顰めたが、今日くらいはいいかと自らもひとつ手にすると、一気に半分を口にした。

「それで、リア殿達と同行を？」

「はい。彼らとは初対面とは思えない程にサキが打ち解けてありますからの。彼らに同行して世界を回ることで、大事なものを見つけてくれればと」

「鬼の田にも涙、か」

「なんですかな？」

聞こえないような声だった筈なのに素晴らしい地獄耳だ。グレイスは肩を竦めて「何でもない」と惚けて笑つた。

「娘を授かることが出来なかつた私にとってサキは実の娘も同然ですからの、寂しいという気持ちは当然ありますが……ほつほ」

「わが国としても偉大な守護天使を一時的に失う事になるのか。まあ、じいが決めた事だ。仕方がないと思つて諦めるよ」

「心配要りませぬ。語り部の力がこの国を守ってくれるのですから。……何時の間に語り部として覚醒なさつていたのかは、この際不問

に致しました。まさか勤めが面倒くさいから黙っていました、などといふ理由では間違つてもないでしょ？」

「はつはつは。眼が笑つていないよ？」

「笑つておりませぬから」

何処に隠していたのかさうと突き出された今後のスケジュールには、語り部としての勤めもキッチリと記されていた。

「…………。秒刻みはやつすぎだと思つんだけビ」

幼い王はちよつとだけこのジジイを助けた事を後悔した。

「明日からまた忙しくなります。王もサキが居なくなる」とを寂しがつてばかりはいられませんぞ？」

思わず噎せ返つたグレイスを、自称親代わりは面白がつて見ているのだった。

1-8・「終わりだ終わり。むつ次へ行ひませ」（後書き）

今回で一章完結です。

ここまで付き合っていただいたて、本当にありがとうございます。
少しでも楽しんで貰えたなら嬉しいです。

評価、感想、ツッコマ、指摘など、一言でも頂けるなら是非お願
いします！

今後の更新予定などは、活動報告ページに書きたいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5998w/>

手を引く勇者と引きずられる魔王

2011年10月10日11時58分発行